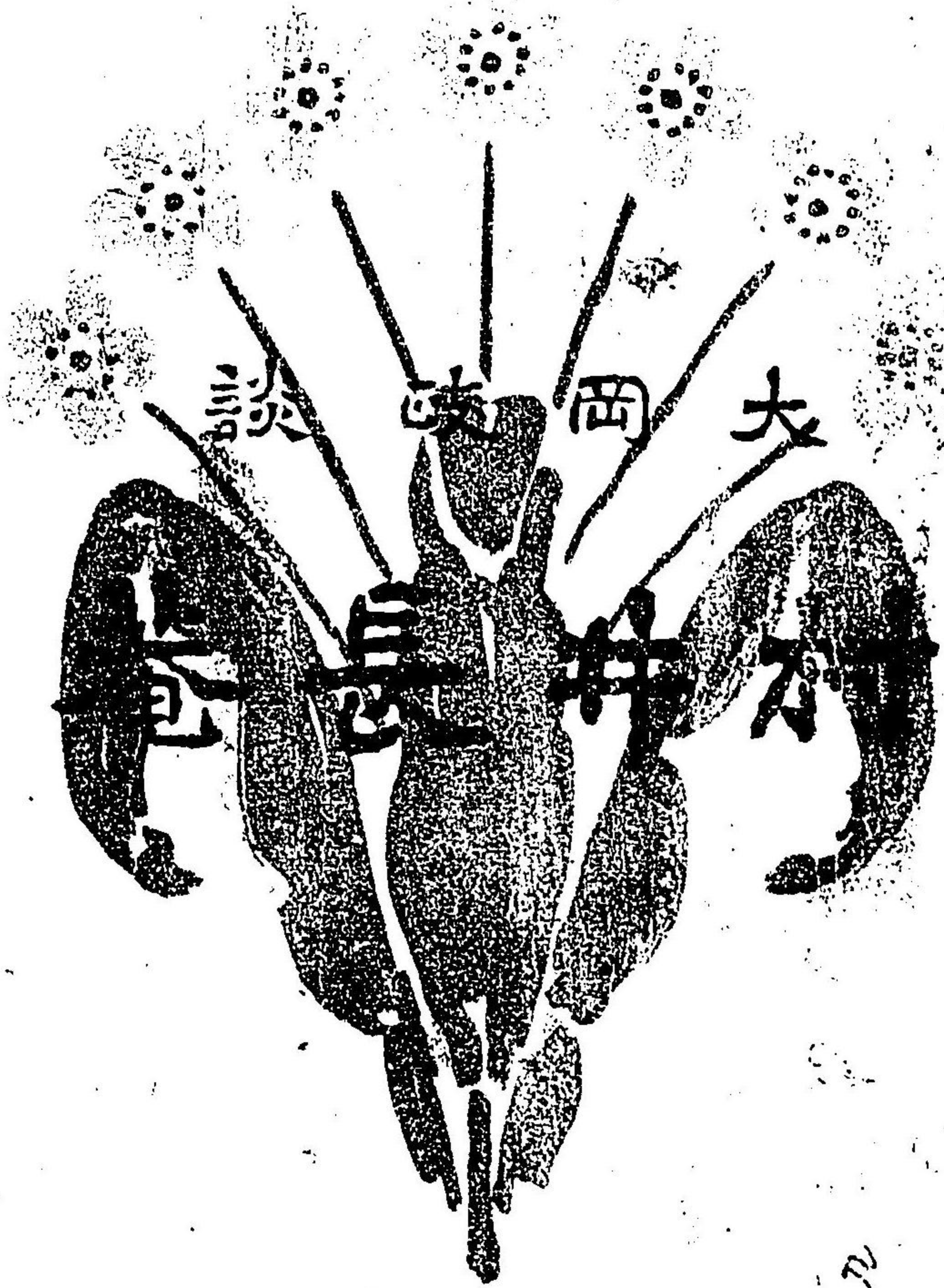
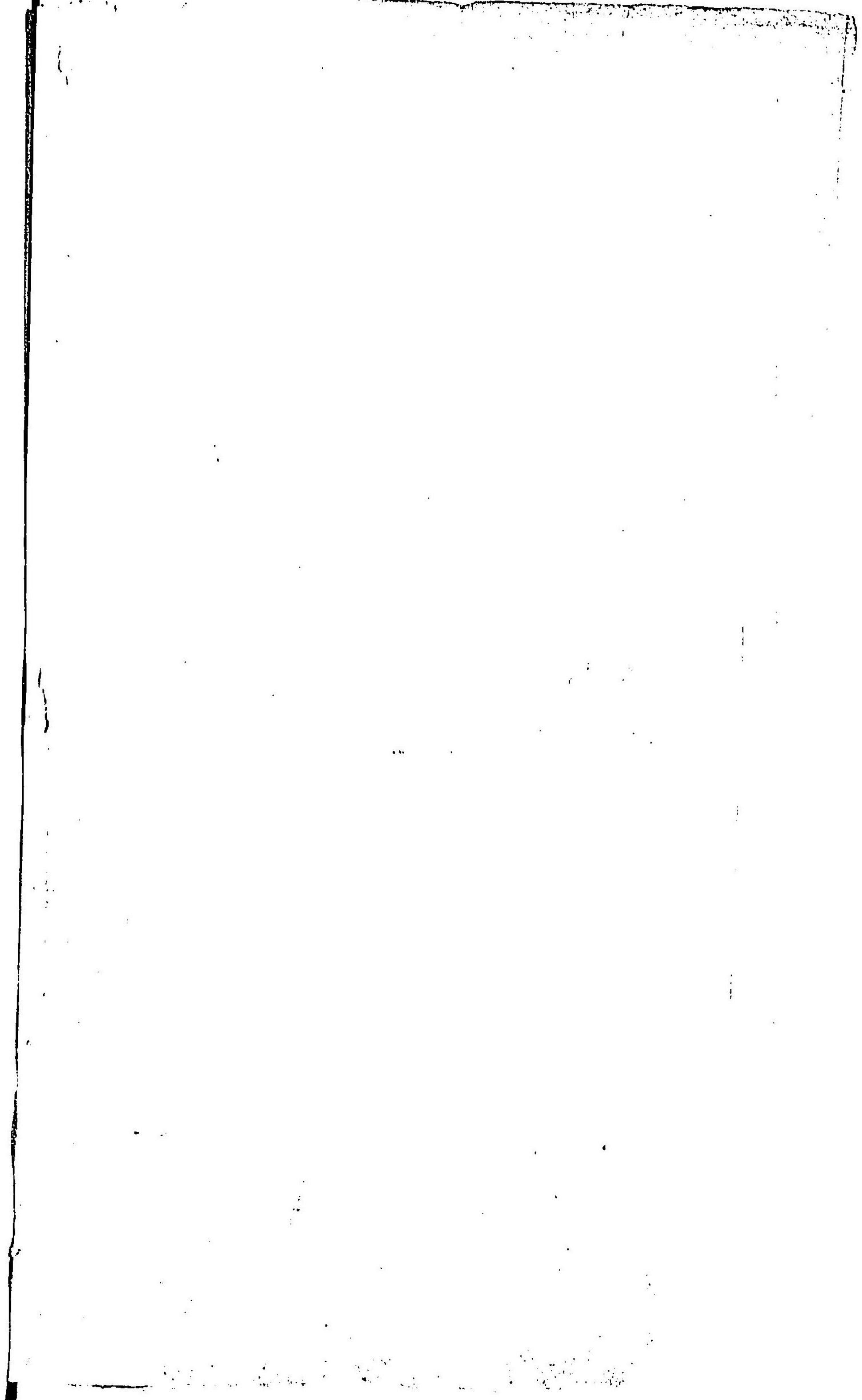


新講談叢書



左久良書





千代子

329-70

(一) 村 井 長 庵

新講談叢書

第一席

大岡政談 村井長庵

塚原澁柿先生口授
大川馬嶺君講演
大阪毎日新聞社員速記

明治
42 0 28
内交

え、申上げます、此れより「大岡政談」中の「村井長庵」を辯じます。が、「一體が講談で力とか俠客とかの世話になりますると大きに致し好い。すなはち板を叩いて「ヨイシヨ」斯う身を構へるか、「お若えの待ッしやい」とでもぬツと出ますと。演者にして名人な直ぐ其の當人が谷風とか雷電とか、乃至幡隨院長兵衛とかに爲るのでありますから、

面白い。話が活て居る。處が此の長庵は左様は参りませぬ。彼は泥棒の人殺しの、終局は引廻しの獄門の言渡を受けた悪黨でござります。馬嶺も今まで種々様々な真似もして見ましたが、自身まだ泥棒も人殺しも致しませんければ、引廻しにも獄門に引つた経験がございませんから、ソコが何うも、其の申上げる世話が眞正の人殺しや獄門の壺に倣つて、活て働らく様に見えるか如何かい心配の様にござりまするが。其代り右長庵の生れ故郷、其外も實地に調べ、又た人間は子供のうちに教育が大切で、この教育が宜しくないと、折角の汚染も濁點もない結構な白い糸が赤くも黒くもなる。と斯う申す所を第一として聴に入れませ積り何うか左様思召まして、お手近い家庭の讀物とも此覽になりまして、不馴な耳聞辛いところは幾重にも勘辨の程を願ひ上げます。扱て長口状は此免を蒙りつて。徳川八代の將軍吉宗公、有徳院殿の治世、享保年中に於きましての名奉行、大岡越前守様が「予も長年の勤役中種々な悪人をも取調べて見たが、長庵ほどの無慈悲な、剛悪な、強情な憎い奴はない。憎い長庵、憎い長庵！」と仰しやいまして村井長庵、とうとう憎井長庵と改名に及んだ其の憎むべき長庵の生れた土地は何處だと申しますれば、喉州は興津在、大平村といふ村方の番人……則ち穢多の長兵衛と申すが倅で長太郎と申した者でござります。甲「やい……」

此の穢多小僧め、汝、飛でも無へ事を爲やアがる。何だつて此の垣根に火を放つて……。長「やア旦那、其なこと云つたつて不可ねへや。己ア垣根に火をくつ附たんぢやねへ。火を附木に附けて抛つたら、火が自然に垣根にくつ附いて燃え出したんだ。己が燃したんぢやねへ。垣根の方が自分で燃えてるだ。」甲「何だ此の俄鬼め、いけつ太へ。己れが垣根が好き好んで自分で燃えるか。此ん盗兒小僧め！」お百姓さん勃氣になつてばかアり撲ると。長「あ痛え！旦那、非道へ事……」甲「非道へ事も何も有るものか。俺の家へ火をくつ附やがつて、騒いでる中又た何か引摺つて失せる積りだらう。さア踏縛るから動きアがるな。」と云ふ時に又近所のお百姓衆が二三人駈附けた。乙「何だ」。又た長太郎の悪事アこきやがった穢多の癖に……。丁「イヤ此奴が、悪事アせる上に剛情吐つたら。一昨日も觀音堂の賽銭箱に盤を入れて賽銭を攫ませるから、其な事せるなと云へば、己が賽銭盗るんぢやねへ、盤が挟んで上るから拾うんだと吐きやがるわ。いけ太へしい！」甲「爾うだらう、今も己が家の垣根に火を放て、同様な言拔を吐いてやがる。此な奴が一疋居ると此の村中總體が安心ならねへ。賽巻にして川中へおッ陥ろ！」大勢さうだ穢多小僧の一疋ぐれえ打殺したつて死ねりもねへ、やッ附ろ。」と村のお若い衆の手に掛つては唯今でも溜りません。況て……

年近くも前の享保年中、駿河の山中、甲州寄の村方の事でございますから人氣は荒い。長は免なさいよう。泣叫ぶ長太郎を往成りに取て押へてぐるぐると巻といふに致して、村脇を流れる小島川、すなはら興津川の上流でございます。其中へ投げ込んで仕舞うと立ち騒ぐ。實は此時長太郎も、此川の底の水屑、河虎の子分にでも爲つて了へば、後々に至り、重兵衛夫婦、藤掛道十郎、其餘多くの死人も怪我人も出来なかつたでありましたらうが、其處は一寸先は闇の世の中。棄てる神あれば助ける佛が又其所に現はれて、丁度其の場所をお通りになつたのが興津の清見寺の方丈様でございます。方ほう、何か物騒がしい、あれなる子僧の仕置をする様にも相見える。一命にも關はつては不憫な事じや、助けて得させい。と有難いは出家様、出附の役僧に仰しやいますから、心得た役僧其旨を傳達いたすと、お百姓方も豫て崇め尊とんで居りまする方丈様の事、耳え、助けるのは仔細ございませんが、此奴は泥坊に火附でございます。方ほう盗賊に火附とは容易ならん事。併し子僧は幾歳になる。長「十二でございます。方十二やそこらで其な悪事を働らくとは怪からんが、だが十五歳前は未だ小兒ぢやで……。」長「え、私は其の小兒でございます。方「こりや厭つて居れ。性質は餘り良くない方とも思はれるが、愚僧が好く教化して、眞人間になるなら爲て取せたい



第 二 席

ちやから此者を手に取らせい、貰うて歸るぞ。」大慈大悲の方丈様、こゝで長太郎が一命を貰ひ受になりまして、清見寺へお召連れになりました。

悪小僧の長太郎も、寶巻で川へ投げ入れられるのは餘ッ程怖かつたと見えまして、清見寺へ引取られてからは今迄とは打て變つて神妙な子供になりました。方丈様も、人間一人拾ひ上げた様な氣がなすつて、方丈様を寺へ置くにしても親元へ好く掛合つて、其の承諾を受んければ不可ん。聞けば番人の子じやと云ふが、其邊も好く取糺して見い。」と役僧へ命じになりましたから役僧も驚いた、役へえ、番人。穢多の子などを寺へ置きに爲りまして……。」方丈ニ穢多じやとて非人じやとて構はんわ。人間に變りは無いの。人が其様な名を附たのぢや。俺が目からは無差別ぢや。」と此の和尚様、流石に不垢不淨の奥旨を得てお在でなさる。役僧も仕方が無いから、此から其村の太平といふへ參つて、長太郎親父の長兵衛といふ穢多を尋ねると。居は居たが、六十餘の老人で、然も老病。役僧の咄を聞くと、長兵衛「あゝ難有い。私も彼者が何うなるかと思つて其れが心配で死なれませんでした。方丈様の御手許

へ上つて、終局に彼者が尊い坊様にでも爲つて呉れますれば、私も安心して往生が出来ます。あゝ難有い。何うぞ此上とも此の老夫の後生を助けると思し召しまして……。」と手を合せて喜びましたが、父の長兵衛は其晩安心の息を引取りました。此處で方丈様も彌々不憫が増す、其れにしても當人が穢多の人別では工合が悪いと、門前の駄菓子屋の重兵衛といふ者の子にして、此ですつかり以前の足を洗はして、夫れから死んだ親父の望み通り坊様にして往々は一ヶ寺の住職にも爲て遣らうと思し召しまして、長太郎を剃髮させて、長善といふ名を下さいました。方丈、長善や。」長「はい。」方「今日は晝から興津の本陣の法事に行くから供をしるよ。」長「へい。」一體清見寺は偉い格式のある寺で、朱印地も澤山ついて居る大寺であります。當代の和尚様は至極直な、一向そんな格式などに構ひなされぬ方でございますから、納所の坊さんの四五人も連れて、徒士若黨に駕物か何か所を、お小僧の長善一人を供になすつて出ました。方「長善や。」長「はい。」日は先方が富豪で、殊に親の法事といふのだから齋食も定めし立派だらうが。餘り又何か食べ過ぎてお腹など損傷つてはならぬぞよ。諸事控へ目には行儀を善くするのじやぞ。長「はい。」と云つたが長善、あ嬉しくて溜りません、長「占めたぞ。今日こそ本陣の料理

いふのだから定めし美からう。何でも思ふさまツンと食つて、何の腹や脊が些とやそつと振
 舞だからつて構うもんか、口から出まるで食て〜菓子でも餅でも手當り次第に煩張つて、
 何でも此の半年ぶりの甘い食の食倦をするんだぞ。」と何所迄食意地が張つて居るのか分りま
 せん。腹では色んな算段をして居る中に聴て参りましたのは興津宿の大本陣の井上傳兵衛が
 玄關先でござります。先方では、最う方丈様が御出になる頃と待受をして居りました事と
 て、主人を初め式臺に出て出迎を致す、お供の長善も今日は相應の待遇を受けまして、座
 敷へ上げられる。侍に仲間二人は表の方でゆつくり休息といふのでござります。爾う斯うす
 る中に仔細も濟んで、方丈様は奥の間で主人夫婦、その外首立つた親類などに給仕をされな
 がら一杯召上る。長善は中の間の小座敷で、かの待構へてゐた齋食の馳走と申すので、
 順て其處へお膳が出た。お供の小坊主の膳の事だから大した料理でもござりますまいが、長
 善の目には宛も百味の飲食だ。長やア立派な膳椀だ。寺の朱塗のは最つと大きい、斯ん
 なに奇麗じや無へ。中に何が入つて居るだらう。お蓋の上からでも甘い香ひがぶん〜する
 な。あ、好い香ひだ。明て見やうか知ら。併し明けた處へひよつくりお給仕にでも出られる
 と間が悪りい。矢ッ張り、召し上りまし、と言れてから喰う。あ、其れでも此皿の赤い羊羹

を一つ撮んで食べたいな。」と立ち切れなく爲つたから長善、そつと手を出して彼の寒天の紅
 羊羹を一つ、撮み上げた所へ、次から致して給仕の若者が「えへん！」と云つて入つて來ま
 して、若、是れはお待遠さま。此からお給仕を致しますから何うか寛りと……。」と云つて笑
 つて居ります。笑つて居るのも尤もで、長善は今手に撮んだ羊羹を、食ふ事も出來ず、置
 事も出來ず下手な鰻魚を釣上げた惠比須様の容でまご〜して居りますから、給仕の男も餘
 まり可笑くて氣の毒にも爲りましたか、若、何うぞ手盛りで自由にお櫃を此處に置きま
 すから……。」と斯う云つて立つて仕舞つた。長善はホツと云ふ息でござります。長、あゝまア
 助かつた。今の奴に出られた時、己はまア何う爲やうかと思つた。いやもう意地の汚ない真
 似なぞは爲ぬことだ。仕方が無い、那奴の又た出て來ぬ中にさつさと食う。と長善そこ〜
 には膳を喫て仕舞ましたが、其ッ限り給仕の者は出て参りません。そして……
 さうな金屯だの、慈姑だの、竹筍だのが其の眼前にあるのでござります。

第 三 席

此處らが人間の肝腎な處でござります。此れが教育のある、良い育成の者でありましたら、

決して紅羊羹も撮まず、然うがつく物も食たがらぬでございませうが、情けないかな長善は、十二年まで無教育、漸やく方丈様の手へ引取られて来ても、真正の今の學校でする様な完全な教育は受けませぬ。其れに第一、性質が良くない。放火に泥棒、其の泥棒根性といふが今むら／＼と出ましたので、長爾うだ、斯う遣て置いたからとて禮も云はれずに家の奴等に只だ食はれて仕舞んだ。ソンなら己が持て行かう。チンの禮も云れずに此の甘さうな物を只だ食れて間尺に合うもんか。」と云ふが否な手當り次第に懐ろから袂から脊中の方へ迄も押込んだ。何うして最も食て杯る暇は無いから、硯蓋でも向附でも無暗に捻込んで。さア斯うなると最う用は無いから、長あ、方丈様、早く歸つて下されば宜のになア。何時まで愚圖愚圖酒なにか呑でるのだらう。」と首を長くして待て居ますと。奥からどや／＼方丈様は立でございます。」と店の若い者が遣て来る。長やア難有へ、漸やく歸りかい。」と長善は其處に出ます。方丈様は大層な機嫌で、見送りの人々に挨拶をなすつて、長や、これは種々雑作になりました。はい、はい、いや長善、其方も十分の齋食を頂いたことであらうの。コレ好く皆様に禮を申して……。」十分頂いた處ろでは無い、十二分に竊ねて居ます、懐ろも脊中も精進料理で一杯だから、禮を」と言ふても、辭誼も出来ません。方、コレ何故

然う突立つて居る。好う手を突いて禮を申さぬか。」と言はれましたから長善もう仕方が無い。長、馳走を頂きました。難有うございませう。」と、ひよいと頭を下げると、懐ろから蜜柑が一つころ／＼。慌て、其れを隠さうと致すと、今度は栗の金屯が袂からぼたり！ 長、これは長善、何うしたのだ。流石の方丈様も赤面なすつて、皆々の手前、叱りなると。もう破れ綻れの度胸を決めました。善え、これは私が戴いたので、持て歸ります。」方、持て歸つて何うするか。」長、同宿の者に給へさせます。方丈様は存知が有りますまいが、お寺のお菜ッたら何時でも人參と牛蒡ばかりで、鹽はか辛くてカラ食られた物じや有りません。だから偶にや斯う云ふ馳走を持って食させ無きや皆な干死んで仕舞ます。で人間的に、私め私め持てつて遣るので。詰り佛の慈悲です。」方丈様、目を瞑つて聞いて、方、お、左様か。いや檀家の方々。」と主人初にお向に爲つて、方、お聞の通り此れなる小僧め、私が寺の飯の菜が不味いと云つて、料理を頂いて歸つて大勢に食させると云ひますわ。實は私も知らん事ぢやが、兎に角手落は私に有ります。不嫌の段は私に面じて免して下され。慈悲忍辱を專一の方丈様、斯く身に罪をお引受になりました。寺へお歸りに相成つたが、お寺の納所は此事を侍仲間から聞きますと、さア承知しません。傳長善、怪からん事を云ふ

奴だ。己達が何時お寺の菜が不味いと云つて不平を零した。己が散々盗みを爲やがッて露顯の尻を方丈様に嫁けて、己達までを引合に出す。太へ奴だ。」と行成り長善を捉捕へて撲り飛ばします。長「あ痛へ！」納「痛へのは手前の頭より、痛くもねへ腹を探られる此方の軀だ。手前の様な師匠様に迷惑を掛ける奴は、たとへ師匠様が免さしつても俺達が承知しねへ。さア法衣も衣服も脱いで、出て行て仕舞へ。」と大勢寄つて法衣を引剝いで、衣服までも脱せますと。懐ろから着中にまで押込んで来たかの馳走がばら／＼落ちます。甲「ヤア此物なんだ。」乙「爾うだ此物なのだ。成る程此の蓮根の煮附は甘さうだ。」丙「え、下卑るな。其な物を取て食うと貴様も長善同罪だぞ。」乙「馬鹿云つし、淨穢不二だ。況て人間にこそ罪はあるが、蓮根や大根には咎はねへ。」長善、到頭禪一つで追出されて、門前の駄菓子屋重兵衛の家へ遣つて參つて。長「お父さん、私ア皆なに虐められて、お寺から逐出されたア。」重「何うしたんだ。」と聞きますと。此處でも長善嘘を吐いて、長「私が方丈様に可愛がられるので皆なが嫉んで苛虐るのだ。」重「そんな譯は無へ筈だが。」と納所で聞くと右の始末。只だ方丈様は何とも言はれず、手箱から金子を二兩包んで下すつて、方彼者をば當地へ置くな。此金を路用にして何れへか旅立たせるが宜い。」と仰しやつた切り。其處で長善は夜逃同様に興津を立つて、

江戸表へ出たのでございます。

第 四 席



詰らぬ食意地から師匠の方丈様に拾られて、養父の重兵衛にも其家を追出されました長善路用の金を二兩貰つて夜に紛れて興津を出掛けた。其の時分の二兩の金でございます。今の二三十圓が價にも向う。其金を緊かり臍の所へ胴巻で縛し附けて、丁稚小僧の抜参りといふ姿、糸桶を背負て、菅笠を冠つて、手に一本柄杓を持つて、長「ナニ此杓せへありや道中は深山だ。もう己も今日から清見寺のお小僧の長善じや無くつて以前の穢多の長太郎だから何を爲たつて構うもんか、火放け泥棒搔拂ひ、何でも好い、手近い所からそく／＼遣りながら江戸へ行かう。」と非道い奴でございます。だから諸君も、斯う云ふ質の悪いのが若しは知合の中にあつたら、成るべく手元で教戒を加へて、世間へ開放さぬ様にして戴きたい。現に近頃、或る知名の人の娘ごの何子さんも、親の手元を離れてから亂行が彌々烈しくなッて、大分新聞にも書かれましたが長善も先づ其形、其晩は夜通し歩いて、翌朝は沼津で朝飯を食て、又ぶらり／＼と三島の方へ遣て行く。伊勢参り、一文遣らうか。」と呼掛けた者がありま



する。長「あい。」と振返つて其人を見ますと、中日代の立派な男で、甲掛に脚絆、縞の袴の尻端折りといふのでございます。長「叔父さん難有う。」と長善柄杓を出しますと、男「手前、新前だな。伊勢参りが柄杓を出すに叔父さんと云ふ奴があるものか。旦那と云ふんだ。ソレ與れるわ。」と五文許りばら／＼と投げました。長「やア、然うか、己アお前を兄さんと云たかつたが、それちや悪からうと故と叔父さんと崇めたのだ。お前も何者だか知らねへが、旦那と稱ふ品格でも無いね。親方か？」男「面白れへ、手前の眼にも爾う見えるかい。併し親方とは有難てへ。」長「親方で難有へなら、親分と云つたら猶好いだらう。其れとも貸元かね？」男「申戯いへ。己ア其んな博奕打なにかじやねへ。白素丁面の大工だ。職人だ。」長「は、は、は、尋常の大工が其んな草鞋の穿き様を爲るものか。お前のは早穿てへ穿き様で、穿くにも早へが脱くにも早へ。真正は盗兒の穿く草鞋の穿方だ。」ときつぱり云ふと、圓星を指れたのか其の男は驚いた面で長善を見詰めました。矢庭に前後を見廻した。未だ朝の中だから野良へも百姓は出て居りませんのに、幸ひに此の時は通行の旅人も見えません。で、男貴様も盗兒かへ？」謂ゆる蛇の道は蛇とか、目の寄る所へ球とか、類は友とか申すのでございませう。長善「又もや」は、は、は、と笑つて、長「まア其んな者だらう。」男「驚いたなア、其の小僧の癖に草

鞋の穿き様に目を着けるてへ。感心だ。今に好い和尚に爲れるせへ。何てへ名だ。」長善の長太と云ふよ。」男己ア人形の三次てへ甲州無宿だが、ちツと彼國を食へ込んで江戸へ脱らかる。……貴様ア何處へ行く？」男己も清見寺のお小僧だつたが、少し不首尾で江戸へ行くのだ。」三其奴ア妙だわへ。ちや同伴にならうか……。」と三次は些と考へましたが、三長太、貴様ア關所手形を持てるな？」長善は如何にも持てるのでございませう。其は養父の重兵衛から貰つた宿の役人の判の据つた道中手形といふを懐中しては居りますが、調證に一番無いと云て遣らう。そして此の眞正の盜兇の、何ういふ智慧を出して關所を潜るか、其術を見て遣らう。と風と胸に浮みましたから、長己ア無へよ。」三無へ奴が有るものか、貴様、清見寺のお小僧だと云ふのだらう。清見寺の小僧が暇を取つて江戸へ遣られるのに、箱根なり谷村、仙石原なりの關所手形を與ねえ奴があるものか、又た貴様が其れを貰はねえで迂濶迂濶出掛る、そんな間拔な眞似をする質でねえのは、己も此眼で睨んでる。正直に云ひねえ。なア有るだらう？」長處が無へよ。己もお寺を夜逃に爲たんだから、其様悠長な掛合は出来なんだ。今でも追手の掛る身分なのだ。」三ふう。ちや眞正に無へか。」長兄弟に嘘を吐くものか。」三むうちや何うして關所を越す？」長だから伊勢參りに爲つたのよ。」三成

第五席

る程、然うか！」小僧の抜參りは大廟の神慮を畏むといふ廉で、何處の關所でも通行を許されたものさうにムります。長兄も伊勢參りに爲ねえな。」三不可ねへ。己アもう年齢が不可ねえ。抜參りちや通らねへ。」長厄介な年齢だな。圖體ばかり大きくつて……。」三眞正に然うだ。」と苦笑をして、三仕方がねへ。ちや裏木戸からこっそり行かう。裏木戸とは問道の事でございます。長裏木戸は何う通るのだ。」三貴様何ぞに教へても駄目だ。逆も行かれない。」長でも心得の爲め……。」三生意氣な事をいふ。……黄瀬川から竹の下へ潜つて金時山から明神山、堂が島から太平臺、湯元を抜けるのだ。」長命賭けか。」三勿論だ。」長そんなら己が教へて遣らうか、最と譯なく關所を越られる法がある。」三ほう？」長だが、奢るか。」三嘘で無きや何でも奢る。」長金は有るか。」三些とは有る。」

長善の長太郎小僧、その時舌舐摺を致して、長善哉々々、錢が有るなら教へて遣らうが、併し此れとても先づ命賭だよ。餘ッ程機轉を利かして、鈍痴を踏まねへ様に立廻らなげりや不可ねへだが、お前に其れが出来るか知ら。兄いお前は村芝居の一つも演たことが有るのか

ね。三「不羨云ふな。此れでも己は芝居となると忠臣藏なら勘平で、二十四孝なら勝頼だ。人形てへのも己の面が人形芝居の花方に似てへるてへので、近所の娘子が附て呉れたのだ。」

長「やア恐れ入つたな。色男金と力といふが、力は知らねえが、金の有る色男だから兄いのは豪いや。ソソなら教へて遣らう。先づ恚うするのだ。」三「うう。」長「關所の一町ほど手前から己が先に逃げるのを、兄が後から追掛けるのだ。で己が「助けて下さい」ッて番所へ駆上つて突如裏手の方へ驅込むだ。ソラ番人が慌て、己を捉めへに来る。其の動雜々紛れに逃られるなら兄きは逃つても好いが、若し左様行かなけりや、「今こゝへ驅込んだ小僧は盗兒でござへます」と、お前が己を泥坊にして仕舞うのだ。」三「ふーむ、盗兒が盗兒を盗兒にする？其から何うするだ。」長「己ア外の事は何にも言はねへで、只だ助けてッッて震へて居るのよ。すれば役人め等は己を胡麻の芽生だと思つて奇て多集て穿議をする。ソラ兄いの方は自然等閑になる理屈だから好い隙を見て飛擲くのよ。理由はねへ。」三「成る。こりやア好い！ソレで己が逃げると番所は騒ぐ、其の又た隙に貴様が逃げるのか。」三「何アに、己ア逆や、ねえ。お前が逃げたら己ア跡で、「泥坊は彼奴です、私ア彼奴に追掛られて逃込んだですが、怖くッて口が利きませんでした。私ア此處の通りの扱参りです」ッて、大手を掉て關

所を通るんだ。」三「成な成る程！いや手前の方が何うしても悪黨は上手だぞ。併し其の場所に間隙が無くッて、己が飛擲かれなかつた。何う爲るか？」長「然うすりやア己は胡麻の駆出してへで、踏縛られて小田原へ送られる。兄いも被害者なんだから一緒に引れて山の中を歩かせられる。ソレ輕身で山路を歩くんだらう。谷へ外れるとも山へ潜るとも。乃至其晩小田原の宿から高を飛ぶとも、何でも勝手よ。なア解つたらう。」三「次は膽を潰したのでございます。言ふ事が一々泥坊の理詰に協つて、成る程左様したら樂に關所が越えられさうだから、三「豪勢な智慧を教へて呉れたなア。だが貴様は小田原に送られてから何うして助かる？」

三「人の世話なんか焼かなくても好い。ソレよりも兄い今金が有ると云つたな。幾ら有る？」三「三十兩ばかり有る。」長「素敵に有るなア。で今己に奪ると云つたな。己ア小買を買つたり女郎買なんか爲せられ無くても好い。其代り其れを半分呉んな。十なな。三「次は又た眼を圓くしました、三「飛でも無へ。其ッ許しの事で十五兩！ねへな。己の方でも無理にとは云はねへ。お前が其様な抜道なぞして、猪谷底へでも落こちて骸骨に爲るてへのが可哀さうだから……。」三「三「えッへ。」長「夫れが氣の毒だから弟の己が、盗兒になつたり、縛

ふのだわ。假にも兄きとか兄弟とか云ふので無ッて誰が其な芝居を打
うむ、そりや爾うだなア。」長「金で出来る仕事かい。其よう、其れッ許しの
何うとも爲ろ。兄弟も何もねへ。」三「ちや遣うよ、十五兩……高へがなア。
へか！ソレに兄き、己ら泥坊になッても何か盗んだ物が無くツちや極りが附か
財布に五兩ばかり入れて渡して置きな。」三「何ンでへ此の小僧。附上りやアがる
の金巻上やがッて……悪戯るなへ！」三「次も餘り馬鹿にされると思つたから勃氣に
と。長「は、籠棒め。その五兩の金、寄越せと云ふちや無し、盗んだ見せ金に渡して置いて
のが何が悪いのだ。手前も案外盗兒眼の利かねへ奴だ。」言れて見ますと此も道理だから、三
うむ、さうか。爾う云やまア然うだ。」と三「次は又も胴巻の口から五兩程の金を我が財布に入
れて、長善に渡します。長善は一寸と廿兩の仕事をしたから莞爾物で、長「ソンなら少し急が
うせ。」と三島の宿をも通り過ぎて、山中新田から峠を越えると其處が箱根の宿。其關所は直
ぐ向うに見えます。長「おい兄い、確かり爲なよ。」三「む、手前も巧く遣れ。」長「まア草臥
れたから、此宿で晝飯でも喰てからにせう。」

第 六 席

何しろ長善も昨夜々一夜歩いたなりで、今朝沼津で少し休息で、とろくとして、其から
らく歩きではあります。四里何丁といふ箱根の山坂を登つて来たのでございませう。悪寒だ
ツても矢張り人間で、腹も減れば草臥れもしますから、長「此家で飯でも食つて行かうとして
猶ほ手筈の相談も決めやう。」と宿の取り附の一寸とした飯屋へ入ります。長「はい、免な
い。」女「は無用ですよ、今手が塞がッてるよ。」長「おや。」と見ると、は無用と云はれるのも
尤もだ、手に例の柄杓を提げて居ります。長「ナニ物貰へじや無へ、お客だせ。」三「然うだ
姉さん、此人ア己等の連なんだ。少し相談があるんだが何處か静閑な座敷は有めへか。」女
おや、然様で、親方もお伊勢参りのお仲間です。」長「好く伊勢参り、ッて云やアがる。お
客だてへに。」三「まア好やな。」と二人は案内の女中に伴られて奥の離室に通されます。と其
隣り座敷に晝食を致して居つたのが四十恰好の旅の武士。襦袢の股引に鷹野足袋、黒襟の
か、つた浅黄木綿の打割羽織といふのでございませう。で餘計なお話をする様だが、此の打割
羽織——脊割羽織とも申します。此の羽織の色と頭髻の恰好で昔は公儀のお旗本御家人か、

又は諸藩の家衆かと云ふのが直きに知れました。其中にも打割羽織に襟がかつて、染色が淺黄と来た日には、紛れもない家衆の看版でありますから、三次は一寸と見ましたが三「ナニ此の家衆方！」と高を括つて平氣で隣り座敷の縁側に腰を掛けました。盗見には公儀役人は可怖いが、諸藩の家衆の方は何とも思ひません。此から一本酔かせせる。長善は飲ませぬから三次一人でぐびぐびと呑る。此男、酒は好きだが直きに酔つて、酔うと調子の高くなる質。右の關所破りといふ大事な秘密の相談も、長善は小さな聲でこゝろ遣りますが、三次の方は時々大ッべらな聲を出して、長善に叱られては頭を掻きます。長眞正に仕様が無へなア。其様事ちやア此の仕事は危険ねへやア。手前、矢張り其んな調子で、甲州も失策ただらう。さア酒は廢て飯に爲ろ。そして勘定を濟して仕事に掛れ。」と茲で三次も腹を拵へて、情と用意の握飯返も支度いたして、此から勘定をして立たうとします。長善も笠を手に持て出やうと爲ますと。士「あ、お小僧待た！」お小僧と呼ばれたから長善は驚いて見ますと、其人は隣座敷に居た武士で、其の武士を今迄は後ろ向になつて居たから長善氣が附きませんでした。今見ると「あッ」と魂消た。長あ、貴方でしたか！」吉拙者だ。藤掛道之進だ。長善どの、不思議な土地で不思議な相談をして居られるの。」と熱と見ました。此りや

ア大變な人物に大變な所を見られたので。此の藤掛といふ武士は、前にも申した駿州は庵原郡小島の領主、一萬石松平下野守殿(後には代々丹後守)の郡奉行で、唯今江戸小石川富阪の上屋敷から駿河の領地へ歸ります其の途中。何時も寄附けの此の茶屋で晝食を致して居つた折柄といふので。此の長善をば清見寺で見知つて居るのでございます。人も人に寄つけりだ。此の藤掛に斯う云はれたのは地獄の淨玻璃の鏡に照らされたより尙だ苛いのだからさしもの長善もう答も出ません。「道奴的切り今の相談を聴れたな」と思つたか、ばらと逃出さうと爲ますと、士「逃るな長善。逃るとして逃さうか。汝れ以前の非人根性を未だ忘れんな。大それた悪事を巧むで、磔の咎だぞ！」關所破りは磔の咎でございます。殊に大事な箱根などと來ては草を分けての穿竅。其の飛尻は領主の方にも降り掛つて來ぬとも限りませぬから、藤掛も一生懸命だ。藤掛も一生懸命だろうが、捉まへられる長善の方は猶ほ一生懸命 捉まったら小島へ拘れて一生日の目を見る事の出來ぬ永牢と來るのは目前。夫れでは溜らぬから取られた袖を振拂はうと致したが道之進確り抑へて離しませぬ。其中の者も駈出して來る様子。最う是れ迄、長善早くくくくと帯を引解いてス、眞裸で前面の山の中へ逃込んだ。藤「汝れ！」と云つ 追掛ける。其前から小陰に

身を隠して見て居りしまた人形三次は長善が衣物を脱ぐ時、自分の財布のばつたりと落るのを見るより早く、其處は盗兒だ。ひよいと飛出して引摺つて、此奴も宿の裏手の方へとどしどし逃出した。驚いたのは茶屋の亭主、亭主藤掛様が何う爲すつたのだ。女、あの何ですか、非人根生の磔だつて……。亭主、あゝ、では矢張り伊勢参りが合方か何か願つて、お錢の下され方が少ねへか何かを云つて、投げ附けたのだな。いや太へ畜生だ。併し食つた飯代は拂つたか。女はい、最う一人の若い人が拂ひましたよ。亭主、ソソなら好いが、其の若い人は何處へ住つた。女、さア何處へ行きましたらう。と云ふ處へ道之進は息をせい。藤掛、残念だ、残念だ。と云つて歸つて來ました。

第七席

お話は轉つて、山へ飛込んだ長善は眞體の儘で命から一息懸命すたころと逃ました。漸やく一里の餘も逃げて、ホツと一息吐きましたのは山伏時といふ湖水の西側の抜道でございませぬ。眞正に藤掛の老奴め、非道い目に遇せやがった。併し膽を潰したぞ。彼處にあんな奴が居やうとは夢にも知らずか。ソレに又たあの三次の馬鹿めが馬鹿に大きな聲を爲や

がるもんだから、とうとう斯様な目に遇つちまつたのだ。おや其りやア然うとあの財布は何う爲たらう。おや？おや！と裸の體を彼方此方撫でぐるぐる廻つて其邊を探したがございませぬ。無い理だ。自己が帯を引解いて、裸體になつて逃る時落したのを、前申し上たる通り三次が持て逃たのでございませぬから、此は幾ら探したつても有る譯はございませぬ。長、おや！何處へ落しつちやつた！え、思へましい。思へましいは好いが——さア大變だぞ。あの財布の中へ己が關所手形を入れた。關所へ往つて、三次を逃して、ソレから己があの手形を出して、悠々と威張て通らうと思つたのが。おや！皆な番狂せだ。さア仕方がねへ。斯うなツちや此方が今度は、金時山から明神山へでも駈上らなふちや爲らねへ番に廻つて來た。併し宜いわ！命せへ有りや又た何うにでも爲る！と其處は悪黨の又た思ひ切りも好い。その丸裸のまゝで遣て參ると、一軒の百姓家が其處に有りまして、見ると中には多勢人が居る。けれども唯だごとごとと言つてる許りで、話らしい大聲も聞えませぬ。長「何だらう。」と長善は外から覗くと、其處に見張見たやうな男が居て、男、何よう見るんだ。汝何處から來た。長善、見上げると眞黒な奴で、熊だか人だか分りませぬ。お負けに其奴も素裸だ。長、うむ、博奕だな。叔父さんお前も取れたのか。寒さうだな。男、何う吐きやがる。

此の物貰へが、此な所孫々しねへで汝さッさへ行け。」長馬鹿な奴だな、人に挨拶の法も知らねへや。物貰へッたて手前に錢ッ片一つ呉れるとは云はねへや。この文盲爺！」男何だ此の乞食坊主が、好かと思つて伸張つて……。此の時分の斯う云ふ下等人種になりますと、何が喧嘩だか挨拶だか分りません。掴み合つた後で糺されると、何ういふ意趣で爲た事だか理窟も何も滅茶々々になつて仕舞ひます。誠に罪の無いお話で、「何だ〜。」と奥から又た四五人出て來ました。何れを見て背の高い、眞黒な、然も眞裸。長善自分も裸だから今で謂ふ對照の妙なのに可笑くなりまして、「お前等は一體何者だ。さう揃つて裸體なのは博奕で取れたにしても可笑いな。」男爾ういふ汝の方から名告ッせへ、此處ア雲助の日待場所浮世の人間の來る所で無へ。」と一人の年寄な奴は云ひました。長、お、爾うか、お前等、ちや宿の若へ衆か。ソんなら何でも無へ、裸も最も。己の裸體は今山中で追剝に出遇つて、身ぐるみ剥けた裸體なんだが、何しろ寒くて溜らねへ。焚火して呉ねへか。薪代は出す。何を云ふのか分りませんが、只だ此の長善が、年にも似氣なく舌に落附いて、怖けた様子などが些とございませぬ。併し岡引の下檢といふ者の様でも無し。それに此の益蔭の廻りへ坊主の來るのを此の仲間では「寺が來た」とか「丸設けた」とか申しまして苛く祝うものださうでございませぬ。

す。旁々、男、ア小僧さん入んねへ。薪代は縁喜で貰はう。火は好く燃てらア。當んねへ。」など、見徳を附る連中もありまして、長善、思ひ掛けなく火の馳走になり。湯出芋なんかを振舞はれてむしや〜食て居る。と其傍では彼の小博奕をぼん〜「や占た！」いや失敗つた。」といふ勝敗は區々で、喜ぶ奴も、踊る奴も、歎く奴も、愚痴を翻す奴もございませぬ。長善小僧、つく〜と見て居つたが、此時胸に考へました。「己も斯うやつて出掛けたもの、途中で飛でも無へ藤掛の老夫に悪事を聞かれて、追掛けられて、逃るつても逃さねへと怒鳴れたからは、實際迂可り出る事は出來ねへ。然らば暫時此の連中の中に隠れて、彦戸へ行くなり他所へ走るなり、其れは其の餘熱の冷めてからの事。左うで無くては出口々々に何んな網が張て、あらうも知れぬから。」と斯う分別を爲しましたから、其處らに轉がつて居る戦鬪力の無くなつた彼の敗卒共に、長、おひ、兄さん達、己ア貸元なつて云ふちやア無へが、餘まり前方、暇のやうだから、手慰の資本を些とばか貸して上げやうか。此金で遊びねへ。」とか、胴巻に入れて臍の所に今も緊かり括り附けて居た路用の金子、二兩の中から、一分の細銀を長善、一つ出しました。



第 八 席

金一分と申すと、一兩の四分の一、今の廿五錢の割合だが、此の時分は兩に一石五斗といふ米相場で、お刺に錢相場が兩に四貫文でございます。其等の勘定から割出すと一分の金は太した物で、ザツと當今の六七圓にも向ひませう。今でも箱根の山の中で五圓の紙幣を人足等に與れたら、貰つた方でも驚きます。其れが、乞食坊主かと思つて居た長善の手から出たのでありますから、皆な膽を潰した。甲「やア豪い氣前だなア。一分與れたせ。」乙「何だか可恐ねへ様な氣がするなア。裸體かと思つて何處からか金を出す。乞食かと思つて金持だ、天狗様の化けたんぢやア無へか知ら。」丙「何でも宜いや。此方も雲助だ。雲に天狗は満更ら離れた縁でもねへ。」丁「然うだ、劍呑がるより好く拜みねへ。此の天狗様は福の神様だ。」一分の光りは大層な物でございます。長善忽ち乞食坊主から天狗に上つて、福の神とまで拜まれて來た。此で長善、暫らく此處に足を留めて居りましたが、只だ居ても仕方が無いから徐ろく身に叶つた荷物を擔ぐ。もう其時分には藤掛の話も無くなつて、長善も以前の長太郎の、苛栗頭の一つ籠といふのだから、誰も其時の小僧だとは氣も附きません。結局は氣樂

な境界。其うちに追々肩も利いて来る。長持唄といふ「箱根八里はなアー、エー、ヨーッ、ヤレ〜」と聲を張上げる、此奴中々節廻しが六かしいものさうにございませうが、此の長太郎、天然に持つた美聲で、巧く唄う。宿々へ行つても「ソラ長さんの唄だ。」と飯盛などは飛んで出て来て、鼠鳴をして嬉しがる。云ふ始末。彼れ長太郎、測らずも雲助に成功しましたので、飛だ者に成功はしましたが、其れでも成功は成功でございませう。成功の雲助に彼は天分を安んじて、此で雲助の名人で一生を送つたならば、長太郎、其首へ細も附かすに濟みましたらうが、餘りちやはや言はれる物だから、這奴妙な考へを起したのでございませう。是「俺一番江戸へ出掛けて、此の咽で呻らせて遣らう。」と、雲助唄で誰を呻らせる氣が存じませんが、當年取つて廿三歳の彼れ、只今で申すと虚榮心の満々たる年齢とか申すので。或るは大名の御供にくつ附て花のお江戸へ下つたのでございませう。處が道中こそ長持唄も持てるだらうが、江戸では一向幅が利きません。箱根八里では誰も相手に成て呉れませんから、長太郎大きに當が外れた。併し折角江戸へ来たものを再た道中へ出る氣も致しませんから、此で口入宿へ頼んで此醫者の陸尺に住み込みました。陸尺と申すのは醫界の事、其の御界の中でも此醫者の怨を昇く「醫者陸」といふのは中々六かしい。流行醫者にでもなると其

の陸尺の男前から吟味して掛ります。其代り又た貰ひも多い。一寸と金持の大家へでも参ると、四枚肩の頭へ二兩位出るのは、一一新前には珍しくも無い事でございます。此の長太郎の住み込んだのは瀧野玄珠といふ南八丁堀の町醫者で。町醫者だけに物體振らない、頗る直な、心易い病家などで此酒でも出ますと、清元の一くさり位は陰り兼ねない質。世辭が好いから中々流行ります。瀧、玄骨や、留守に新規の病人は來なかつたかの。「玄骨といふのは弟子坊主でございます。骨、え、來ました。四丁目の質屋から使が來て家の小指が……。」瀧、何だ、小指とは。「骨」でも使の小指で小指と云ふのです。其の小指の神さんが仙氣が絞つて困ると云ふですから……。」瀧「これ〜、婦人に疝氣と云ふがあるものか、同じ病症でも其れは寸白と云ふのだぞ。」骨「何か知りませんけど、斯う下腹から腰部へ掛けて痛んでならないと云ふんです。其の原因は何だと聞きますと、此間赤坊を産んでから不好いんだと云ひますので……。」瀧「然うか、其れは寸白では無い。困つた病氣だな。何れで何うした。」骨「産んだ。産むから遣りました。」瀧「ほう、貴公が？何を與つた。」骨「山歸來を與りました。」瀧「いや山歸來は彼れは下毒だが。……何だとて。」骨「でも最う以來は赤兒を産みませぬ。産が嫌ひになる様にと申つて山歸來を與りました。」瀧「何だ馬鹿な。」と叱られる處へ、

第九席

兄弟子の玄能といふが出て来ました。能「いえ、玄骨が何か詰らぬ義を申して恐入りました。私が早速診察に参つて、別の手當を致して今方戻つて参つたので。いえ何に大した事はございません。……時に淺草の病人は如何でございます。」

兄弟子は流石兄弟子だけに、玄能は巧く太鼓を叩いて、先生の叱言を胡麻化して仕舞たのでございます。先生の玄珠も仕方が無いから苦笑を致して、まうむ、淺草の病人かい。彼れも困つた病氣で、金匱にも傷寒論にも、有らゆる醫書にも無い病氣のだから、爲方が無い。唯だまア當人の氣分の休まるのを待つと云ふのだが、其れにしても食物が些とも行かん。命は食にありと云ふ其の食物が行んのだから、其中に疲勞が來て、萬一の變でもあると私の面皮にも關はるので、誠にはや當惑での……能「へえ。併しあの娘さんが何う爲すつたとてソレは壽命づく。何も先生が診察を迅速へなすつた杯といふ悪評も……まソレは無いら。診察違ひも樂進ひで、頂で藥も服まなければ、病の根はあの通り切れ切てるのだから、療治上の手落は無いが、只だ私が受合つたので……能「へえ、何ッて受合に爲りましたの

で。まソレをりやア私も些と早まつたか知らんけど。娘さんの此の病氣は恐老吃と慮して進せると……能「何故又た其様事、仰しやつたんで。」能「爾う言はては困るけれども、私とても彼程の難症では有るまいと思つたし。其れに又た此處で匙先の功名へを見せて置けば、ソレ跡々の都合も好いと云ふもので……能「其れは如何にも道理な次第であるから、玄能も「成程」と才槌頭を両手で抱へて考へ込みました。すると縁先の庭の方から、「旦那、何を其様に弱つて居るんです。」と縁側に腰を掛けられた娘があるから、玄珠先生驚いて風を見ると、ソレは三月程前に雇入れた駕昇の長太郎でございます。まほう。手前か、何も此事は人に隠すにも及ばぬ話だから言ても好いが。併し俺の口から病家の事を免やかう云つたと觸られては困るぞ……。病人といふのは、手前も今日供で行つた淺草藏前の本屋の娘よ。年は十八、素敵な別嬪だ。處が何うした反機なんだか、箆筒何ソレ白い、小さな木食虫でへが出来るだらう。あの虫だ。引出から衣物を出して着る拍子に、其虫がひよいと彼の娘の唇に觸る。ぐにやりとでも爲たんだらう。アレと云ふ呼吸の引き合で、不思議と云へば不思議だが、其虫が咽の中へ飛込んだのだ。さア大變だ。確に活て居るんだから、彼虫が腹の中で成長くなつたら臍も何も食て仕舞はう。木の箆筒でも喰うのだから、人間の肉でも骨でも溜るまい

との心配で、どつと床に附いたと云ふのだな。」長「遠へねへ。そりや道理ですな。木の囃れねへ油虫でも、生血ぐれへは吸ひますから。」玄「申談は置いて、さア醫者に掛る。掛つたとしても其實は仕方が無いぢやの。其虫は疾うに便に交つて、最う葛西で船遊山でもして居る頃だから、腹には居ません。ソレを居る／＼とて大騒ぎ。胸でも痛むとソラ虫だ。腹でも筋張るとソラ虫だと、泣て騒がれるので誰も手の附け様がない。言つて聞かしたとて駄目。薬を盛ても飲ずか。有らゆる大醫方も匙を投げたのが、俺が玄關へ舞込んだのだ。俺も此處でこそと智慧を振つたが、何うしても不可ん。有る虫なら出す方もあるが、無い虫だから仕方が無い。ソレで玄能とも語つて、頭を割つてゐるだ。」長「成る程ねへ、こりやア六かしい。氣病でござね。旦那の頭痛は身から出た錆だが、あの嬢さんの氣から出た病だ。併し氣から出たなら、其氣を落着けたら宜でせう。」玄「好いとも、其の氣を落附けたいッて俺達も願ひでるのだ。」長「太郎は考へて居ましたが、長で其の嬢さんの病氣を癒すと、旦那の懐ろには幾ら入ります。」玄「然うさ、先づは百兩かな。」長「ぢや恁ういふ相談は何うでせう。私が考案で其れを癒したら、半方の五十兩下さるてへわ。」玄「ふう。貴様其れが癒せるか。」長「癒せるかッて、私にも受合は出来ませんが、ソレでも五十兩てへ勢ひでさア。彌々半方下さるなら

第十席

出来ねへ迄も遣て見まさらア。」玄「む、考へる？これは面白い。好い考案さへ出して呉れ、ば半方は屹と遣る。」長「屹とですか。」玄「うん、屹とだ。」と此處で約束が成立ちましたからさア長太郎は一生懸命だ「五十兩々々々、木食虫々々々、葛西船々々々」と何だか痴氣の三題咄見たやうな事を云つて居りましたが、其れから五日目でございます。長「旦那ア！」と云つて矢庭に玄珠が居間へ駈込んで来た、玄「何だ。何うした。」長「あア旦那、五十兩、こりやア確かに五十兩！旦那、懺いぢやア不可ねへ。私は確かに大成功だ。」と長太郎は踊つて居ります。

長太郎の飛込んで来たのに、瀧野玄珠驚いて、玄「長太、何うした。」長「何うしたも有やしません。五十兩です。」玄「五十兩は解つたが、其の療治の爲方は何う？」長「其う今御咄に申さうと思つたのだが、餘り急いだもんだから忘れッちやツた。先づ此茶を「ばい」」と云つてソレ茶だ。」長「序でに其の羊羹を……。」玄「いや飛でも無へ。併し遣るから早く話せ。」長「郎は貰つた羊羹をむしや／＼食ひながら、茶を呑んで、長「旦那、恁うです。先づ白胡



臺です。」「まむ。」「長、ソレを二三十粒、下劑の大黃か何かの中へ入れて、病人に服させるで
 す。然して此藥を服むと、虫が粉々になつて便に下ると仰しやるのだ。先方は一生懸命だか
 ら其れを服む。ソレ通じる。其中を檢めると、白胡麻が粒の儘まで現はれる。成る程木食虫
 が藥劑の方で粉々になつて出たのだと誰しも思ふから、ソレ病人も安心して、氣が引立つ、
 物も食へる。癒ると云ふ慥ういふ順に運ぶです。何うです此の趣向?」「ま、成る程、白胡麻
 とは好い所に氣が附たなッ。胡麻の皮なら腹の中でも便にもならず、正銘で出る。其れが虫
 かい。成る程此りやッ好い所に氣が附いた。」「長、いえ、氣が附いたぢや無い。目が附いたの
 で……。」「ま、目が附たとは、何うしたのだ。」「長、實は今塵溜の隅を見ますと家の白犬の糞便
 が有るんです。何だか白い物が中にあるから棒の先で掘くつて見ると、其れが白胡麻で……
 ……」ま、え、汚ねへ、貴様、そして其手を洗つたか。」「長、へえ。」「ま、洗は無へんだらう。犬
 の糞を弄くつた手を洗ひもし無へで茶を飲んだり、羊羹を撮んで喰つたり! 羊羹の方は貴様
 の口へ入るんだから棒はねへが、其の茶碗は又た客へも出す物だ。」「長、でも棒の先ですから
 ……」ま、棒の先だつても汚ねへ。ソレに其れぢや、第一其の考案は、貴様の腹からぢや無
 くつて、犬の尻からだ、然すれば褒美の五十兩は、此れは家の白犬に遣るのが順當だ。」「長、え

え、其そ其様事を今更ら仰しやツちやア……。旦那が彌々然う爲りやア私だツて、駄ツちや居ねへ。本屋さんへ行つて然う云ひます。あの虫ア白胡麻だツて……。」玄は、……、否や怒るなへ。戯談に云つて見たんだ。ソんなら何しろ此から出掛けやう。」と玄珠先生右の薬の用意を致して、浅草へ出向きます。行き着たころは最う夜分、丁度好い。玄え、瀧野玄珠は見舞で、如何でござ今日の内容は……。此娘の性質は右にも申した我儘の方だが、名は美しいお八重と云ひます。鼻筋の通つた、疲れて居るが其れは好い女。八何うも胸がむかむかしまして……。玄矢張虫が居る様ですか。八はい、何やら胸でうよくと爲て居る様で……。玄はア。おや矢張居るですな。其に然うよくと爲る様では、蕃殖ましたな。蕃殖たと聞ては誰でも驚きます。況て神經衰弱のヒステリー質とか云ふお八重さんですか。虫が殖れば自分は最う食殺される事と獨りて決めて、情け無い眼からぼろ／＼と涙を流して、泣で居ります。玄何さ、さう力をお落しなさるには及ばん、其處は愚老は醫者だから虫が殖えやうが卵が出来やうが、療治をするは譯は無い。だが只だ貴娘が薬を服されぬからは迄ともに致し方が無い。薬劑へ召上れば、虫を直ぐと出す、それは愚老が手の内で、現の證據といふのを目目に掛る。」と云ひますと、玄兩親も傍から勸めます。親、娘や、先生が

あ、迄仰しやツて下さるのに、ソレをお前が剛情張つて、虫薬を頂かんといふ法があるものか。何しろ眼の前に證據を見せると仰しやるのに……。此の證據を見せると云ふので、お八重さんも、ソんなら服んで見やうか。」と云ふ氣になりました。玄珠先生、占めたりと、此で手前味噌をさん／＼上げて、「此薬を飲むと、虫は粉々に碎けて出る。卵があればぼろ／＼に爲つて現はれる。但し其れには、黒暗で一口にごくりと吞下さなければ利ぬ。」と云ふので、お八重さんも納得して、其薬を服しました。服むと不思議だ。吐根とか吐酒石とかの嘔吐薬を盛つてあつたと見えまして、忽ち胸がむか／＼とツとして、尾籠なお話、寧ろ色消しなお咄で甚だ恐れ入りますが、お八重さん、げろ／＼とツと云つて吐けました。吐けたのを見ると、今吞せた白胡麻が直ぐ出たのだから、銅盞の中は一面、粉雪霰の降つたる様！ 長ソラも驚なさい。虫が出ました。この通り！ いや此の卵の多いこと、此が孵化たら連もお命が無いのであつたが、幸ひに愚老の匙先で助かりに相成つた、いや此虫は早く前の大川へ流してお仕舞なさい。いや怖いこと……。」

第十一席

兩親は喜ぶ、お八重さんは初めて笑顔を見せて呉れます。店の者も奥の女中も漸やくホツといふ息を吐く。此の安心の息を吐くのも偏に先生のお蔭だといふので、さア玄珠の持てる事夥多しい。日本一の名醫、大事な娘を助けて呉れた命の親、今夜の玄珠は神佛以上の勢力でございませう。で其晩はどツちりこと馳走に相成つて、玄珠、南八丁堀の宅へ戻つて参りましたが、此に詰らぬのは長太郎でございます。旦那の今夜斯う持るのも、己が白胡麻手品を教へたからだのに、教へられた弟子の旦那はあゝ奔走されて、肝腎の教へた師匠の己は誰も長太とも構つて呉れない。詰らねへ。酒は出たけれど己の方は鮭の鹽引に澤庵の香物だ。酌の爲人なんぞ一人も無へ。」とぶつ／＼言つて、其晩は供をして、歸つて来て寝ましたが、翌朝になると、旦那、昨夜は大變巧く行きましたね。何しろ豪勢なお勢ひだ。」と脈味を云ひます。此方は其な事とは氣が附かない。ま、お、諸事甘く行てのう。此も貴様の心附きた。長へ、お褒めぢやア恐れ入りますが。就ちやア何うかあの金を……。」ま、ナニ金だ、金をツたつて未だ受取らんわサ。」旦那はお金がお有なさるから、受取らんわサで宜うござうが、私共の御昇は爾うは行きやせん。昨夜から最う書入れですからね。何うか五十枚！」ま、不可んよ。然う手を出したつても無い物は出す譯には行きませぬ。貰へば道る。」旦那や

何時戴けませう。」ま、困るね。何時だつても此が謝禮だから。……此の盆迄には慥かに来るが……。」旦那、氣樂仰しやツらや、不可ませんよ。盆は秋の七月でせう。今は春の三月ですせ。未だ雑と百日以上もありませぬア！」ま、でも、でも構はねへ。此方の財布は空なだから私は何にでも咬り附きやすよ。旦那、後生です、出来なきやア内金を借てお呉んねへ。」ま、貴様、其んなお強飯を云つたツて……。」旦那、白胡麻に強飯は附物でさ。甘兩ばかり貸してお呉んねへ。」ま、其金を持て、貴様何うする。」ま、吉原へでも往て来やア。昨夜から胸糞が悪くツて溜らねへ。」ま、アそれはお樂みだの。羨ましい。」旦那、羨ましか旦那もお出なせへ。お供しやせう。美しいのが有りますせ。玄珠はにやりと笑つて、ま、でも淺草の様なのは有るめへさ。」ま、え、何と仰しやるんで、ま、は、何さ、此方の事さ。」旦那、此方の事じやねへ。今淺草と言ひましたね。……ぢや旦那、貴方はあの白胡麻に……。」ま、は、實は、まア其様事さね。」旦那、果れも爲ねへ。へ！え！」ま、何故そんなに己れの面を見る。」旦那、貴方は幾歳になりますで？」ま、己か。五十二よ。」旦那、五十二で十八たア。……旦那、若へねへ。」ま、些と少へだらう。十八ぢやア……。」旦那、否へ、氣が若へと云ふ事さ。」ま、氣と云ふけれど、己は未だ女房は無し。先方も

初縁だ。五十二と十八と幾歳違うか。四十迄違やアしめへ。」長爾う云や然様でせう。……ちや旦那、何うです。此の縁を私が媒妁を爲やうぢやとせへませんか。憚んながら……。」
 玄「う、爲て呉れるか長太、其をして呉れ、ば今の内金は直ぐ遣るが。」長旦那、馬鹿な。」
 と長太郎は手を振つて、長貴方も冥利といふことを存じ無へ。彼様な美しいのをお媒妁をするてへに甘雨とは何事です。勿體ねへ。」玄「ちや幾許寄越せと云ふさ……。」長「少くも百兩でさ。又た纏まつた禮を引出しなさらんければ、物品になつても其程の價打が無い。詰り貴方や奥様の爲めです。」玄「では残らずで百兩だな。」長「いえ、先のは別さ。其は其れ此は此れです。二口アて都合百五十兩！さア手を拍ちませう。」とう／＼長太郎は言價通りに漕附けましたか。さア此から何ういふ手段で此の媒妁を爲やう歟に苦しみました。けれども其處は悪才の働らく奴だから、何でも此は當人の病人か、附添の乳母に取り入るに限る。其れには駕昇の長太郎では謀計を施す途が無いから、寧ろ自分がくり／＼坊主に爲つて、瀧野玄塚が弟子の薙野長半？それも餘り好笑いから、さうだ己の養子になつた清見寺門前の味葉子屋の重兵衛の家の苗字が村井だから、名前も醫者らしく村井長庵と名乗れ。そして旦那の代診になつて彼の本屋に入るんだ。爾うだ、爾うだと、長太郎、其日に／＼と坊主に

爲つて、此れから其の娘の所へ出掛けます。無論、雲助の醫者陸だから、脈の取り方も容體の診方も存じませんが、只だ此奴、馬鹿で無いから、巧く大勢の機嫌を取つて、毎日落話を致したり、物真似をして見せたり、雲助唄まで唄つて見せて、女共をさや／＼と笑はせたり、面白がらせて居りました。

第十二席

きやッきやと云つて笑はして居る内は宜かつたが、其中に長庵とお八重さんと乳母のお竹が三人でコソ／＼と、多くの女中の目を忍んで耳打話をする様になつたから、サア大事件だ。お八重さんも其れは、今年五十二になる先生の玄塚よりも、腕は出来なくても廿三歳の小機轉の廻る長太郎の長庵の方が好いでございませう。併し此處が人間の大事な所で、彼の一件の運不運、どころでは無い。結構な死様も見ぢめな蛇れ死も、其原は全く此處に在るのでございませう。好く唯今のハイカラの若い方は、人間は自由だ、戀は神聖だ。結婚は本人の好た同士で、無くては不可ぬ。親達や他人の撰つた婿や嫁などに連添はれるとは、此位無理な脈制な、危険な、不合理な、自然に背いた馬鹿な話は無いだから、女房も亭主も手拵への

ドレ合に限ると、仰しやるが、此は世の中に経験の無い。理窟一遍の、人世の味といふのを
 存じ無い方のご議論で、馬嶺が知つた所で、凡そ世間のドレ合夫婦、正當の媒灼が無く、
 兩親も不承知を無理にくつ附た女房と亭主に、行末目出度く、家庭を圓滿に持ち通したのを
 見た事が無い。其の無い、第一の理由は、女房は亭主を甘く見て居る。亭主は女房を尊敬し
 ない。……女房を尊敬すると申すと、變しくも聴取になる方もございませうが。人には節
 操といふ大事な物がある。此の節操……謂ゆる人格が有ると尊敬されますが其れが無いとな
 ると、人間、カラ駄目なもの。處が若い娘風情で、廉恥もなく、節操もなく、男狂ひの果が
 手拵への亭主と一緒になる杯と云ふのに、人格杯の有り様がありませぬ。ソレ亭主も馬鹿に
 する。……女房は亭主に馬鹿にされる。亭主は女房に安ッぱく見られて居る。此れで家内が
 安全に行けば重疊だが、得て無作法の果は口論となる。口論の擧句は喧嘩となる。喧嘩の行
 留りは夫婦別れ！近い例は某處其處らにも澤山ありますが。……併し當講談を讀みになる
 皆様方には左様なのは決して無いが、若し此隣り近所にでも爾ういう心得違ひの有りまし
 たら。古迄も兩親も承知、親類も納得、正當の媒灼があつて、事は簡略でも正式の三々九
 度の四海波を諒つたので無くては、始終波風が穏やかに行かぬとのことを憚りながら傳

言を願ひたう存じます。でお八重さんも、淺草藏前の歴然とした本屋の娘で、本當に正し
 い筋目を立て、參れば、立派なお家のお嫁ごさんに爲られる。だが情けない哉、規則立つた
 る教育を受けて居りません。だから最初は詰らぬ迷信から、箆筒の虫の腹に入つたのを、命
 を取られるかの様に騒ぎ廻つて、其の擧句が白胡麻で胡麻化されて、猶ほ其果は、長庵坊主
 の口車に乗せられて、聞くも苦々しい醜關繫を結んだのでございませぬ。爾ういふ中に、お八
 重「何だか胸が苦しくつて、此膳がお美くなつて、乳母や、困るよ。」と云つたのが悪咀
 で、「ナニ、鬱結症の腹部の固塊でござせう。」と玄珠先生の診立たのが、飛だお腹の胎兒で、
 「三月四月は袖でも叶ろが、七月八月は隠されぬ。」といふ此の時分の流行唄にある様な、飛で
 も無い猿淺しい身上に、お八重は相成つた。氣が氣で無いはお八重よりも乳母のお竹でござ
 います。竹「長庵さん、斯う爲つちや仕方が無い。貴方、好い智慧を出して下さいよ。」長え
 え出させうとも。……其の智慧は、お逃なさい、私と一緒にお爲んなさい。」竹「ぢや駈落
 ……爲るですか?!」と婆アも流石に驚いた。長「いえ駈落といふと何ですが、爾うするのが貴
 嬢方のお爲です。ソレ當り前だと、娘さんは宅牢、婆やさんはお暇でせう。其れを反對に娘
 さんが影を隠すとなると、お一人娘の事ですもの、草を分けてもの穿議となつて、好い頃



顔を見せると、お家の方から誤つて来て、お歸宅を願うと云ふ寸法に爲ります。で其處で私
 が口を利くと、ソレ娘さんには疵も附す、貴方も以前通りの婆やさんで、お暇が出たにした
 處が、一生の食扶持ぐらゐは附うと云ふものだ。爾う爲さい。」成る程然う聞くと尤もな策略
 でございます。「ソレなら」と娘を勧める。お八重も今更ら仕方がない。謂ゆる猪食つた報
 ひの、お腹に腫出物が爲たのだから、膿むとも、潰れるとも、爲る様に爲れ。」といふ焼摺古
 木で、此處で長庵の悪策に同心いたして、大逸れた！親父が居間の手箆笥から大枚百兩の金
 子を盗み出しまして、乳母と長庵と三人で、甲州街道から中仙道に掛つて、唯今ならば蜜月。
 其の時分だから脛―ぶーンと蚊の出る頃まで旅行を續けて、都合三月の前から四月一杯、三
 四十日間、上方見物と洒落れのめして、歸つて来た頃には長庵、懐ろに七八兩しか無い。で
 差し向き神田の獸店に一軒の家を借りて、此處をお八重が産所にしましたが、道中で十分
 運動した所爲か、翌る月の五月に安々と女の子を産み落した、「さア此からだ！」と長庵、或
 る日淺草の本屋、則ちお八重が兩親の家へのこゝと遣つて行きました。

第十三席

長「え、世免ねへ！すつと入つて来たのを、本屋の番頭や小僧は見ると驚きました。長庵でございませす、今手を分けて探して居る駈落娘の相手方の其の醫者坊主だ。番「やアお前は！」長「誰でもねへ、手前達の主人の娘の、お八重が戀婿の長庵よ。騒ぐなへ」と睨み付けて、長「おい、親ごは宅かな？」何しろ大變者が飛込んだ。併し其處は親の慈悲でございませす。憎いは憎いが切ても切れぬ縁。然も一人娘の……成る程婿と云へば婿のでありますのに、其娘の駈落先も生死も知れぬので、泣の涙で居る最中、這奴を捉へて糺したら其の様子は必ず判明らうと申すので、親父の八郎兵衛は母親のお銀と其處へ出まして、八「まア静にさつしやい、お前にも言分は澤山あるが、併し今は言ひませすまい。八重を何う爲つしやれた。」長「ほう言分がある？」と長庵はぐいと掲げ胡座で、尻を捲つて、長「おい父さん、己ア言分を聞に來たのぢや無へ。禮を言に來たのだよ。……知らねへか、己アお八重が命の親で、最一戀婿だ。命の親とは大變な事を言出したもの。其の仔細は。と一同も彌々驚くと。長「別ぢやア無へ。お八重は誰の胤だか知らねへがつッ孕んで居た、産をするのが面目無へてんで、淺草橋から身を投げ様とした。其處へ己が通り掛つて助けて遣つて、家へ連戻さうとしたが否だと云ふ。處ろへ乳母も跡を追つて來て、兎も角娘様が身二つに爲んなさるまで長庵さん

何處へでも隠ひ申し上げて。と泣附くから、涙ツ脆い己、直ぐ其場から忍に棄けて四十日の餘、甲州街道から中仙道、京大阪の一通りを見物させて、歸つて家を持たせて置くと、つ此間、その女の子が産れたんだけ。用隙を缺き、身錢を切て、貴様の娘の命を助け、傳をして、道中まで爲せ、予まで産せて。お負に是非にと「やいの」を極られるので據らなく、亭主にまで爲て遣つた長庵を。禮も言ずに言分があるてへ、何だ！。知れ切た虚言でございませす。虚言だとは知れてるが、其の虚言といふ證據は此方に有ませす。剩さへ大切な玉といふのを先方には取られて居るから、本屋の方ではグツともスツとも云ふ事は出来ません。八「まア其處ではお話も出来んから、上つて下さい。」と、此から長庵を奥へ通して、八「ソレで今八重は何處に居りますで？」長「俺の家に産婦で臥てへるよ。」八「貴方の宅は何處なので？」長「俺の居る家は大屋の家よ。其な事ア何うでも宜いので、夫れよか今日は産の手當を己貫へに來た。誰の胤だか知れねへ餓鬼を産んだのだから、己が手で諸事始末を爲ろと云や、妾は無へから宅へ往て貰つて來てと吐しやがる。ソレで受取りに來た。番頭は最う堪りません、番「其様事を貴様云つても、お八重様の出なすつた時。百兩といふ……。」長「何だ？百兩……百兩を誰が何うした？汝、主人の首に繩を附るなよ！」番「へい。」と番頭の清兵衛も此

の一言に恐れ入つて、尻込をして仕舞ます。長「さア父さん、金を呉ねへ？」。親父の八郎兵衛は最う恐どくして碌に口も利けません。八「金ッて、幾ら上ますので……」。長「澤山ぢやねへ。今の、其の百兩よ」。八「ひえ、百兩！」。長「寄越すな否か、否なら貰うめへ。其代りあの産れた餓鬼を踏殺して、死骸を貴様の家に叩つ込むぞ。手前が孫の死屍だから、ぐづぐづ言ずを受取れよ！」。尻を端折つて起うと致します。其の見脈ッたら悪鬼のやうで、廿四歳の血氣壯んの、悪黨坊主の長庵の事でございますから、何んな真似を致すか知れません。産んだ母親は右申す憎くても、産れた子供は慥かに自分の孫。然も初孫と云ふのでありますから、母「あ、お前さん待て下さい。飛でも無い、踏殺すッて！」。長庵は眼を刺き出ました。長「知れた事よ、此の昨今の不景氣なのに、己が子でも無へ餓鬼を唯だ預つて、湯なり粥なり哺せる筈坊が何處の國にある。祖父祖母と思へばこそ憐う云つても來て遣るのだ。貴様の方で管はねへけりや天下に何處にも掛り場が無へ。仕方がねへ踏殺すのだ！」と、何處まで悪い言ひ分だか知れませんが、併し長庵の申す處ろにも、其れが眞實なれば一理が有りますので、八郎兵衛夫婦の老人二人は、方角に迷つて。番頭の清兵衛とも相談を致して。辛やく半金に負て貰つて、五十兩の金を看す／＼驅られると知りつゝ彼れ長庵の手に渡しますると。

長「有難てへ。ぢや此金はあの赤坊の養育料……併し斷つて置くよ。此金はあの餓鬼の養育料で、手切金でも涙金でも無へのだよ。然も此金は今日迄の養育料だよ。明日からは又た改めて貰へに來るよ。其んなら又！」と金を懐ろへ捻込みさま。長庵は悠々と出て行きました。

第十四席

「ソレ跡から附けて見ろ。」と番頭の清兵衛、氣の利いた小僧を一人長庵の跡から見え隠れに附けて遣りました。暫くすると歸つて來て、小「番頭さん、あの坊主め、郡代の博奕場へ入つて行やがった。郡代と申すと馬喰町四丁目から柳原通りへ掛けた、唯今では一面の町屋になつて居る結構な場所でありますが、東京が未だ江戸と申した頃には、此所に關東郡代役所があつて、此を郡代屋敷と申し、其の裏手に木戸があつて、此の木戸の内を俗に大路次と稱へて居りました。其の博奕場は此の大路次の内にある。いや大層な賑ひで、此處で勝負を争ふ者は、皆な關八州の代官地から訴訟や何かで出掛けて來た手合、無論田舎のお百姓衆の慰み賭博の餘り巧者でない腕前だから、此邊の活馬の目を抜く商賣人の手に出遇つ

ては、鷄器に掛つた青嶋の首を捻られる様なもの、其れでも椋鳥は椋鳥なりに負ぬ氣があるものと見えまして、何が面白いのだから向う鉢巻、片肌抜き、汗水くになつて、其の汗を垂らして儲けた錢を目録を食せられながら、巻上げられて居る。馬鹿な話したが、斯ういふ利口な人達があるので長庵如き悪黨も自然立ち行くといふ容。ツンなら長庵、又た其金で銀行でも建られる譯かと申せば、其處は博奕の場朽たる所以であつて、奪つた金は皆な其場で朽ちて、何時も懐ろはひッてんから、の逆さにしても鼻血も出ないといふ乾き方でごさいます。だから其の潤ひを附ける……好い金の實る木を見附けた氣で、長庵、其後も八郎兵衛方へ度々揺りに来る。無くなると何日でもやつて来る。實てゐる黄金の實を皆な揺ぶつて落す氣で強求に来るのでありますから溜らない。番頭の清兵衛「旦那、貴方は彼様な奴を飼つて置いて仕舞の果は何う爲さる氣で。月に二三度は必らず來をツて其の毎びに十兩借せ、廿兩借せ！ 貴方は、仕舞に此の店に熨斗を附けて、あの悪坊主に與れて遣るですか？」「否や然様譯では無いのだが、彼奴に來られて店先で怒鳴れるのも外聞が悪し。それに最一つは、惜いけれども彼者に與らぬと、娘や孫めが、又た難義を爲すだらうと思つての……」。清兵衛、惜い感には餌を飼へて、父の八郎兵衛は一時遁れの策をして居るのでございます。清兵衛、

其れなら譯は無い貴方が娘様の事を惜い、惜い、不孝者！と毎も云つてお出ですから私も今迄は差控へて居りましたが、貴方が其人を可愛想だと思召ますなら、あの坊主に手を切らして、金で引取る。其趣向は何うでも附きます。ナニもう心配なさらんが好い。」と清目と鼻の間ですから長庵が住居を豫て突留めても置きました。早速手土産の菓子折に金百兩の包を胴巻に入れましたから、和泉橋向うの獸店に向いて參つて、天狗横町の路次を入ると其の裏長屋から齒缺下駄や鼻緒の切れた草履などを突掛けた婆さんや唄さんがドタバタ掛けて、甲「真正に長庵さん所の夫婦喧嘩も聞飽るよ。烏の啼ねへ日はありとも彼方の家鳴聲の聞えねへ日は無へと云ふんだから厭になッ仕舞う。」乙「真正にさ、又たあのお八人も好く泣きなさる。あれ丈の標致持て、彼様に撲叩かれする所に居ねへでも、何處妾にでも往なすつたら宜からうと思ふんだが……」。清「へえ、一寸と伺ひますが、其のさん所の夫婦は爾う喧嘩を爲さいますので……」。丙「爲るツたツて爲ねへツたツて、夫婦は喧嘩が商賣で。喧嘩して飯を食てるで……」。乙「本當だよ。喧嘩がお飯の種になつた。何でも喧嘩してお八重さんが三つ四つ撲はされると、あの婆やさんがお八重さんへ駈出してツて、お母さんからお金を貰つて來るんだね。だから長庵さんが一昨日も云

てたよ。俺が喉アが頭は打出の小槌だと。撲ると金が出る……」目から火の出るのは誰でも
 ですが。金の出る程毎日撲られては溜りません。清兵衛驚いて、其の長屋へ入らうと爲ます
 と。忽ち家から「殺せ——！殺せ——！殺して呉れる——ッ！」といふ金切り聲の泣聲が聞
 えまする。其の突端に「おぎやア——！おぎやアッ！」と申す火の附く様な赤兒の聲「アレ
 まアお前さん亂暴な！刀物なんか振り廻して！」と同じく泣き聲を立てまするのが乳婆のお
 竹でございます。彌々肝を潰した清兵衛、行成り家へ飛込で見ますと、成る程、其の長庵坊
 主は出刃庖丁を逆手に持って、お八重の肩に足を踏掛けて、蹂躪つて居ります。其傍に赤
 兒は投げ出されて泣入つて居る。婆アのお竹は過失を爲せまいと慌て、止めて居る。轉がッ
 た今戸焼の火鉢からは炭團が飛出して、口の缺けた貧乏徳利からは酒が溢れて。いやもう言
 語道断とも、亂竹騒動とも、實際大變な體といふ中にも、其の實に大變な體に見えましたの
 はお八重でございます。去年の夏の厄落以來、見ぬのは漸く一年ばかりでございます。が、
 鬼の女房だから鬼神に爲つたのが、成る程家に居られる時分も、器用ご好いが、随分我儘
 な質のお嬢様であつたのが、今見ると阿婆摺唄アでございます。長庵に踏こぐられて泣き立
 てますが、其れは悲しくて泣のでは無くて、忌々しがって吼えるんだ。地圖太踏んで、八「殺
 せ、殺せ！」ッて叫びます。

第十五席

清「まア飛でも無へ、貴様、其の出刃で何うする氣だ。」と清兵衛は矢庭に長庵を突退けます。
 長「何う爲やがるでへ！」と長庵、此方を振向きましたが、長「やア貴様ア番頭だな。むう好い
 所へ来た。」とお八重をば其儘踏飛して、長「む、禿頭！来たのが幸へだ。今汝が主人で俺が喉
 アの此のお八重でへ阿魔を料るんだ。好く見て居ろ！」。清兵衛は烟に捲れて、道「何な何だッ
 て？」長「んむ解るめへ。行立を知らねへけりや分るめへ。コレ己が喉アの此お八重は姦通し
 やがッた……。」と「え、ッ？」と婆やと清兵衛が二色の聲は、異口同音といふに出ました。長
 今、其件を糺問してのだが、阿魔め、白状しやがらねへから、一思ひに切殺け様と思つて居
 所へ手前か来ただ。丁度好い。さアお八重。手前も最う斯う破れちや爲方がねへから、潔く
 往生しッ丁へ！」八「何ッ吐すんだい此の悪坊主め、私が姦通したッて云ふ、何の證據がある
 んだい。」長「證據も糞も入るもんか、肝腎の亭主が姦通したと云や此程確かな證據はねへ。
 汝、さア重ねて置いて四つにする其の對手を白状しねへから、大事にする此の赤坊の身代り

にして、母子芋刺にして腹を癒る。覺悟ウしろ！何と云ふ無法でござりませう。長庵、實に憎むべき言懸りを致す悪黨では無いと云うが、又たお八重の負て居ないのにも清兵衛驚いた。見掛も爾うだが、言ふ事から仕打から謂ゆる純然たる下等の山の神。成る程血に交はれば赤くなる。氏より育ち。と云ひますが、實際然うだ。と呆れ果て、見て居りますと、何處で覺えたのだから、惡坊主の此の亭主に仕込れたのだから、此れからお八重、否や多舌るわく迎も馬嶺共、舌で飯を頂いて居る人間でも、三舎を避けて、電車に乗つて、尻端折りで彼のマラソン競走の馬供に參しても追附かない程に多舌ります。彌々呆れて見て居りますと、お八重は臆て泣き出した。清兵衛「おや？」と驚ろくと、今度はダラ〜と笑ひ出しました。清「やア嬢さん、氣がお違ひなすつたか！」と駆寄つたが、清兵衛が察しの通り、哀れやお八重、餘り毎日苛責れるので、〜發狂に及んだので云ひます。併し此は誰を恨みん様もない。皆是れ身から出た錆。親不孝の天罰。年老つた両親に泣の涙の心配を掛けましたる其の不心得の因果應報、的面の祟りと云ふので云ひませうが。扱工斯う爲られて見ると詰らないのは長庵。番頭の清兵衛が来たのを幸ひ、姦通の言懸りをして、お八重を責め窘んで、其實際の手殿しいのを見せ附て、今度は大口に搖らうと思ひましたのが、大當違ひ。長「何しろ此

ぢやア仕方がねへ。おい番頭、女も俄儀も婆アも皆な引取つて行け。手前の來たのも大方其んな掛合のだらう。惜しい玉だが一人前百兩宛に負てやらア。金を置いて品物を擔いで行け。此處で清兵衛、種々押問答の果、とう〜持て來た百兩に漕附けまして、以後指さしも致すまじくの一札と引替に金を渡して、三人を忍に乗せ、藏前の宅に連戻つて、扱て療治に取掛させますと、元々大した事でも無いと見えましてお八重は半年の後に全快を致す。其處で罪障消滅の爲め、淺草田島町誓願寺の方丈に願つて、妙重尼の各を戴いて、比丘尼となつて行ひ濟して居りましたが、此が又た不思議の縁で、悪者共を捕召りの時に公儀の役役に立ちますと云ふお話は遙か後の事で、長庵、神田に居つても面白くない。此の百兩、先づ當分の内、山の手へ行つて地盤を拵へて、此んな悪黨でも時偶には眞面目な爲るものと見えまして。其から麴町、四谷かいわいを探しますと、丁度麴町の神様の裏手の所に醫者の仕抜の家がありました。其の時分だから廉い。僅かな金を買ひめて村井長庵の看板を掲げますと、人間、運の好い時には轉んだ所でも金を掴みます。長庵、醫者の修行とは何にも致しませぬが、百味筆筒から無暗に匙に



る藥劑が不思議に利いて、病人が平癒る。さア村井さん。長庵先生と彼方からも此方からも
 出来診を乞ふ。此出を願ふと言つて来る。玄關には藥取の斷間が無いと申すので、長庵外
 へ出まする時は、駕に乗て出る。昔し己れか擔いだ駕に自分が乗る様になつたのだから、偉
 い出世には違ひ無い。この出世の土臺を踏外さぬやうに致したならば、一生共に宜つたらう
 に。謂ゆる悪銭身に着すか、長庵或る日ふら〜と兩國邊へ遊歩に出たのでございます。

第十六席

長庵、ふら〜と平河町の宅を出掛けて、代官町から常盤橋、見附を出ますと本町通り、横
 山町に掛つて、あれから兩國の廣小路に參ります。此の時分……どころでは無い、此一新前
 までは此處に種々な見世物小屋が掛つて、其の裏側は髮結床がすらりと並んで、此の床屋が
 皆な拘賊の親分、乃至關係の者なのでござります。だから江戸時代、馬嶺共見たやうな、往
 來を歩くにポカんと口を開いて、好く其の時分にあつた大道店の古道具でも素見て居ります
 と、直き懐中物を拘られます。拘られても我々共のなら大した物でも無いが、人に寄つては大
 切の書附、證文杯といふがある。すると右の髮結床の親方に品柄を話して頼む。親方は其の

拘賊部屋に案内を致して、金銭は返さぬが、外側の紙入とか財布とかに、中にあつた其の書附類を入れて、幾らかの金で持主に買戻させるといふ趣向。實に彼等は怪からん商賣をする者だが、又た其れで金にも換られぬ大事な品物の形無しに爲るを防げるとか申すので、政府でもソレはまア其れにしてお置きに爲りました。長庵の今來掛つたのは其の拘賊部屋の前。「やア和尚が行く。」といふ聲が中から聞えると、其處にばら／＼と二三人が出て參つて、長庵さんお久し振だね。おい其様に勿體つけるなへ。偶にや己達に面ぐれへ見せても宜だらう。」と怒鳴ります。長は、ア兄弟、其様に云ふなへ。此節ア病家廻りが忙しくつて、ツイ此邊にも足が向かねへ。」里爾うださうでね。籠棒な堅氣になんすつたと……、まア何にしても目出度へや。併し久々だ。一應呑んでつてお呉なせへ。家でも今賭てるが、決してお勸めは申さねへ。」斯う云はれると人情情けなくも通られませんか。況て酒と女と博賭と來ては飯よりも好物な、否や其れが寧ろ活てる目的の、生命といふ長庵でムいます。長は、ぢやア一服貰うと爲やうかい。やば免なせへ。」と中へ入ると、連中は皆な以前の知た面ばかり。中にも禿虎にちよび熊、殿様金に積多八なんて云ふ一騎當千の剛者どもの拘賊は車座に相成て、頻に勝負を争つて居る。長は、皆様の大層好い景氣だね。」と長庵、最初は大人しく唯だ

覗いて居りましたが、何も好目が引續いて出る。此處を張れば斯う受て、必と想う引くり返る。と見込むのが、不思議にも又た其思ふ通りに爲る。此は我々でも時々は有る事で、新聞の相場の足取なにか生ぢツか見まして、此米は上るなとか、否や下りさうだとか鑑定を附けますと、果して其通りに着々當る事がある。ア己の運勢が向いて來たんだ。捨る積りで三枚。杯といふ時に、ガラリと摺されて仕舞うと結局大難が小難で済んであります。其れが若し瓢と當りでも爲ると、さア事件だ。三枚が忽ち十枚になる、百枚になる。然う爲ると局に當る者は迷うて、先の岡目八目が今度は鳥目眞闇と爲りまして、ドカリといふ奴を吃う「あッ」と云つても追附かない。「應せば宜つた」と後悔しても、先に立すでムいます。今の長庵同じく然りで、二三度張りましたが面白い様に言う目が出て呉れる。瞬ぐ中に四五兩持て出ました本が、甘雨といふ額になつて、小粒が小判に變りましたから、長庵殆んど有頂天といふ有様に相成つた。其れでも其日は戻りましたが、長は「こりやア面白い。此は矢張り醫者より博賭打に限るわへ。此の勢ひで一年も續けば可成りな貸元にも爲れやうか？」と謂ゆる通り悪魔に魅られたとでも申すので。此から長庵、病家も玄關もおツ投り出して、又元の郡代から回向院裏、愛宕下の仙臺屋敷、四國町の薩州屋敷、日が窪の毛利様など、いふ大者の大

部屋へのを轉がって歩く様になりました。斯うなると最う滅茶滅茶だ。好きこそ物の上手なれとは云ひますが、勝負事は、好物で跡を引く。切上げ時を知らぬとなると、急と綻を出すものさうにムリです。長庵も最初の勢ひ何處へやらで、一寸と鼻が曲り出して以來は、さア取られる。取れても好で止められ無いから彌々取られる。とうとう素天々の境界と相成つて、長「詰らねなア。」と云ふ頃には、病人は一人も来ず。百味箆筭は空っぽの虫の糞ばかり。大屋から米屋から酒屋から薪屋まで、残らず不義理の借金で固め附けて置きますので、最う玄關も張れず。據らなく同所の裏屋の猫の顔見たやうな家に煙ほり返つて、何か好い博奕の料でも無いものかと考へて居りますと、「モシちと尋ね申したうムリです。此邊に村井長庵さんと云ふお醫者様はございませんか。」長「あい有るよ。あの醫者の名人の長庵先生なら此處に居なさるよ。」男「何處にお出なさるんでせう。」長「だからさ、此處に居なさるてへば！」男「へえ？流行醫者の長庵さんが此な裏長屋に……。」長「不憚な事を云ふ。一體お前は何處から來なすつた。」男「私は駿河の興津から來ました。駄菓子屋の重兵衛といふ者でムいます。」

第十七席

興津の重兵衛と云ふのを聞いて長庵も驚きました。先代の重兵衛すなはち、自分が養父に致した其の爺様は先年病死して、其の娘のおとせと云ふのに養子をした、其の二代目の重兵衛が今來たのでムいます。實は長庵、此間からも餘り困るから、駿河へでも行つて見やうかと思つて居た所。其は清見寺の方丈様も最う遷化なさる。養父も死ぬ。自分を撲つた納所坊主もあつたが、元々雲水の事であるから大方何方へ行つたらう。すると知てる、一つ歳下であつた自分の義妹のおとせで有るが、此も女の事、殊に無口な生れで有る。何も話すまい。然すれば自分は太平の穢多であつた事、本陣の法事の膳の物を盗ねは誰も最う知ては居無からうから、一つ天下の名醫の積りで、大風呂敷を廣げて、其の目的を驚かし附て、幾らか加爲て遣らうと考へて居つた最中で、其の目的の重兵衛につて來られたのだから頗る狼狽した。けれども家が此んなだとして斷わる譯にも行きませぬ。儘よと思つて、長「私所が其の村井なのだ。」重「へえ？では貴方があの養兄様で？」

だ。お前があのとせの母主なら、私は彼女の兄だから、お前にも義兄に當る……

重「へえ。成る程。」長「そんなに何も感心して居るには及ばんで、まあ入んなせへ。……あ、未だ誰か居なさるね。」重「へえ一人居りますので……。」長「あ、其方のお人……何だ子供衆か。うう、女の子か。重さんお前の娘子かへ。おう、好くお出だな。さアまあ此方へ、んなさい。おう此は美しい子だ。頗る女だ。名は何と云ひなさる？……え、小夜か。ウン名からして美しい。はい、はい、此れは初めて。私が今も聞なさる。お前のお母の兄の長庵だよ。お前には伯父に當る名醫だよ。ナニ家が汚ねえ？……家なんか何うでも好い。私は人の病を癒す役なのだから、家なんか何うでも好い。匙一本さへ有れば澤山だ。ナニ今の世の山醫者共がよ。腕も出来んで、玄關ばかり立派にします。謂ゆる山師の玄關前！、山關とあれを云ひますの、は、は、は。」と長庵、黄八丈の膝の抜けたベンペラといふ奴を一枚被つて、狸八火鉢と申すを抱へて、貧乏徳利の冷酒を、自分も呑み、初對面の重兵衛にも勵めて、頻りに負惜みの天狗を云つて居りましたが、長時に重さん、今度出府しなすつたのは何か用事かへ。又た子供を連れての江戸見物と洒落るのかね。」重「何うして其な洒落どころの話ぢやムひません。私も飛だ不幸な目に遭ひますてね……。」長「はう、不幸といつて、何な災難に？」重「實は先々月類焼に遭ひました。ナニ大きな火事では有りませんが、一軒隔て隣りから

出られたので、商賣道具から、衣類雑具まですつかり焼いて、私共夫婦、此娘の姉妹とも丸裸で國に居ても仕方が無いから、此の姉の方を食ひ稼ぎの爲め、實はお前様の家へでもお頼ん申したい。左も無ければ小島の殿様（松平丹後守）の郡奉行をして出になつた藤掛道之進様、あの方が浪人なすつてね……。」長「ふう、彼奴が？」と長庵、覺えず口走つたが箱根の一件が露顯でも爲れては大變でムいますから、長「其方はお氣の毒な事だつたね。」重「何でも矢張り此の平川町近邊にお在に爲ると聞きましたから、彼の方へでもお便り申して、奉公口でもと思つてね……。」長庵、風と考へ附ました、「ソレではあの麴町の三丁目の裏に居る浪人の藤掛道十郎。彼奴、三州の吉良浪人だと云つて居るが、事に寄つたらあの道之進めが息子で有るかも知れん。道之進には箱根の宿で素敵な目に遇はされて、折角三次から巻き上た甘雨の金まで踏奪られて、命辛らう、追走らかされた恨みがある。何時かは一度其返報をと思つて居たが、ソレではあの老爺の道之進はもう死致つて、息子の代に爲つたのか。其れだと彼奴を何うにかして、あの甘雨の復讐を。ナニ息子にだつても構はねえ、爲て遣ら無くちやア腹が癒ねえ。」と蟻蛇のやうな奴でムいます。で、其腹では思案を爲ながら、口ではふん、と云つて聞て居つたが、長「重さん、ぢやまあ其話は明日又た寛くり聞かう。お前もだ

し。此子も草臥れて嘸ぞ眠からうから、緩りと休んでね……。お小夜、お前は幾歳になる？
……十六だ。今日は何處から来た。神奈川だと？其奴は豪へなア。」小「ナニ馴れてますか
ら、歩いても勞れやしません。其れよか伯父さん、水仕でも走り使でも何でも爲ますから、
何うか好い奉公の口……。」長「うん承知だよ。己は醫者で世間は廣いから、ナニ望み通り
な好い所へ世話をして遣る。今夜はまア其處にある衣を何か被つて休みなへ。何が有るも
んでムいますか。有るのは破れ合羽に、古傘位なので……。」

第十八席

其晩、長庵寝ながら考へたのでムります。「何しろ素敵な好い鳥が掛つたものだ。あのお小夜
の器量と云つたら無い。那奴を巧く磨き上げて、正眞の玉にして、年一杯といふのに叩き込
めば、百兩近くの貨になる。併し其にしても其事を重兵衛に話したものが、何うだろう。彼
奴案外義理堅い奴で、如何に困つても彼娘に君傾城の勤など爲せましては、先祖の位牌に！
杯と降らぬ理窟を言出されでも爲ては事毀した。寧ろ何處かの奉公口といふから、吉原の大
店へでも打込んだ後で、は大名のお小姓になつたとしても言を盡かうか。だが爾うだと娘の方

が納まらねへ。此から働いて貰はうと云ふのに、否だでも捏られては始末に卒へねへから、
仕方がねへ、矢張り親父にも其事を云ふのかな。」と斯んな事を考へてゐる内に夜が明けます。
誰かがら〜雨戸を明けて、火を焚附て居る者があるから、長庵、奥の寢所から覗いて見ま
すると、其れはお小夜で、道中の足の草臥も有らうのが、其様顔も見せませず、もう水を汲
んで、湯を沸かして、烟草盆に烟草の火を入れて、此から飯を炊かうと思つて米櫃を開け
て見たが、此の櫃に何時がいつにも米の入つた例が無い。蜘蛛の巣だらけの蜘蛛櫃になつて居
るから、肝を潰して、孫々してゐる顔といふのが、哀れにも可愛ゆく、猶ほ美しく見えます
。此を見ると長庵も、生れて初めて、「あ、可哀想な小娘だ。」と思ひましたが、親父を見る
と未だぐう〜鼾息で寝て居ます。長「おやお小夜や。」小「はい、伯父さんお目覚めで……。」長「
お前も早への。嘸ぞ足が痛からうのに。」小「否へ、何に……。」見ると眼の中に涙が見えます
長「お前、泣てるの。」小「否へ、何に……。」長「何を云つても否へ何にだが。正直を云ひなよ。
伯父さんだ。己はお前の爲を謀つて話對手にも相談相手にも爲つて遣る。何が悲し？」小「は
い。否へ……。」長庵は、持て来て呉れた烟草盆の火で一服吃みまして、長「爾うお前は隠すか
ら不可ねへ。隠さずに云ひなよ。え。お前は昨夜眠たのかね。」小「はい。否へ。」長「又た、お

株のはい否へだが。併し今度のは實が少しは有る。ぢや眠無へんだね。」小「はい。」長「何だ
で眠無へんだ？」小「家の事が心配に爲りまして……。」と今度は本當にはらりと泣きました。
長「其りやア心配にも爲らうさ。何しろ焼出されるの不幸と云んだから……。」小「其の焼出さ
れの外にも、未だ悲しい事が有るのでございます。」長「ほう。何様事がある？」小「借財がご
さいます。」長「ふーん。借金ツて、何な借金だ。」お小夜は泣じやくりと云ふを爲ながら、小
高利とかいふお金でございます。」長「ふう、高利と名が附くからにや何れ盲目か、宮様師の
非道いのだらう、駄菓子屋が其んな金を借りちや、そりや道切れねへ。」小「其れで家では返
されないと、妾を抵當に寄越せと云ふのでございます。」長「成る程、本手だな。」小「本手ぢ
や無い、其奴が手棒の、跛足の、片眼の、爺さんのでございます。」長「おや、好く出来
てらア。」小「それでお母様は泣いて、否だツて、私を遣りたく無いツて下さるに、お父様も、
彼んな不具者に娘を奪られるのは恥辱だツて、それで私を江戸へ連れて國へ置かない様にツ
て言て下さるでは有りますが。私が又た居なくなつたら彼の片眼がお母様を何様に責るか
其れが心配で、心配で……。」聞けば眞實、惘然な話でござります、長「爾うかなア。芝居に
も有る様な趣向だが。ソレで金高は幾らのだ。」小「元は十兩のが。父様も知らない内に百

兩に爲りましたツて！」長「ふう、蒙へな、随分……。」で、伯父さん聞きてへのはお前の料見
だ。其の借金の抵當に引取られるのは、お前も否か。「驚くべきは娘の決心で。小「否へ。私ア
構ひません。私の軀で其の借金が無くなるなら、私は些とも其の爺さんの家へ行くのを厭ひ
ません。」長「へ、え！驚いたなア、お前の心底は……。」と、長庵も一時、貫ひ泣と云ふ程で
も無いが、此の處女の孝心に撃れて、暫くは其の悪心も消えて、袖を顔に押當て、我が泣聲
を寝てゐる父にも聞かせまいと爲て居りますお小夜の、亂れた奴島田の前髪に眼を注いで居
りました。實際、此時は長庵も善人。決して狼でも豺でもない。一個の慈悲ある好い伯父さ
んでムります。でまじしと又た二三服烟草を呑んで、姪の泣止むのを待て居る體。すると
此方にも又たしくくと泣く聲がする。誰かと見ますと其れは重兵衛で、重兵衛も先刻から
泣て居たのでムります。

第十九席

長「おや重さん、お前も起てるか。」と長庵が其方を見ますと、寝てゐたと思つた重兵衛、む、
くと起き出して、重「はい否や貴兄には面目無いが實は最う先刻から目を覺して居て、

めが貴兄にお話し申した事は一から十まで聞きました。もう此娘が云つた通りで嘘も偽
ムいませぬ。全く最う高利貸の片眼に、折角人並に産れた此の小夜を奪られるのが否
母のとせも然う申すので、兄さん、貴方の御手許へ願ひに出たのでムいます。」と風紋の手
拭を目に當て、「おい、泣きます。此で一寸と申し上げたいのは西洋の諺に「美は人の悪を
消し、又た憂ひを拂ふ」と申して有るお咄でムいます。詰り此方で「女で無けりや夜の明ぬ
と申すと同じ様な意味だから、阿彌陀様でも観音様でも何れも皆なお美しいので、此は凡夫
の悪念を其美によつて拂はせ様といふは方便だとか聞きました。其様六かしい事は措くと
致しても、私共見たやうな濫紙の様な手で、「おい一杯注がう。」と云ますのと。美しい姉様の
白魚の様な鮮やかなので、「モン貴様や、お一つ……。」と徳利を出されるのとは、同じ酒で
も確かに其味が違つて申します。其の呼吸を巧く利用してござるのが京阪の此方で、あの
拂を取りにでも、江戸と違つて美しい糸さん方がお出に爲ります。え、免ねへ。おい今月
の拂へを貰へに来たせ。」と憎く體な中ッ腹が帳面でも出しますと、「糞でも食へ。有る時分に
やア遣らア。拂へだから何時でも與れて遣たら宜だらう。」と斯う云ひなくなりませんが、其の
糸やんの可愛らしい笹紅のお口から「もし、えらば無心でござりますがな、今月のお拂ひ

を戴いて来い云ふて兩親が申し付ましたからなあ……。」と仰しやると、「お、此はまア遠
方の所、態々で恐れ入ります。なんなら今月分と一緒に來月分までも……。」と然う云ふ工合
にも自然参ります。此れが美しい婦人方の徳。されば長庵、今まで小夜が涙を見て居りま
した内は、悪念が消えて、一個の、人情のある、好い伯父さんに爲つて居りましたが、其の
涙は同なじ涙でも鬚無者な重兵衛のを見ると、又た悪黨根性がむら／＼と出て來たのでムい
ます。何の斯な芋掘に！」と申すので、長「おい重さん、お前爾ういふ必死の話なら何故早く
爾う云つて呉れねへ。己ア今日も悪意のお大名から旗本を廻つて、小夜坊の奉公口を捜し
て來やうと思つたのだけせ。けれど今の話ぢやア、年に三兩や五兩の給金のお小姓やお次ぢや
ア爲方が無へ。己に云はせりや、當人にや些と何だけれども、吉原へ遣るんだね。爾うすり
や今の借金濟しも出來るだらう。爾う爲なせへな。」重「え、？では此娘を君傾城に……。」長
庵はふん／＼と笑つて、長「とう／＼然うは出なすたね。ぢや其後では先祖の位牌にと來るん
だらう。けれどお前も、養家先を分散させちやア一向先祖の位牌の前にも幅の利ねへ面と爲
るんだせ。」重「む、そりやまア爾うぢやせへますけど……。」長「お小夜は何うだい。お
前にや實可哀想だが、時の用には鼻をも刺ぐたのう。お前、吉原へ奉公して、父さんや母さん

んの難義を救へば、天道様は見通した。行末悪くは報はなくって、然るべき處へ落籍されるか、必と一生安樂に送られるといふは此伯父さんが受合うがの。何うだへ吉原へ身を沈めるのは……。」小「はい。ぢや伯父さん、私が其の吉原とかへ身を沈めると、お父さんもお母さんも樂が出来ますの？」長「然うだ、大層樂が出来るのだ。」小「其の身を沈めると、矢張り海の中へでも入つて、鮑でも取りますの？」小「夜は田舎娘でムります。身長こそ大きい、其の智識と云つては白石晰の信夫ぐらゐが精々なものでムいますから。」吉原へ身を沈めるといふ長庵の辭の意味が分りません。興津で海が近いから、蟹にでも爲つて、海中に沈んで貝でも取る事と思つて居たのでムいます。其を聞くと親父はもう堪りませぬから、小「夜、汝、おん女郎に爲るンだよー！小「え、私、あのおん女郎に？」と今更らの涙がばらばらと流れて來た。長「でもお前、雨親の爲なら金貨の老爺の片眼の所へも行く」と云つたぢや無へか。」小「はい。」長「ソレ見ねへ。吉原へ行つて魁妓にでも爲つて見ろ。來るのは片眼や手坊では無くて、今も云つた皆な然るべき家の殿様とか、旦那とか、若様とかなんだ。興津あたりの飯盛女郎と一緒になるものか。」お小夜は眼を眞紅にして、只だばらばらと涙の霰を振りまいたが、小「伯父さんが爾う言はしつても、何方も同じおん女郎だから、軀の苦

しいのも一つでせう。併し私はもう覺悟した。伯父様とお母様さへ安樂になればお女郎にでも魁妓にでも何にでも爲る。伯父さん、何方にでも好い方に……。と、とうくとわつと、身を震はして、泣伏したのでございます。

第二十席

此れで話は纏まりました。彌々お小夜は身賣でございます。身賣と云つても謂ゆる賣物には花を飾れだから、恁ふ云ふ素地を見せるのは面白く無いが、又た買う方でも、生じツか装飾られるよりも丸切りの生の方が宜いとか云ふことも聞きました。併し其等の委しい咄は馬嶺も好く存じませんが、兎に角親父の重兵衛も急ぐ事ではあります、當人の決心も又た變らぬ内にと申すので、其の翌日、長庵はお小夜を伴つて、豫て懸念の新吉原は江戸町二丁目の大店、松葉屋半左衛門方へ參つて、談判を開いて見た。生「うむ、此りやア好い玉だ」と其晩はお小夜のみ泊めまして、寢像を見る。此れは小店と違つて大店となると、随分然るべき方も出入來になる。其の時分、枕を外したり、鼻から提灯を出したり、寢言を言つたり涎を垂したり、齒切を爲たり、皆な落第の口だから、其等を吟味致します。其れに續いて、物を

食へる様子を見ます。かつ／＼掻込んだり、むしやく／＼喰べたり、臆が長かつたり、湯茶をがぶ／＼呑だりする。是れも禁物で△いますから注意して見ると申します。それと同時に身體の検査を致します。悪い疵でも有りは爲ないかと。其れに癩疥の有る無しを見ると申しまして、刀豆の香物を食べさせるとか云ひますが。此の刀豆なる物に果して其んな特效があるか、此は私には解りません。で、一通り皆な合格いたすと、此で入營……否や入樓が叶ひます。即ち代金の押引となる。昔は奉公人廿六歳までを年一杯とか申したさうに△います。が。此でも其の年で、松葉屋では五十兩に買はうと云ふ。長庵は百兩説を主張したが、此れはとう／＼成立ちませんで、六十兩と價が極つて、重兵衛は泣く／＼判を捺して、其金を持つて歸ります。此れが明治五年十月に出ました娼妓解放令の其の以前の體。誠に考へると淺ましい人身賣買の有様で△います。で重兵衛も、金は持たが泣の涙、併し何ば兄と云つても長庵とは義理ある中で△いますから、其の受取つた金の中から五兩を包んで出しまして、重「兄さん、最つと△禮も爲んければ成らないのだが、知ての通りの譯、何うか此れで一杯上つて。又た何れ改めて△禮は爲ますから。」と云ひますと、悪黨の長庵、もう此時には此の六十兩を残らず自分の金に爲て居る氣。又た其れを爲る算段も附けて置きましたので、飽迄も



手を掉つた。長「何アに、馬鹿な。お前と己らと兄弟の仲で義理も糸瓜も入るものか。此れが取抜け無盡に當つたとしても云ふならば格別の事、謂ゆる血の出る、——親の涙を流し合た金なのだ、別してお前が、借金済しの焼跡の取り續きでは出やうと云ふ端なのを、何の其様義理仁義。詰らねへ、廢しなせへ。」と何りません。正直な重兵衛、眞實涙を翻して喜んで、重親の泣きとは本當に此事だ。今まで何年か不通で居て、初めて逢て此んな世話をお貰ひ申して、心計りの禮をと云つても受けなさらぬ。兄さん、お前の親切は死んでも忘れぬ。あゝ難有い。」と手を合せて禮を云ひます。長「爾う喜んで呉れれば己も本望だが、併しあの松葉屋の亭主杯にやア、幾許かお前から貰つた事と積られてるだらう。すると此後己の面が利かねへから、此事をのう、何うかお前の書でお小夜所へまで言て遣つて呉れなせへ。然うすると此から逢ひに行くにも行き好いから……。」と、此れは尤もな請求で云います。で重兵衛「え、其れは仰しやいませんでも委しく私から言つて遣ります。そして先刻も願ひましたが、彼娘の頼みは兄さん、此からお前計りだから、何卒月に一二度はね。逢て遣つて下さつてね……。」長「當り前よ。己も遁れぬ縁だから……。」と、云ふ中に平川町の家に戻ります。重「何しろ其れでも私の心持、一杯だけ

買して下さい。酒屋は何處です。」長「心持といふなら馳走にもならうが、其んな買物なら此の一軒置いて隣りの忠兵衛ッて男に頼みなせへ。此りやア正白者のぐうたら兵衛の佛忠兵衛と云はれてる好人物だ。錢う預けたら飲ん仕舞か、知れねへが、買物を頼んだら、足利なア穿かねへ質だ。そして此邊は明るいから……。」重「ソんなら其人に頼みませう。」長「其れにの、重さん、吉原の使も其男に頼みなせへ。錢の百も與れりや宜のだから。」と此で重兵衛は手紙に掛る。長庵は忠兵衛に酒肴の買方を訊へる。重兵衛、蹠り書の手紙の出来上る頃には、酒を二升に見繕つた肴が三人前。蕎麥屋からは盛が六つ来て、此れが酒の肴にも、跡で飯の代りにも爲ると云ふので云います。長「いや大きに苦勞だつた。さア重さん来た。忠さんんも寛ぐり呑で下せへ。」と此から三人で呑み掛ります。長「なア忠さん、あの三丁目の裏の浪人の藤掛へ男なア、己も一二度風薬を盛つて遣て満更ら知らねへ仲でも無んだが、世間や三州の吉良とか西尾とかの出と言つてるが、一體何處の生れたなア。」と斯う世間話にして問ひ掛けます。忠「ナニ彼りやア駿州の小島の下野様の家來さ。何でもお父様は好い役を勤めなすつたが、風とした譯から同役と喧嘩をして、ソレで主人に暇を願つて、彼處に浪宅を構へて居なさるのだと聞いたッけ……。」長「で其の親ごさんは未だ生きて

忠「否や其りや、十年ばかり跡に死なした。」重兵衛は不思議な面をして、飲みながら居りました。

第二十一席

すると長庵は、長「おい重さん、聞いたか、お前の尋ねて居た其の藤掛へのは其れのだせ。縁と云ふ物は不思議な物ツて、此んなのは無へ。忠兵衛さん、此の重兵衛は私が弟だが、今度あの藤掛を半分は便つて出府したのだ。處ろが分らねへで今迄居たのだが、お前の話ですつかりだ。何うだへ重さん、お前折角の事だからあの道十郎さんに逢つて往きねへな。」重「否や實に奇縁と云ふもので。ソンならお目に掛つて往きたい物だが、他家は何處でせう。」長「お前が然う言ふなら、なア忠兵衛さん、故々行くにも當らねへから、一杯進げ旁々、一寸呼ぶてへのは何うだらう。」忠「それが宜うがさア。ナニ道十郎さんだつても用の有る跡ぢや無し。お神さんと睨ッこしてへるよりは一杯でも呑んだが得と云ふもんだ。私が往つて来て上げませう。」と何につけても尻の軽い人。長「忠さん、ぢや迎へにか。恐れ入るなア。ヂヤ何うか頼ん申さう。」重「何うも恐れ入りますで……。」と頭を下げますのを。忠「ナニ譯はこは

せんや。降つて來やがったな」と、家から傘を引摺いで、すた／＼と出て行きました。道十郎を引張つて來たので、此で一吋と藤掛の話を爲ますが、彼れ道十郎が父、かの道之進は、前回にも申上げました、駿州は小嶋藩、一萬石の郡奉行を勤めて居りましたが、同僚の一人と風とした口論を言慕つて決闘といふ騒ぎに爲りました。勿論早速仲裁が入つて大事にはならず仕舞つたが、其れや此やで屋敷にも居悪くなり、とう／＼浪人と相成つて此の麴町三丁目の裏で儘かな小金を貸して居ましたのが、其れも矢張り士族の商法。上るのが少なくて仆れる方が多いと云ふので、先年父道之進が身歿つてからは、道十郎、女房のおみつと二人で、聊かな内職を致して、其れを活計に細々と烟を立て、居ります。で世間へは小嶋の家來と云ふのを憚かつて、其の先祖の出が三州の吉良からだ申すので、吉良の浪人だと云つて居ります。其れを忠兵衛が風と多舌ツたが災難の端。亡父様に恩を受けた興津清見寺門前の駄菓子屋の重兵衛と云ふ者が、長庵さんの家に来てゐて、是非伺うと云ふんですが、明朝急用で國へ歸らなければ爲らぬ體。誠に失禮ではいりますが、一寸と出出を下さいますれば難有い仕合で、と慥う云ふのでいいます。何でせう、ちよつと往て遣つて下すつては。」と忠兵衛が來て云ひますので。道十郎、忠兵衛の云ふ通り、格別

用も無い體。重兵衛といふ男は知らぬが、久し振で國元の様子も聞いたし。と申すので今遣
て参つたのでムいいます。道「いや此は、お前さんが其の重兵衛さん、初めまして……。」と
いふ其人を見ますると、浪人にはお誂への五分月代で、寝ては居ますが三十恰好の、品の
好い、瘦形の、人の好きうな男。重兵衛も初對面の辭誼をして、親父の道之進の事を言ひ
出して悔みを云ふ。すると長庵「いや道十郎さん、災難といふは知れ無へもので、私の義弟
の此の重兵衛も此間火事に出遇つて、丸焼と云ふ非道い目に遇つた上に。十兩の高利を借り
たのが何時の間にか百兩近くと爲つた爲に、今度娘を連れて来て……。」と、何うしたのか急
にべら／＼打播けますから、驚いた重兵衛「兄さん飛でも無い。初めて目についた藤掛様
に。」「長いや藤掛でも橋掛でもねへ、縁がありやこそ憐うやつては一緒に酒も呑み、
貴君も此の長庵が風薬の服も吞で下すつたと云ふもんだ。四海皆な兄弟さ、何も隠すにや
ア及ばねへ。子エ藤掛君、僕の弟の此男は、今日娘を買つて六十兩てへ大金を持てます、
よし、か六十兩！羨ましいかね。其金ッ持つて明曉六つに東海道を興津へ歸るんだ。家ちやア
女房と今一人の娘が待てるだ。よし、か解つたかね。あ、酔つた。と長庵、忽ち其處へごらり
と轉がッて、ぐ／＼と云ふ高野でムいいます。酒の上とは云へ、降らぬ事を多舌ッて呉れたも

んだ云ふので、内氣な重兵衛、藤掛の手前孫々して居ます。藤掛も飛だ事を聞されまし
て、挨拶にも窮つて、小用を足す振で表へ出ましたが、挨拶も面倒だと思つたか、其儘い
と家へ歸つて仕舞ひます。で忠兵衛も手持不沙汰だから、かの重兵衛から頼まれたお小夜へ
の手紙を持つたなり、此も同じく戻つて了う。と今方晴れた雨は又たザツと降り出して、市
谷八幡の亥刻の鐘が物淋しくポーンと響きます。

第二十二席

人の好い重兵衛も、何だか怖くなりました。何だッて兄貴が彼んな事を云つたのだらう。丸
焼になつた。お小夜を賣つたは未だ存いが、己の懐中に金が有る！六十兩の大金が有ると！
何う云ふ氣で言たのだらう。誰でも旅先での所持金は隠して居る。其れを如彼物でも教へる
かの様に執ッ濃く云ふ。何う爲たんだらうと、重兵衛、頻りに考へて見ましたが、解りませ
ん。長庵はと見ると、傍に大の字形になつて寝て居ます。然も大鼻雷！「何しる最明
の朝は立つのだが、一刻も早く立たう。此んな家に居るのは不氣味だ。あゝもう早く立たう
く。其にしても此金だ。」と實に持ちつけの金ほど荷厄介になる物は無いと申します。然う

かと云つて溝の中へ打棄つて了う譯にも参りませんし。持てれば持ち重りがする。疝氣の毒になる。壽命の害になる。泥棒が怖くなる、火事が恐ろしくなる、地震が心配になる。第一心に餘裕が無くなつて、體が窮屈で、何を食ても甘くなく、遊んでも面白く無くなるから、彼な馬鹿な物は子々孫々に傳言て、決して持つ物で無いと、馬嶺、内實さる金持の家の番頭に教はりましたから、其れを拳々服膺して、雉子が背廣を逆さに着た譯では無いませんが、右を好く守りまするから、此覽の通りの仕義。當年取つて、もうコレ棺桶に兩足が入つて更に幾らかはみ出す様な次第ではあります、未だ人様の厄介。去ながら機會があつたら鬚髯を墨に染めといふ勇氣は一向に衰へません。其から申すと重兵衛も馬鹿な奴でございます。借金で首を取れた例は昔から無いから、高利貸に身代を奪れたらナニ奪れたなりにして、家族揃つて平氣で済して居れば好いので有りますのに、大事な一人の娘まで賣つて、泣の涙で拵へた金を、又た心配だと云つて胸巻に括つて腹に縛つて、さア寝ようツても寝られませぬ。其中に子刻が鳴る。如何に心配でも、酒をば飲んで居まするし。張詰めた様な氣も何時か弛んでとろ／＼と爲たかと思ふと、「おい、重さん、おい最う六つだよ。」と起す者があつて、する。「はッ」と眼を覺すと、其れは長庵で。長「おい、今八幡の七つが鳴たから茶を沸して置

いた。そく／＼起きてもう支度を爲ねへ。」と云つて呉れます。重「え、つい寝過した。」長「ナニ寝てへて好い體なら何時迄寝てへても構はねへたが、お前のは然う行かねへから……。」と笑つて膳立をして呉れる。重「否へ、何う爲まして……。」と重兵衛急いで面を洗つて、冷飯に茶をかけて、さぶ／＼搦込んで、支度と云つても別に何も無い。脚絆を附けて、草鞋を穿く計りであるから、頓て旅装を拵へて、上り口へ出て、重「え、兄さん、誠に今度は飛んだ厄介になりました、何れ歸つたらとせからも私からもお禮手紙は出しますが、先づ此れで暇を……。」長「あ、然うかい。ちやまア道中氣を附けて行きなされるが好い。何しろ輕身じや無し、宿泊りにも氣を附ての。」と斯う云ふところは別に悪黨とも思はれません、長「ソレに小夜の事なんぞも案じねへが好い。金せへ出来れば何時でも受け戻す、ソレにいさくさは無へのだから……。」重「何うか何分にも宜しく願ひ申します。」と重兵衛、此で暇乞して、長庵が所の破提灯を借まして、平川町の家を出ましたが、昨夜からの雨は、きつい事も無いですが、未だぼつ／＼と落ちて居ります。戸外へ出て見ましたが、夜半の眞闇だ。重「おや、六つと云ふに爲ちやア餘まり世間が静かだな。何時のか知らん。」と思つたが、時の鐘も聞えませぬ。彼處から三軒屋へ出まして、井伊様の盲長屋脇から霞ヶ關、其から虎の門

西の久保から飯倉に掛つて三田から高輪に出るのでムいます。重兵衛、虎の門を金比羅様の方へ出る所で、増上寺の大鐘がポーシヨ「おや」と思つて數へて見ますと。ソレは曉七つ。重「おや七つだわ。兎貴、もう六つだと云つて起して呉れたのは何う爲たんだらう。併し宜いわ。何うせ立つのだから早い方が好い。品川へ往つたら東も白むだらう。」と、かの提灯を便りに致して、赤羽根を出て三田の四國町、札の辻から金杉の大通りへ出やうと爲る角の所で。ばら／＼と出て来た者がありますから、重兵衛「おやッ」と足を停めて、彼の提灯を差し上げて、冠つて居た笠を仰向けながら其者を見様と爲ますと、ばさり！提灯を切て落された。重「あッ！人殺し！盗兒！」と叫ばうとする端を、眞額から割り附けられて、重「ッ！尻居に倒れるのを、曲者は乘し掛つて、ぶッ！胴腹へ刃を突立て、無慘や一えぐり此で息の根が断えたのを見まして、直ぐ懐中へ手を差し入れてする／＼と引摺り出したは彼の六十兩、ヘン、金が敵だ。恨めしくば此の六十兩を恨むが好い。六十兩が貴様を殺したのだ。」ふんと笑つて其の曲者は又た闇黒へ姿を隠しましたが、其奴は改めて申し上げる迄も無い。近道を先廻りをして此所に待て居りました長庵のでムります。

第二十三席

程なく夜が明ける。此の慘狀を見附け出したは品川の朝歸りの職人らしい若いのでござります。二人揃つて睡い眼をこすり／＼、甲「此雨が遺すの雨と云ふんだなア。斯う降つちやア職事も有るめへから流して行く／＼と彼奴め捉めへて放しやがらねへのを無理に引剝がして逃出したら。口惜いよッ！て斯う背後から……。」乙「やい肝を潰させるなへ。己の肩へ咬へ附いて、あゝ痛へ！」甲「あいてへは難有てへ。彼奴が宜しくッて禮を言やがるせ。」乙「何う惚ける。人を非道へ目に遇せやがつて！」と一方は矢筈に突飛す。突飛されてよろ／＼と致した色男、金と力は無りけりて、泥濘へつるりと滑つて、行成り物に爪附いて突ンのめつて起き様としましたが、甲「わッ！」と云つて氣絶して仕舞た。氣絶をするのも尤もでムいませう。其の爪突いた物とは如何なる物かと思し召す。すなはち右申した重兵衛の死骸！頭を半分切り割られて、脇腹を突き貫ぬかれて、最後の苦痛と無念の恨みを其儘に、血走らせた眼を視剝けて、仰向けにぶッ倒れて手足を張つて居る。其れとビヨツリ面を合せたのでムいますから、此れは色男で無くても誰でも肝を潰します。「あッ」と叫つたがもう目を曇した乙「や

ア大變だ。何うした？」と伴の奴もヒヨイと其處へ面を出しますと其の血だらけ！乙「わア大變だア！人殺しイ！」と一町ほど前方にあつた四國町の番太郎の店、今戸を開けた計りの所へ飛込みます。自身番の老人は肝を潰して、老お前さん、何う爲すつたので？」乙「爲すつたも擦すつたも無へ、ちちちち血だらけだ！」乙「何處が血だらけで？お前さんは泥だらけだ！」兩方慌て、居りますから世話は無。豚陳漢が、陳豚漢となつ丁ふ。其中醫者が来る目を暈した男の療治をする。檢使が来る。重兵衛の死骸の檢査を致します。けれども何處の何者だか分りません。百姓縞の古布子を着て、脚絆に草鞋、菅笠を冠つた上から眞二ツに切られて、仆れた所を胸腹を突き貫かれたとは見えませんが、何しろ懐中には八百文ばかりの錢の入つた財布が一つと、腰には汚ない皮の腰下げの煙草入れなれども、第一の手掛りと申すのが紐の先が小指に綁まつて居つた。斷れた小田原提灯と、死骸の側に棄て、有つた古蛇の目而も其の提灯には、「麴町、村井」として有りまして、傘には井桁の中に寫の紋、其側に「藤掛」と、伊家流の丸い字で、小さく書いて有ります。さア此れが手掛りだ。提灯の村井は此の死人の苗字で、傘の藤掛は犯人の姓。察する處、此の藤掛なる奴が、此の村井なる男を殺した折、人に來られたか犬に吠られたかして、此の指して來た傘を棄て置いて慌て逃げ



たに相違ない。と此は誰でも然う云ふ判断を下します。又た爾う鑑定を爲せやうと思つて長庵坊主、仕組んだのでムいますから、出役の町方同心も然う思つて、同此の村井といふ者は何だらう。麴平、と提灯にあるから此は慥に麴町平川町だが、兎に角人物が判らぬから、參つて熟く取調べて来い。」と同心の手附の岡引、すなはち用聞なる者に申し附ます。用聞は心得まして、直ぐ芝から麴町へ来て、自身番屋へ差配を呼んで、平川町四丁の中に村井と云ふ者が有るか、何うか。」を尋ねます。幸有ります段か、天神裏の破長屋に住んで居まして、藪醫者を内職にして、博奕はツかり爲て歩く長庵といふ……。」用「うむ、あの長庵坊主。あれが村井か。で其の長庵の知てる者に、藤掛へ男は有るか。」幸有りますとも。此も三丁目裏に居りまして、詰らぬ内職を造つて居る駿州小島浪人の藤掛道十郎……。」用「好し。べた!」と用聞は直ぐ立歸つて同心に告げる。同心からは此の始末を與方に届けます。與方は右を町奉行の耳に入れます。其月の月番、北の町奉行の諏訪部美濃守「ソレ取押へる。」と申すので、片方は藤掛道十郎を召捕に參る。片方は村井長庵を呼出して尋問に及ぶ。兼て待構へて居つた悪黨の長庵「え。私の弟重兵衛が札の辻で?」と、其處は斯ういふ奴でムいますから涙でも鼻汁でも出したい物を勝手な時に出す事が出来ます。聞くよりむつと泣

出しまして、此からお小夜の身賣いたした一部始終を涙の口に言立て、長「昨朝も、物騒だから、私が夜明まで送つて遣らう」と申したのでムいました。弟は田舎氣質といふ言出しますと剛情な方、何の追刺の四人や五人、私は斯う見へても村の小角力では三役を取つた者だとか何とか言ひまして。」と涙を拂つて、長「そして、弟を殺した敵は、何者ですか、未だに分りには爲りませんか。」と申す處へ。藤掛道十郎を引立てました町同心は白洲へ入る。吟味の與方は此れを指さして、與「其方、此者を見知つて居るか。」長「へえ、好く存じて居ります。藤掛道十郎……。」與「只今當白洲で吟味するから、其方其れにて聞いて居れ。」と與方は道十郎の方に向きました。

第二十四席

吟味與力の大河内銀太夫、唯今腰纏で入つて參つた藤掛道十郎を先づ睨め附まして、與「道十郎!」道「はッ。」與「其方は何歳になる。」道「三十二歳にムります。」與「三州吉良の浪人と申すが、以前何方に奉公を致した。」道「何れにも主取は致しません。其の以前からの浪人で……。」與「何を致して食て居る。」道「手前親共が、聊かの金子を遣し置き呉れましたが、右

を貸付け、利子を貰うて取り續き居りまする。」銀「差配次郎兵衛、右に確と相違は無いか。」
 差「相違ござりませぬ義にムリをする。」銀「む。然らば……。」と傍邊の古蛇の目を下男に
 取らせませす。此の下男は「男衆」とも云ふが「お下」とも又た申して、白洲即ち法廷にて種々
 る用を致します。詰り今の小使と、刑事巡査と、獄丁をも兼たやうな者であるから、中々
 が利く。下男、心得てかの傘を道十郎が眼の前に突付けますと、道十郎は見えて驚いた。其れ
 は自分の傘で、かの長庵の宅へ参つた晩、小雨であつたから指して出たのが、其後長庵に妙
 な金の義を話し掛られて、居辛く爲つたから表へ使用に立ちましたが、最う歸るも否だから
 雨止を幸ひ、其儘置いて宅へ歸つた。其時の其の蛇の目の傘！だけれど其傘が、何で這樣な
 奉行の白洲へ昇ぎ出されたか。又た自分は何で斯んな場所へ細附で拘張られたのか、一向分ら
 ない。殊に此の時分でも、吟味も無しに其者を細附にする杯とは餘程の事で、罪狀の十分上
 つて居る者で無くては無い事であるのを、何答の覺えも無い自分が然ういふ目に遇つたので
 あるから、道十郎、實に夢に夢見た様であるのが、其傘を見て益々途方に暮れました。で呆
 れて見て居りますと。銀「道十郎！其傘に覺えがあるか。」道「はいムいいます。此は私の傘。先
 夜此れなる長庵方へ参りましたる節。取り残して歸りましたる手前所持の傘にムいいます。」心

に何の恐怖も無いから、有體にする／＼と演べますと。吟味與力の大河内も些と的が外れた。
 彼は定めし「自分ので無い」と争さうだらうと思つたのでムります。銀「では道十郎、其方は
 此れなる長庵が弟、重兵衛と申すを存知て居るか。」道「はい、一昨夜、長庵方にて逢ひまし
 た。」銀「右重兵衛は昨朝、芝札の辻にて殺されたぞ。」道「え、殺されました？あの重兵衛
 が？」銀「その死骸の傍に、其傘が棄て、有たのだぞ。」道「え、え。」と道十郎、此で初めて眞
 實驚いて、且つ自分が此所に拘れた其の意味をも悟つたのでムります。悟ると同時に、怪し
 むべきは此の長庵！的切り素奴。と鑿附きましたから、道「承はッて驚きましたか、私は右の
 次第を只今初めて伺ひました義にムります。」如何にも此の時分新聞など云ふものはムいませ
 す。何か奇らしい件でもあると、え、此は此度、世に珍らしき何々の次第を再覽じろ。」と瓦
 板と云ふのに刷つた一枚の摺物を、編笠を冠つた讀賣を讀んで賣つて歩いたもの。併し芝の
 札の辻で、錢八百持つた汚ねへ男が、試し切か何かに遇つたと云つても、其れを讀賣にして
 歩く程の價値も無いから、誰も噂も致しません。だから道十郎も知らずに居つたのでムいま
 す。すると爰から、言ひたがッてうす／＼して居つた長庵、矢庭に膝を進めまして、長「え、
 長庵恐れながら申し上げたうムります。道十郎は重兵衛の殺されたのを知らぬと云ふ法はム

いません。彼は儘に知つて居ります。其の知つて居る證據は其傘で。傘が獨りで其の殺害の場所へ參る理由は無いません。手前宅へ取殘して參つた杯とは嘘の皮。又た其外に奇怪いと申せば、彼は其晩、酒を飲みましたなり、馳走になつた挨拶もせず、何時の間にか消て失せました。コレ内心に一物ある確かな證據と、私は先刻から懸附きました。何うぞや私が弟の敵、速かに公義の慈悲を以ちまして取り下されたう。はい。願ひ申上げます。と頭を下げるを待兼ねた道十郎は赫と急ぎ立つて、道十郎申上げます。此傘の義に就いては……と右の長庵臺所へ置き捨てたる義を猶ほ明白に述べまして、道十郎の酒席を中座しましたるも全くは簡様な譯。と彼の長庵が酩酊致して、重兵衛の懷中に六十兩の大金のあるのを冗く云ふので、道十郎も居耐まらず。弱り却つた重兵衛の面を見るも氣の毒と家へ歸つた一部始終を事細かに申し立てますと。長いや以ての外、左様な義を口外しましたか、亂醉の上とて只今は覺えも無いませんが。唯だ私が、弟重兵衛の身上を善きが上にも善かれがしと存じまするは、姪の小夜を吉原江戸町松葉屋方へ奉公に出させましたる折……即ち其の六十兩を手取りの節も一錢一厘の禮金をも受けませず、現在五兩の金を包んで出しましたるをも、道理を説いて、再た彼の財布に納めさせました程の事。其れにて手前が潔白は十分は賢察を

願ひます。と、此で何やら水懸論に相成つた。其處で其日は長庵をば白洲から下げまして、道十郎をば假牢へ入れて、吟味與力の大河内、熟々と考へましたが、成る程長庵は以前は頗る悪い事をした奴だが、さればとて流石に弟を切るの殺すのと云ふ、人倫にあるまじき罪を犯す程の悪人でもあるまい。又た一方の道十郎は、何うも其の人殺しをして金を奪るといふ悪黨とも見えぬ。すると彼の傘は誰が何うしてあの場所へ持つて行つたか、其れに就ても長庵の云ふ通り、姪が身賣の禮金は受取らなかつたか、何うかと。吉原の方を探らせ見ますると。此は長庵申す通りの、立派なもので有りました。

第二十五席

町奉行所でも、長庵が日頃の行狀だから其者の申し立にも疑ひがある。で吉原の方を問いて彼の口狀に偽りが無いか何うかを調に爲りましたが、長庵坊主。其な所に抜目の有るでは有りませぬ。豫て巧んだ、重兵衛に書せた五兩の禮金を受取らぬと云ふ立派な手紙が小夜の方に參つて居る。此れで見ると何様、長庵の言立も満更ら虚偽と許りも言へぬ。此で又々廻町三丁目から平川町へ掛けて例の見る目嗅ぐ鼻といふ用閉の、今の謀者な

を放つて探偵に相成ると。彼の夜、長庵相長屋の忠兵衛が、道十郎同席で酒を飲んだと云ふ事が知れました。其處で忠兵衛、忽ち自身番まで「一寸來い。」を吃つて、同心方の取調を受けました。で其口に據ると、長庵が酔つて、重兵衛の懐中に六十兩の金のあるのを道十郎に饒舌たのも事實。又た道十郎が其れを聞かされて、弱つて、家へ歸つたのも事實。兩方事實は事實でありますが、其等は物の證據にならぬ。其よりも唯一つの斷定の材料と申す傘。其の道十郎が歸る時、かの古蛇の目を置いて行たか、行かぬか行ふ。其は忠兵衛も一向心附ずに居たけれども、道十郎なる者は、貧乏でこそ有れ日頃から手堅い質。決して物を奪るの事を殺すのと云ふ悪事を爲ぬと云ふ事だけは、受合は出来ませぬが、私は慥かたと存じますと、不得要領ではあるが、又た有力な保證と申すを得ましたので、同心、歸つて此事を興力に告ると、興力の大河内、彌々困つて、今は幾んど手の附け様が無くなつた。と申すと、「馬嶺談云ふな。今こそ無いが、其時分には拷問といふ重寶な物が有たらう。道十郎を叩かないで、吟味興力が手を束ねて居るなして云ふ事が有るものか。」と仰しやる方もムいませうが、其れは芝居や何かの作り物を爲つての口説き。刑法も無い憲法も無い舊幕府の時代と申したとて、決して其んな、拷問を無暗に爲たものでは有りません。(但し、先手組か

ら出た「加役」といふ者の方には、随分亂暴な真似をした向もある様には聞いて居りました。で此の加役の吟味は今の豫審裁判。自身番の調べは警察署の訊問といふに一寸と當つて居ります。此んな六かしい事を申し上るは私共の柄にない。皆様方に恐れ入りますが、其の拷問を江戸幕府の慎まれた證據と申すは、かの武家百箇條といふ中に「拷問申付くべき品の事人殺し、火附、盜賊、關所破、謀書、謀判。右の類、悪事致し、證據慥かに候へども、白狀に及ばず。並びに同類の者、白狀に及び候へども、當人白狀に及ばず候らば、拷問申し付くべき事。云々と云ります。だから拷問は、右の證據が慥かたで無い以上は出来ぬ仕事で。長庵の口で申した傘位では、興力も口頭では、其れは嚴しく糺ませうが、手を下す物で叩くのと云ふ事は先づムいませぬが、只だ此の時分の牢屋と申したら、其れは大變なものと云つて私も實際は存じませぬが、逆も今日の監獄などは諸事、同日の論には爲りませぬ兎に角、牢に參れば必らず疹癬を搔く、此を牢疹癬と申した位。不潔、不衛生を極めた場所、如何なる惡黨でも、入牢れば病らう。病らへば弱い奴は死ぬと極つた、實に地獄と羽目一重隣の恐ろしい土地で云ります。で平生餘り壯健で無つた道十郎、哀れや間も無く病ひつきました。さア敵はない。手當は届かず、藥らしい藥劑も服す、とうとう牢死といふのを

致して果てましたが、此れを聞いて喜んだは長庵ちやうあん！此れで此事も先づ落着で、人殺しの罪は凡べて彼奴が被つて呉れる。何しろ親おや(道之進)の因果が子に報つて、己れの遺失した三十兩さんじゅうりやう(箱根の事)が六十兩に爲つて一騒ぎ起つたのだから、那奴の牢死ぐらゐは當然のことだらう。勝手な熱を獨りで暗くめて居ますと、死ぬ者貧乏！果たして此の人殺し事件は道十郎の罪の様なものに爲りました。長庵初め忠兵衛ちゆうべいゑ杯にも別の沙汰もありません。落着と云ふよりも減着苦茶といふ方に事が片附て仕舞ましたが、只だ忠兵衛のみは「道十郎に氣の毒だ濟まぬ、濟まぬ」と太く申して、その後暫く氣病の様に病つて居りましたのは、彼の夜、彼が道十郎を迎ひに行つて、伴れて來たと申すからでもムいしますか。但しは外に何かの意味が有りましてか、其れは仔細く後席に申し上ると致し置きました。此に哀れを止めたは、重兵衛じゆうべいゑの女房、長庵の義理の妹に當る、先代重兵衛の一人娘の、とせでムります、自分は丸焼に遇う、高利貸には責られる。舉句の果には其の金貸の老奴かの手坊と片眼と跛足の老爺に可愛娘の、お小夜を奪られさうに爲りましたから、夫重兵衛を勧め、江戸の兄長庵ちやうあんを便らせて遣りましたが、着くと直ぐ手紙を出すと云ひました其の重兵衛のは來ず、結句は急便で參つた兄が處からの書面を見ますと、こは何處、重兵衛の横死、其れも小夜を吉原に賣つた



其金の爲め、元小島の中藤掛道之進の伴、今は浪人の同苗道十郎といふ奴の刃に罹つて、芝札の辻で非業の死を遂げた。といふ通知。とせは只だ夢かと驚いて、はッと爲ました。が、不憫や其からは少しく物狂はしい氣味。けれど家には今年十四の梅と云ふ季の娘の居る許り何しろ此の小娘一人切りでは、看護は恐か、朝夕の事にも差支へる。殊に他人許りでは、病人の手當の趣方も附かぬと申すので、其の向う三軒兩隣の者の連名の手紙に、宿の役人の添状を附けて、長庵の方へ「來て呉れ」との義を申して來たのでムります。長庵考へた。「義妹の婆ア丈けなら構はねへのが當然だが、十四だと云ふお梅といふ娘。姉嬢の小夜の器量から割り出すと満更に見蔑つた者でも無へかも知れん。すると又た四五十兩の金儲。這奴行かすんば有るべからず。」と、實際非道い奴でムります。其の翌日早速出掛けた。

第二十六席

長庵、道中を無事に済して、頓て駿州は興津宿の、清見寺門前、……自分が廿餘年前見覺えの其店に行つて見ますと、其處はかの類焼で焼原に爲つて居る。で更に其の引越し先を尋ねて見ますと、其處は倉澤寄の海岸の蟹の苦屋で、いや淺猿しいとも、情け無いとも。先づ

は俊寛の島流しに毛の生へた様な家。長「おい、とせは居るかね。」入口から聲を掛けますと、奥の方の蕨屏風の陰からヒヨイと頭を上げましたのを見ますと、丸で鳥羽繪の卒兜婆小町といふ爲體。それがとせのでムります。一體このとせも田舎育ちとしては目鼻立の揃つた方。それは娘の小夜が文句無しに六十兩の小判に爲つたのでも知れませんが、併し今の有様を見ると三文の價打も無い。無い理だ、彼女は前申す重兵衛横死の通知以來、餘ほど氣が變になつて居るからでムります。ジツと長庵を見詰めて居つたが、何う取違へたか、妹やお前重さんだね。好く歸つて來てお呉れだ。」とつか／＼と出て來て長庵が肩の荷物を取らうと致します。長「馬鹿ア云へ。己ア長庵だよ。お前が兄きの以前の長太郎、長善だよ。」妹いへでもお前！」と背後を見るから、長庵も同じく其方を見ますと、こは抑も入口の板戸に映つた重兵衛が血だらけの其の姿。長「あッ！貴様?!」と長庵覺えず疊の上に駈上つて、更に目を止めて睨み附ると。何の馬鹿な！其れは自分の魍魎。海に映つた日光の反射で其んな怪しい容に見えたのでムります。長「あ、爲うか。己の影か。籠棒な！」と云ふ其の突端に、戶外から「お母さん、又たあの人か……。」と慌て、駈込んで來た女の子を見ますと。色は日に焦け、潮風に吹れて居るから、白くは無いが、目元の愛らしい、お小夜に好く肖て居る子で

ございます。長「おう。お前はお梅かの。己は伯父さんの長庵だよ。今江戸から来たのだよ。」と云ひますと。女「おや然う！」と云つたが、彼娘はわつと泣伏しました。思ふに子供心といふにも、亡父重兵衛の事から母の事、借財の事、其日の生計にも困る事。又た病氣の手當その外、何う爲たら好いかと思つてゐる鼻へ、便りに爲切て居た伯父に來られたので有りまするから、感慨といふにも迫られ、嬉し泣にも泣いたのでムリませう。長「む、ナニもう然う泣くな。己が来たから大丈夫だ。」と長庵は其の襦袢の衣物を着た、脊の上から摩つて遣りますと。其れをジツと見て居つたおとせ「梅、此人は何處の人だい。」梅「あれはお母さん、江戸から來なすつた伯父さんだよ。あの長庵の伯父さんだよ。」と、あゝ然うかいあの、家の伯父様を殺しなすつたあの伯父さんかへ。え、然うなのかへ？」長庵の驚き方と申したらムいません。背中から氷水の溜をぶッ浴られて、焼火箸を咽に突入れた様にも息が塞つた。長「と飛でもねへ。氣狂だつて餘り滅法界な事を云ふ！世間に聞れども爲て見ろ大、大變だ。」梅「否へ伯父さん、お母さんは人さへ見るとお父様を殺したくッて泣なさるので、誰も否がつて來て下さいません。だから伯父様……。」長「うゝ然うかの。其んならア好いが、眞正に膽を潰させやがった。あゝ未だ胸がドキ／＼爲てへらア。笹棒め！」お梅は泣ながら、梅「そ

の、誰も來ません中に毎日々々來ますのが、あの金貨の岩春ツて奴の番頭ですよ。伯父様が江戸から來なさるツて事をお母さんが話したのだから、今日は出でか、明日はお着かツて毎日々々！今も前面に影が見えたから、必と來ませう。」長「ん、來て伯父さんに借金でも返させ様と云ふのかの？」梅「何だか知らないが、お話を爲たいと云ふのだから、伯父さん其奴が來たら逆になさいよ。」長「ナニ笹棒な。借主の死んだ跡金を誰が濟く馬鹿があるもンか。好えわ、打棄ツとけ！」と言ふ處へ果して遣て來た。手「免なさいよ。何うだね、伯父さんは見えたかね？」と云ひながら敷居を跨いで、忽ち見附けた長庵の後影の手「やア出なすつたね。難有へ。モシ貴方は江戸のお兄様で……。」と彼の手代は横目でぢろ／＼睨めながら、其處へ出て挨拶を爲やうと云ふのを、長庵は見向ても見ません。長「梅や、伯父さん腹が減てるから、倉澤の鮎を三百がとことそして、お酒を五合と飯てへもの。……其餘の零錢があつたら、貴様、何か美へ食でも買て食へ。」小玉銀を一つ投げ出しますと。梅「伯父さん、私は要らないが、お母さんが此間から蜜柑の好いのを喰たいツて、此錢で買て來ても悪か無ツて？」長「え、贅澤な事を云ふ。貴様が食させたいと思ふなら、何でも與れろ。」手「おやお、好い伯父様が來なすつたね。時に伯父様……。」と側面から云ふのを、長「ふん、お前

第二十七席

の様な結構な甥子も己ア持たねえよ。巫山戯やがるねえ！手「いや巫山戯や為ねえ。何うも先刻ッから見た様だ〜と思つてゐたが、おい兄弟、貴様ア箱根の長善ぢやア無へのかね？」

長「え、何だ。俺が事を長善ッて！」と、長庵、始めて振願ッて其の手代といふ男を見ました

が、長「ヤア成る程、貴様アあの三次だな。爾うだ、人形か。人形三次か！何しろ不思議な再會でムります。長「む、梅」と呆れて居るお梅を見まして、長「……もう一升買て来い。三次手前一分出せ。む、何でも宜いから出せ。太へ奴だ。俺の十五兩、盗ねやがッて！」先年の箱根の財布の事を申すのでムいます。

「一分出せ〜」と長庵に権柄附を吃ひまして、流石に膽を潰した人形三次「耳ッちいなア。あの時分から好い和尚に爲るだらうと思つて居たが、其の通りだ。嘘ぞ手も上つたらう。宜いや、まア久し振で一杯買うと思やア腹も立たねへ。さア一分！」長庵も笑つて、長「買うも無へもんだ。此の金は誰がのだ。俺の財布を胡麻化ときながら。……併し手前も、其の金の出しッ振を見ると、大分懐中が好いと見えるな。まア好い事だ。」三「好い事も無へさ。金貨の

手代で、亡者苛めさ。先づ罪な商賣さ。」長庵は打消し面に「何うせ何商賣でも、商賣となりや罪造りだ。だが、金貨の手代とは變う化たな。彼時から直ぐか。三「いや、でも無へが、何しろあの武士（藤掛道之進）に捉まつちや面倒だと、裏山へ逃げて、湯河原へ下りて、伊豆山から熱海と湯場を廻つて、好い目でも出るかと思つたが、もう駄目だな。で關東は縁喜が惡し、仕方がねへ京阪へ上らうと、江尻まで来ると脚氣を踏み出して、始末が附かねえ。爲う事無しに今の岩春爺の厄介になると言つた様な譯。意氣地は無へのよ。」と、此話の中にお梅は甲斐々々しく酒の支度をして、鮎の料理もして、今日は強い伯父様が居て呉れるから、高利貸の否な奴が何を言たッても怖いものかと云ふ風で、母親の看病も仕て居ります。母親のおとせは、又た時々ヒヨいと頭を擧げては、妙な薄氣味の悪い事を饒舌つて、お梅を困らせ長庵をも嫌がらせて居ります。三「何にしる病人にも困つた物だなア。」長「その困らせられるのも、一つはお前等がお蔭だせ。何とか爲て呉れ。」と盃を三次に指します。三「何とか爲るも、何う爲るもんか。未だ大變に未拂てるんで……。」長「え、感の悪い、借金の事ぢやアねえ。此處の家の始末をだ。お前の其の親方へのは今幾歳に爲る？名は何てへだ？」三「岩春圓作ッて、五十五六よ。」長「家にや幾ら許りも持てるか。」三「因劫な割には澤山は無へ

な。三千兩くれへだらう。」長「女好きだと云ふちやア無へか。三次は笑う様な、苦い様な面を致して、三話しにやなら無へ。丸で狒々だね。」長「其の狒々なら、何うでへ、年頃も好し家の那女を引取せて與ねへか。」三「引取らせるツて、年頃も餘り好くもねえ。」長「然うでも有ンめへ、幾歳違うか？併し此方でも此節ア、老奴が妙齡のを娶うのが流行るかな。」三「そりや、何時……何處だツてもだらう。」長「何處だツてもツて、大抵釣合と云ふもある。何だか話が齟齬う様だから、三「お前は何の事を言てるだ？」。長「庵は笑ひも爲ませんで、長「あの老婆のよ。」三「え、お母のか？」長「然うよ。氣狂へよ。」氣狂ひの縁談とは、三次も聊さか驚きました。三「戲談ぢやねえ。此んな一筆畫の三途川の婆さん見た様な病人を、何う爲るだ。」長「ちや貴様のは、此の幼女のか？」三「然うさ。少女のさ。」長「其れこそ、馬鹿吐くと云ふもんだ。少女は此から出世の軀體だ。其んな狒々なんかの餌食に爲れて溜るかい。ンレに三途川の婆アと云ふが、老奴の閻魔だ丁度宜からう。片目に、手坊に、跛足だとか云ふぢやアねえか。山本勘助の兄きには、一筆畫も相應だ。世話をしろ。」三次も暫らく考へたが三「然うよなア。融通の利く金目のお品を、彼様な畜類にお荷物させるも、勿體ねえが。ソレにお母の此病氣も、根が亭主に別れてからの愁傷だ。若しか狒々でも山男でも亭主てへもの

が又た出来てなア。世の中の樂みてへのが有たなら、癒るも知れねへ。年も三十四五か。本來なら言う通り似合の夫婦だ。俺も今迄の罪滅しに一つ此事う片眼に話して遣らう。」と三次妙な後生氣を出しまして、其日は別れて歸ります。歸つた所は興津の宿外れ、岩春園作の家でムります。三「え、今歸つて参りやした。」と主人の居間に挨拶を致すと、成る程其處に居る奴が右の狒々でもムりませう。見るから恐ろしい白髪老夫で、如何にも片眼の、手坊の。跛足と見えて、始終足を投出して居ります。扱て其の片眼も、手坊も、跛足といふも、皆金の爲め。満足に産み附られて呉れましたる親の遺骸を、自個が慾と……申して、何も盗みも泥坊も致しませぬが、其の泥坊より苛い無慈悲を爲まするで、天の此罰！すなはち此の制裁と申すを受けまして、或る時片眼を潰された。其れでも屈せず、益々強慾を働さるで。今度は片手を叩き折られた。剛情な奴！其れでも弱らず、彌々弱い者苛めを爲すので。寧ろ動けぬ様に爲て遣らう。」といふ若い衆の相談が、或る闇の夜に、出し抜の向うを一つ振舞はれて、ぼきりと折られた。とうとう其れで跛足に爲つて、何様、歩くは不自由になりましたが、否や却々、慾と我慢は杖と一緒に突張つて来て、彌々高利の激烈しい貪り取る。誰も實に此奴が所業をば山犬の如くに憎んで居りますが、其れでも矢張り世

第二十八席

「断えないで、撲殺して遣りたい！」といふ圓作に、此方が却つて打殺されて居りました。

圓「あゝ三次、歸つて来たか、何うだへ今日の上り方は？ナニ不可ねへ。おい／＼些と氣を付けて貰はうせ。此頃餘まり抄の行くてへ話は聞ねへから……。うん帳面か。見せろ。」と圓作は例の片目できよ／＼勘定の小口を取つて見て、圓「うー權太の一分が未だか、作十の二朱と四百が替替か。川端の與二兵衛が一兩の大口は未だ些とも動かねへだが、彼金ア丈夫のかな。ぶち倒らねへ様に用心ささせよ。」三「え、大丈夫でござす。元金は未だ動きやせんが、利はさつさと入れてます。最う二月で元金の三倍に爲るんだから、催促の手加減てへを爲てへるので……。」圓「其れも然うだが、此間の宵床新田や隨徳寺門前の様な鈍痴を踏むめへよ逃られッ仕舞てから幾ら騒へだつても追附ねへ。正真正に盗兒に追銭だ……。」と猶は帳面を見て居りましたが、圓「おい、あの重兵衛が所は何うした？」三「え、其事で、今日廻つて見ましたら、江戸の親類の長庵へへ醫者が來ましてね……。」圓「うん來たか。シテ何う話を聞けした？」三「兄きの長庵の言ひますにやア弟の重兵衛もあゝ殺たし、女の手じや駄菓子店でも張

り切れ無へから、引取て江戸へ逆行くと云ふんだけれど、兎に角此家にあれ丈の借財も有り、其の趣方も附けにや叶らずか、就ちや其の返済方の出来る間ね、遣つてる族を當方に置ちやア下さるめへか。然すれば金は……。圓作は聞くより其の片語の眼を引繰り頼した、圓「三次、何う云ふ！借金の抵當に遣つた族を引取るつて。其りやア一體、何と何うした譯だ！三「三」アさ然うお前さんの様に、話を途中から寸断切れちやア對手が堪らねへ。……其りや恠うなんで。勿論、元金も返す、利も拂う、借賃の約束は證文面通りに事は爲様が、只だ江戸と興津と離れて居る土地だ。萬一の不約束にでも爲つた時にやア……。」圓「糞でも食へ！ぢや最初から拂はねへ算段のだ。元金も返さず利も拂はず、お負に飯も食やア湯水も啜る人間を何疋か抵當に爲とくつて、體の好いお救小屋に乃公が家を爲る氣で居やがるだ。其の兄きと云ふ醫者、太へ畜生！。三次はベツと睡をして、三「解らねへや、カラ！毆鼠の飛脚ツてへ、前潜りばかりして怒つて居やがらア、畜類め！……え、旦那、然うじやア無へんだよ。あの家の奴をお前さんの妾なり神さんなりに爲せてへと云ふんだよ。兄きの言草は解つてまじやア。お前さんは最う六十にも近へのに、獨り者だ。床の上げ下しにも不自由なんだらう。幸へ此方に明きがあるから、其の手助けや揉み摩りの爲にお前さんの傍に置いて上げてへと恠う

云ふだ。何も其れで借金を踏倒さうの、證文を巻上げ様のと云ふんぢや無へ。詰りお互への利益やうにツてへだ。」四「ふう然うか。」と手坊は片手を揚げて、片膝の上の額を撫でながら、ニヤリと笑つて、四「うん然うか。」と云つた面は、悪黨の三次ですらソツと爲たので、好くも「慙う云ふ醜面が世の中に出來た物だと感心したので云います。四「ソソなら最初から早く然う云つて呉れれば、いざいざも無つたものを。……だがの三次、食扶持は彼方持だな。」三「其りやアア掛合さ。だが何處の國にか食扶持附の妾ツてへがありやすか。まア好く考へてお見なせへ。」四「考へたツて、品物は詰り先方のだ。其れが借金の抵當に爲つてる内、俺の用を達すと云ふのだ。膳碗を質に取つて、此方に客でもある時ア出して使はア。跡で拭つて仕舞ときや其れ迄だ。床の上下しを爲て呉れてへのも、先方の勝手、何も此方で所望と云ふ譯でも無へから、辨當も持參」と云ふに不思議は無へ。貴様、最一度、其事を好く掛合つて來い。」おや〜！と三次も呆れ返つた。因切も此れでは餘り法に過ぎて居る、高利貸なんぞ爲る奴に人情なして物の無へのは知れ切事。其の無へのをぐづ〜云ふは南瓜に時を作れといふ様なものだが、這奴のは其の雞にも劣つた根性で。雞でも雌にはこつこと餌でもあると教へて遣る。己が足腰を摩で叩かせする女。それも手前が人間並の身體でもある事

か。這樣片輪の、化物見たやうな奴下居ながら、眞祿な人を捉へて質へ取つた膳碗同様に使はうと爲やがる。詰り這な外道は己達人間の敵だ。人間の敵たる外道！一番此處で打殺して與れやうか。と三次は思つたので云います。此奴も餘り、人間の味方」とも言へない、盜見の悪黨だが、併し何所に未だ哀憐といふ俠氣のやうな物を持って居ります。其點は幾らか人間に近い方だから、此の圓作の、慾得の外には目も鼻もない、鳥獸にも劣つた料見といふのを怒つた。其れで言附られたを幸ひ、ふいと家を出て、長庵の居るおとせが方へ行かうとする道、例の海端の浪打際を急いで參ると、三次、何處へ行く。」と云ふ人がある。見ると長庵で云います。三「うむ、和尚、今貴様の家へ行かうと思つて……。」長「何う其様に眼を圓くしてへる。」三「圓くも爲無くツてよ、あッ畜生、人間を侮蔑てやがる！」長「何だ大變怒つてるな。實は己も貴様に遇はうと思つて來た。」三「ふう何用だ。」長「庵は苦笑の低聲、長「己のも人間が化物に喰れさうに爲つたから……。」

第二十九席

「化物に食はれるとは、何う云ふ譯のだらう。」と三次は又も驚きました。三「和尚、化物ツて



何う爲たのだ。長庵は眞面目で、長「化物とは、幽霊よ。」三「然うか、己ら化物と幽物とは違
うかと今迄思つて居た。」長「ふう、貴様は化物に親類でもあると見えて大分詳細いの。」三
親類どこちや無へ。俺の旦那だ。あの化物の獸畜の旦那の金貨の畜生めへ、眞正に無慈悲な
事を吐しやがる！」長「籠棒めへ。金貨や地貨や、家主や差配に慈悲心があつて商賣が能るも
のか。此達らのは大道へ出されねへ悪事を爲てへるだが、彼奴らは、天下は免で、晝日中
盗取をして居やがるのだ。」三「眞正に然うだ。貸附に天引の二割、五分の手数料、一割の禮
なんぞと一兩の元金の中から物の小一分も踏奪つて、月の三十日を一月に勘定して、三月縛
りの正味一月と三日杯ア、盗坊にも出来ねへ狂言だな。」長「ソレよりも此節の江戸にやア、
地主同志が馴合の賣買で、地借の家持を泣かせるかと思へば、家持は又た、些と商賣の繁昌
して来た店子を見ると、突如に店立を吃して、泣を入れたところで屋賃を上げる。一體悪黨
もキビくした奴だと未だ男らしくて好いが、其んなケチくした弱へ者苛めの奴は、眞正
に撲殺しても遣りてへなア。」三「和尚、ソレなんだよ。俺の怒るのも、お前と相談しやうと
思つて来たのも其事なんだよ。俺所の金貨の畜生!!」と三次は勃氣に怒つて、彼の「食扶
持を掛合へ」の一條を話します。長「妾の食扶持を、當人は持參は呆れるなア!」其の掛合を

言附られた手前の怒るのは尤もだ。撲殺ッ了へ！」「三「和尚、手傳うか？」長「手傳はうとも！
 そして其現金を殘らず引摺へ！」「三「承知だが、でお前の方の、其の幽霊退治の手傳とかは何
 う爲るだ。」長「そりや實は、あの氣狂への妹だかの……。」三「うん、あの妹を？」長「お前の
 方に引取られ無きや、仕方がねへ、何所で斬殺して貰へてと云ふうんだが……。」三「此は此
 には首を掉りました。三「其りやア不可ねへ。餘まり殺生だ。何だつてもお前の妹なんだら
 う！」長「妹分よ！」三「分でも妹だ。況て亭主はあゝ死たし？」長「死た亭主が、其くッ附て
 居るらしいから、俺も困るのよ。で殺ちまうと云ふんだ三……。」三「三は戦へた、三「ぢや何け
 へ？重兵衛の幽霊……。」と柳の下で「怨めしい」と云ふやうな手附をして見せまして、三「出
 のけへ？」。長「目にはやア見へねへが、何だか居るらしい。俺ア來早々も遣られたが、今お前
 が歸つた跡でも」亭主殺し、人殺し」ッて俺を言やがッて、始末に終へねへ。と云つて流石
 に俺も、今いふ妹だから、自身手を下したくも無へ。ソレでお前を頼むんだが、其方が其譯
 ぢや一も二も無へ、何うか殺てくれ！」三「ぢやお前、其の重兵衛も殺附けた。身賣の金も踏
 奪つた。ソレで幽的の怨念が取附いでる。女房に乗り移つて種々な怨言を吐うと言ふのだね。
 随分なア、非道へ事を爲たもんだ！」と三「次、つくづく長庵の面を視詰て居ますると。長「好

いやア、其邊處は貴様の判断の成る通りにして置て、そして今の事、何でも行れ！」三「次悪
 黨の割には人が好いから、とう／＼長庵の言附け通りに遣る事に承知を爲せられて、此から
 其の兇行の手筈といふのを打合して、兩人は足早に其處を分れて、三「次は再び圓作の家に戻
 つて参ります。三「行つて來やしたせ。」圓「うん、何うした。」三「兄きの長庵に掛合ましたか
 其んな理窟は無へ。膳碗だつても使へば損料を出すが當然だ。當人の食扶持は其の損料のだ
 から、此れは旦那の方で出すのが當り前。と一寸と聞くと尤もな理窟を言ひますので……。」
 圓「其りやア俺だつても、娘の方なら食扶持を與せとは云はねへよ。今回な後家だ……。」
 花の立枯しの掃溜の隅へでも打棄る奴を、情けに引取て貰ひてへと云ふのだから、
 憎代も與せと云ふだ。買うと云ふと、賣りてへと云ふのは、其處に大變な相違がある……。」
 三「私も其れで、食扶持が出せねなら女の抵當なざ入らねへからと……。」圓「おい／＼出
 きた事……不要へなんて誰が言つた。」三「は、ア心配なさらんでも好い。駄引に然う言つて
 ね。女よりも金！ソんなら直ぐ返せと云ひましたら……。」圓「成る程、うん、巧く出来たら
 で、降参たか。」三「そりや此方の壺さ。それでお前さん、婿入りだ。」圓「や？」三「今夜
 圓「えッ?!」と圓作も流石突痴た體でありました。

第三十席

岩春圓作、婿入りと云ふ事に相成つた。年は五十五、面は片眼の、手は手坊で、足は跛足の、毎度申し上げるが化物だ。化物の婿入り！先づは百鬼夜行の繪にでも無ければ見られぬ。圖でいませうのが、其れが兎に角今夜は花婿さまのでいます。圖「何だか極りが悪いいなア。」三「何が極りも糸瓜も入りますものか。實際がお婿さんでお出なさるのだから仕方無へ。併し然う極りが悪るけりや夜分に爲せへやし。一體は婚禮は夜間のものだから……。」

「然う爲やうよのう。幾歳に爲つても婚禮へは、何うも其處の末が宜く無へものだ。」一體が妾といふのにお婿入も變しいが、其の兄といふ引受人の長庵にも對面も爲ませず、手代の三次が云ふ形になつて、跛足が杖にすがつてヒョコ〜と出掛る。總てに附いて奇怪至極でいませうが、何うも世の中の實際は事實となると、不思議が七分で、泥坊を捉まへる刑事巡查が、掏賊と同腹になる。依託の荷物を保護する役目の鐵道吏が、無暗に積荷を引抜く。艶子殺しの出齒龜が、控訴で無罪の火の手が高まつて。新刑法で賭博と決定つた馬券問題が、馬票と改名して議院へ面を出す。要するに不思議といふ事、矛盾といふ事が、すなはち浮世

と申す字なので、世間は此の不思議があるから、面白くも、可笑しくも、活きて働らくのでございませう。で一方では長庵が、長おいおとせ。貴様其んな垢だらけな、棕櫚帯見るやうな頭を爲て居ては、重兵衛が歸つて来たとき愛想を盡かされる。今日は己れが湯を沸かして遣るから行水をして、隣りの神さんにも、櫛巻でも宜いから結んで貰へ。梅、そしてお前は此處らを片附て、酒の支度を爲てな……。お梅は驚いた。殺されたお父さんの重兵衛が、「歸る」と云ふのは何う云ふ事だらう。伯父さんの來て呉れたのは嬉しいが、斯う晝も夜もお酒を呑むで、お客許り爲れてはお母様の氣が彌々苛らくして、詰り病氣に障るだらう。とは思ひましたが。十四の小娘。異議の申し立ても出来ませんから、伯父の言ふ通りに爲つて只だ働きます。其中、おとせは湯を使ふ。髪を結う。氣こそは變ですが、年は三十四の未だお母盛りでムります。殊にお小夜やお梅の母、田舎にしては好い器量の神さんと云はれる方だから、斯う遣つて見ると、顔だけは價める。長むう、惜い容貌だなア。重兵衛も此れぢやア執念を遣したらう。」と兄さん、家夫ぢやア何時歸つて来るのだねへ。私や斯う折角奇麗に爲つたのだが……。長むむ、今に來るだらう。序でに白粉でも搽つて置け。」と、然う爲やうよ。家夫は江戸から歸るのだから定め美しい女の見飽を爲て來だらう。愛想でも

盡される大變だ。ソレにお小夜も来るだろうから……。「發狂すると、苦勞や外聞や、羞恥いと云ふ氣が無くなつて、本來の生れた儘に歸るのかして、女は兎角赤い帛や花簪などを挿したり掛けたり爲たがる物だと申します。哀れおとせも然様だ。一庵花嫁にも爲つた氣でもって、其處らの抽斗からお梅の頭の物やら何やら引出して、頻りと頭髮へ捲き附ける。其れを見たお梅は、梅お母さん。まア！」と梅、似合たかへ。「梅……何う爲たの？」長「何うでも宜い、お母さん、今日は些と悪いんだから、お前は今夜先刻の神さんの所へでも行て寢て呉んな。跡は伯父さんが引受ける。何しろ今夜は安心して、寛く何處かで寢て来て呉れ。」梅「でも……。」と心配に爲るから言ひますのを。長「行つたら行け！」眼を引剝して睨み附けられて。梅「はい。」とすこゝ出て行つた。其れも知すに母親は頻りに紅やお白粉を搽つて居る。處ろへ入つて来たのは圓作と三次。圓作は袴こそ穿きませぬが、兎に角袖の紋附の羽織に、一本指して、杖を力にかのヒョコたん！三次は按摩の手引と云ふ格で、圓作の手を引張つて上へ舉げます。無論、其の埴生の小屋といふ悒鬱い家。併し夜目遠目笠の内とて夜は存外破綻の隠せるものでムいますから、長庵も故意と燈火を暗くして置く。圓作は又だ老人の片眼と申すので、流石に然う發揮りとは諸事分りません。三次に引れて座に就くと。

長「え、私が重兵衛兄の長庵、常家の者も種々貴君には厚情を戴きまして……。」圓「否へ、一向屆きませんが、重兵衛どのも飛だ事で……。」長「其れに付き、又た不思議な縁をもちまして……。」圓「いや年甲斐もムらんが、何か其の昔く居場所にも困りさうで。先づは世中は相見互ひでな、困つた時にはお互ひに助け合ふのが人間の道。私が金子の融通を致して居るも、詰りは其の理由で……。」此の化物も口は人間の様なことを言つて居ります。圓「就ては其の當人をな。は、ナニ一二度は目目に掛つた事も有るのだが……。」と、此れから彌々其の見合ひの一段と名成るので……。

第三十一席

圓作が「兎に角當人を」と申したので、長庵も「おとせく」と呼びました。其れ迄おとせは臺所の方に押込れて置れたのが、自分の名を呼れたから「はい。」と云つて出て来ました。来たのを見ると、長庵も三次も「おや？」と云つて驚いた。何故驚いたか。こは抑も如何に、おとせは眞黒黒の黒ン坊！可哀想に發狂して居る彼女は、最う幾んど白粉と鍋墨の區別が分から無い。何でも手に當るものを面に附れば奇麗に爲る事と心得まして、毀れ籠の上に掛けて



ある古鍋の尻の墨を精々と擦つた。だから黒ン坊！此の黒ン坊に出られては、如何な狒々でも驚きませう。圓作、名の如く、其の片方の一つの眼を石輪玉ほどに圓く致して、歪んだ口を尖がらした。圓「三次、此りやア何者だ。俺ウ嘲弄かして貴様ら遊戯ぶのか！」すると黒ン坊のおとせはつかくと出て、圓作の怒つた面を見て居りましたが、と兄さん、此の老夫の片目は誰なんだへ、お前呼ぶから私や家夫のでも歸つて来たかと思つて出て来たんだよ。此の老奴、何處の奴だへ。地體圓作は此前にも申上げてありますが、彼の貸金の抵當に姉娘のお小夜を奪うと目論んだのでムいます。處ろがすツかり當が外れて其女が江戸へ連れて行れた。其んなら妹娘のお梅をとも思つたが、此れは餘り年が行きませぬ。仕方が無いと諦めて居ります處ろへ、持込んで參つたのが此のおとせの話で、彼も、おとせが病氣だとの事は三次からも聞ては居りましたが、流石に氣狂とは存じません。亭主に死なれた氣落位ゐの事と鑑定を附けて、其れにしても今年は三十四五。お母だから無論娘共より年を老つては居るがナニ目鼻立のキリツとした好女、彼女なら後家だつても爾う馬鹿にしたものでも無へ。と例の狒々根性。早速承知をして、寧ろ極りを悪がる程にして、此れも戀ゆる、君を思へば徒跣の杖を突き、ヒョコたんくと跛足を引摺つて參つたのでございます。其の參つたのも

何も決して片目の老夫のと其んな失敬を言れ様杯とは今更らで、自分は此れでも今日は懸婚様。女房のおとせや兄の長庵に十分歓迎される積りであつたのが、何だ！此體でムります。當人は氣狂。面は鍋墨。言ふ事は滅茶苦茶。目鼻立も鱈立もあつたものではムいませんから圓作。憤然として腹を立てました。如くにも尤もの次第。此れは此方一言も無いからして、然しもの長庵も黙つて居ります。胸に一物の三次も、此場の體が餘りに突飛だから、何うして好いのか分らないので孫々して居ますと、圓作の方は掛る相手が無いので、とうとうおとせと喧嘩を初めた。四「何だ此の氣狂め、老奴も片目も無へ、汝が其面を見ろ！」とおや此人は私を氣狂だと！手前こそ人殺し！お前は家夫のを殺したろう？」四「やア人殺しだ！さア開業なンねへぞ。三次、貴様ア此んな場所へ引張つて来て、俺を人殺しなんて言せるのか。」此れが動機と云ふもので、總ての場合に大事なものでもムります。三次、今いふ孫々致して、狒々と黒ン坊が摺み合でも初めたら寧ろ逃さうかとも狼狽て居たのが、此の「人殺し」の一言を聞くと、忘れて居た役目を思ひ出したかの様に氣が確りして來た。三「何でへ！人殺しが何したンでへ。汝、其れでも今迄人殺しを爲た事が無へ氣で居るのけへ。」四「や？貴様ア主人に對つて大逸た事を云ふ！」三「主人も凄まじい、此の化物め。不人情の一つ目老奴の、人

間の生血を吸う畜生め！圓作は其れでもひよろくと突立つた。彼は軀體は利か無くても氣だけは負けない頑丈老夫でございます。四「ン、汝ア何か謀叛を企らんだな。へ、え措け大方己を殺して於て家の有金でも攫はうと云ふのだらう。廢せ！俺の金の仕舞所なぞ手前達に分るもンけへ。長庵も此んな下手な指金は廢にして、窮るなら困ると正直に云へ。次第に依つたら金の一分や二分は與れて遣らア。」と丹詞を切つたが、此の睥睨は長庵には利ません。長「成る程俺が指金では無へが、同腹は同腹なのだ。女房の食扶持を奪うと云ふ不人情を三次が見限つてぐづぐづ云ふから、俺も貴様の様な奴は居ねへ方が跡腹痛めず、至極都合の好い方だから撲殺すなら手傳ぐれへ爲て遣うと云つたのだ。此場に及んぢや文句は無へ三次、ソレ！」三「合點だ！」と三次は矢座に立ち向つた。四「然う聞く上は！」と圓作は彼の腰にした一刀を引抜きました。此が寇に兵を借すと申すのでムりませう。二つ三つ振り廻す間もなく忽ち三次に振り取られて、手腹をぐさ！圓「わア！」と苦惱む、其の有様を見たとおとせは「兄様怖いやう！」と縋りつくのぞ、長「手前も活て居ても人困らせ。寧ろ冥途の重兵衛所へ往け！」とぐつと引寄せて、長「南無阿彌陀佛！」。兩人は手早く二人の死屍を一つにして、折しも満潮の海端から水葬禮。抑も此んな悪事を働いて知れずに居やう杯と思ふの

は大間違ひ。人間の眼は見て居りませぬでも天の眼といふ星の眼が白眼で居ります。而して直さま冠せるのが、天の網！此を脱れる事は如何な者でも出来ません。

第三十二席

三次は圓作を脇指で刺ります。長庵はおとせを絞殺す。いや非常な慘劇を一場所見せまして其の二個の死骸は直ぐ海の中へ投込んで仕舞ひましたが、圓作の方は藻に溺られたか、鯨に喰れたか、二度と形を見せませなんだが、おとせの方は其の翌日磯邊へ打上られたので、いいます。なれど幸ひなは絞殺した死骸。身の内に疵らしい疵も無いに、彼の面は銅墨の面。長庵の口状も發狂、お梅の言立も氣狂、近所の者も同様の申し口なので、哀れおとせは夜中に狂ひ出て、身を投げたか、但しは波にも引れたかと云ふ事で、檢屍も相濟んで、お梅は長庵へ引渡し、先づ落着に及びましたが、一方、圓作の方も夜中忍んでおとせが方へ参つたので、誰も此家で殺された杯とは思ひません。殊に足が不自由だから平生とて戸外へ出ませず、物の一月と其影を見せぬ事も無いから、此夜より家に在ぬのを誰とて氣の附た者は無いので、いいます。で三次は寛ぐり其の翌日一日掛りで金の所在を探しましたが、成る

程、何うしても知れません。跋足だから、鍬で土を掘くる様な事も爲まいと思つたが、其れでも念には念を入れろと、さア掘つた。椽の下から庭先、沓脱の石までを掘くり返して見ましたもの、三千兩と目星を附けた現金が、掛硯の引出しに入つて居た五兩二分と錢少々といふ外には缺けた寛通も無いので、いいます。三次もとうとう尋ね飽んで、其晩長庵の所へ参つて、三、和尚、駄目だ。成る程化物の云ふ通り、捜したが無へ。此れ限りだ。長、無へッて事が有るものか。炬燵の巢櫃だらう。三、巢櫃どころか、米櫃から、庭の土器鉢まで引くり返して見たが、無へ！長、不思議だなア。ぢや那奴を踏縛つて叩いた方が宜つたッけな。五兩二分じゃア仕方が無へ。骨折損だ。馬鹿々々しい。何しろ金といふ物は、或る點から考へると、實に其の馬鹿々々しい者で、いいます。圓作の様に精々と溜めて、其れが爲に土手腹を刺られて仕舞う馬鹿々々しいのもあれ、三次の様に此んな詰らぬ人殺しをして、自分で自分を首の無い罪人にして仕舞う痴呆たのもいいます。此等の者に、一體君等は金なる者の効用を何う心得てると聞きましたら、正逆に、非業の死を遂る爲めの媒介、牢獄へ身體を運んで呉れる眷。とも答へますまいが、事實其れが然う爲るのだから恐怖しい。だから金は敵！敵！といふも語弊がありますが、先づは「火」と思召たら間違は有りますまい。則ち無くて

成らぬ物の、有つて怖い物、善く之れを用ゆれば人間生活の本尊とも爲りますが、間違つて此れを濫りに食つたら、其こそ人を殺すの大本と相成ります。と降らぬ理窟は扱置いて、三度もぶつ／＼申したものの、最う二度と歸つて諸方を搜索す氣にもなりません。(後に此家を毀したら、其の小判が雪隠から出たと申します。何處迄も汚ないお話だ。で、長庵と連れ立ち、お梅の手を引いて、江戸は麴町平川町の例の宅へと参りましたが、其の道中でもしくしく泣いて兩人を困らせたはお梅でムります。梅、伯父さん、私や尼さんに爲りたい。お父さんは殺される。お母さんはあの通り、姉さんはお女郎とかに爲んなすつて苦んで居なさるつて。私、何うか皆なの苦患の助かる様に、寺へ入つて尼さんに爲りたい。「長、う、好しく。お前が爲りたいと云ふものなら、尼にでも坊主にでも、何にも爲て遣る。併し姉様の居る吉原だけへは一遍往つて、お母の死んだ様子も善く話して、又は此後の助けに爲り合ふ相談へも好く爲るが宜い。可哀想に姉だつても、此からの頼みはお前一人だ。なア三次。」「三、然うだよ。尼さんも宜いが、私の考へちやア、お前は矢張り姉さんの傍へ行つて、其の手助けや相談相手に爲つた方が順當だ。此れが昔しの白石噺だと、差向き敵打といふ處だが、父さんの敵の道十郎は牢屋で死ぬ、母さんの方は自業自得か。すると今後の親孝行は、姉孝行を

爲るより外は無へ。先づ其様ものだろう。「三次は無論悪黨ではムいませるが夫れでも何處にか義侠の氣のある、長脇差の擧句だけに涙ッ脆いところがムります。其の代り長庵はどに氣が利か無いで、且つ博徒に似ず臆病だ。けれども正直の口状は何處にか人を感動させる力の有るものと見えまして。尼、々。」と云つたお梅も、彼の忠告で、其の寺へ入るのは廢めて、吉原へ行つて、姉の傍で、尼に爲つて、手助けにも、相談相手にも爲らうと云ふ胸を自分で決めまして、梅、ちや三さん、私や姉さんの所でお看經する。ねえ伯父さん、姉さんと二人でお經を讀んだら、お父さんもお母さんも喜ぶだらうねへ。「長、うむ、喜ぶとも、喜ぶとも、己も昔日は坊様だから時々行つて教へて遣らう。「三、は、和尚のは、經は經だが、阿保陀羅經だらう。」長、違へねへ、三味線入で陽氣になア。「梅、あら江戸のお經にや三味線が入るの？」

第三十三席

此話は轉つて、江戸新吉原は江戸町二丁目の松葉屋半左衛門が方、かのお小夜が身の上に相成ります。皆様に承知の川柳點に「孝行で賣られ、不幸に受出され」として有りませる。孝行と不孝の取り合せも面白いが、「不孝に受出され」が殊に振つて居る。處ろが中には爾

りでも無い。例の戀愛の神聖を振り廻した擧句が、日本の臣民は、法律の範圍内に於て住及び移轉の自由を有す。其れは憲法第二十二條にある。坏と申して、互ひに手に手を鳥がく……否や親兄弟の啼くのをも構ひませんで、情人なる者と突ツ走つた結果が、好い人忽ち悪い人と相成つて、某處其所らの貸座敷に押陥められる。慙う云ふのも新聞で能く拜見致しまするが、此等は「不孝にて賣られ」の組で、少しく場違ひとも申しませう。併し今でも、「孝行で賣られ」といふのが静岡の女學校の生徒とかに有たと申すので、其のひ友達の方々が氣の毒だとして義金を募つて、其の當人を救ひ出されたとか申します。誠に結構な事、人間の情誼は斯く有りたいたいもの。此等は「義侠で受出され」で明治の社會道徳も中々以つて衰へた坏とは申されませんが、其れにも優して孝行で賣られましたる重兵衛の娘のお小夜。六十兩に身を松葉屋に沈めまして、今は源氏名を小夜衣と呼ばれて居ります。其の小夜衣と恥かしい名を呼ばれまするは、小夜も覺悟の上だから辛抱も致しませうが、其金の爲に親父は横死、身代は悪者の手に奪れて仕舞たと聞きました時には、可哀や小夜は悶絶したのでムいます。旦那ア！早く来て下さいよ！。小夜衣さんが目を暈して！と遣手のおかやが飛で来る。牛「ナニ目を暈した。早くソレ草履を頭に載けて遣れ。此れは癩疔の呪なうでムいまするが。草履

を頭に載せられても金にさへなれば喜ぶのは、某政黨の信用議員で、親の殺された驚愕から目を暈した病人には、足駄を載けたとても癒りません。小夜衣さん！、小夜衣さんやア！。「コレ氣を確かに持なんしよ。小夜さんよう！。「あゝい！」とお小夜は漸くに氣が附きました。牛「お前の愁傷も尤もだらうが、然ればと云つて何う泣たつても殺された親父の生返るといふ譯も無し、何事も然うなるべき約束事とのう。小「はい。親方さん。もう泣きません。泣きませんと云つたつて、泣かずに居られた理の物ではございませぬ。口では綺麗に爾う申しても、目からはほろ／＼と零して居ります。牛「何しろ大變な事に爲つ丁々なア。併し其の敵の道十郎てへ奴が捉つたのは責ても事だ。金が返つたら伯父さん(長庵)を頼んで早く駿河の方へ送つて貰うが好い。親方は頻りに金、金と。六十兩の事はかり言つて呉れますがお小夜は金よりも亡父の愁傷のでムります。何うも氣が引き立ちませぬ。心が鬱結れる様に爲りまして、ぶら／＼と病牀に就きました。と或る晩の事、信濃屋といふ茶屋から送られてドヤ／＼と登樓つた十餘人の大一座。其れは淺草田島町の誓願寺の葬禮の二次會……葬禮の二次會へもございませぬが、兎に角其崩れでムります。又川柳を引合に出して恐れ入りますが、夕七つ、山谷と聞いて親父行き」といふ句も有りまする。夕七つ」は今の四時です。

午後四時といふ、行ついで、経が済むと、丁度吉原に燈りが點くと申す悪い時刻の山谷の會葬には、此は年頃の息子は遣られませぬから、親父が出掛けるといふ意味なので。今登つた連中も則ち其の出掛けべき親父の出掛け無かつた息子の連中、誓願寺の横手手から田圃を抜ける直ぐ吉原。すつちやかゝの紗歌の聲も手に取る位の近間の場所。甲や、今日の此の経の長かつたには恐れたね。あの和尚、此方連の吉原へ廻るのを知てやがって、故と引張るのかと思つたせ。乙「其様奴もあるめへが、長い長かつた。併し其の長いで苦んだだけ、又た酒の味が別段美へ。」丙「己ア酒よりも腹がへこくた。飯でも食はう。」乙「おいおい、此から寛ぐり飲うと云ふに飯とは情けねへ。其様附合甲斐のねへ事をされちやア、此佛は浮ばれ無へ。」丁「馬鹿くく！叱！黙ッてる。飯と云ふならウンと食はして、其中此男の分を此方で飲むさ。そして頭割の勘定なら其方が餘程お徳用向。おい、誰ぞ早く来て給仕をしろ。」此の悪戯談を聞ながら、引附の座敷の床柱に凭れて、象牙の腰指の煙管筒の頭にスポンスポレと音をさせて大様に笑つて居ります十八か九の、大町人の若旦那風といふ品の好い男、此れが神田三河町三丁目の兩替屋伊勢屋五兵衛の養子、仙太郎といふ者で云います。

第三十四席

此の若旦那仙太郎の家と申すは、右申し上げましたる神田三河町三丁目の伊勢屋といふ兩替屋。尤も江戸時代の兩替屋は大抵質屋を兼業しましたが、此の伊勢屋も其れで、猶ほ其外にも、油屋、荒物屋をも遣つて居ります。何しろ神田第一とかいふ富裕で、いろは四十八戸前の藏がある。其れ丈けの大身上を、當代の五兵衛一代で造つたと云ふ主人は豪者で、算盤から生れて、算盤を食つて、算盤で作つた家で育つたと云ふやうな儉約い人。だから此の時分の子守唄に「駿河臺から三河町見れば、乞食五兵衛が虱取る。虱だと思つたらヤレ金だ。」と云ふので云ります。又た川柳の引合で恐れ入りますが、川柳では吝嗇坊の事を「伊勢屋」と云ふ。其吝嗇坊を伊勢屋と言はせ初めたは、或は此の五兵衛の伊勢屋からかも知れませんが、兎に角吝嗇い。で又た世間で「長者子無し」と好く云ひますが、此の五兵衛も、金銀は右の萬とあるが、子育てと申したら一人の缺片も云いません。ソレで養子といふ事には爲つたが、何處まで慾の皮が突ツ張てゐるのか、地面を土産の、持參金附でなくては否だと申します。で久しく口も無つたのが、謂ゆる縁は異な物、つい目と鼻の間の皆川町三丁目の古着屋甲州



屋吉兵衛の次男仙二郎といふのが、望み通りの地面を二ヶ所に持参金三百兩で此家の養子となり、名も改めて仙太郎。先づ波風もなく三年を送つて、仙太郎、當年は十九歳、頗ぶる附きの美男子、養父と違つて愛憐もあり、物の道理も解つて居りますから、店の番頭手代から小僧、臺所のお三権助に至るまで、仙太郎の評判の好いッたら夥多しい。早くあの白髪頭の因劫爺が死歿つて、若旦那が家督をなされば好い。母家の繁昌をば祈るのだが、其には旦那の一日も早い方が店の爲になると、苛い事を云ひますが、實際の處、或は然うかも知れません。だから出入の人々も皆な仙太郎をば「若旦那々々」ッて奔走到します。今日も然うなので、此の伊勢屋へ下質關係の一人が死んだので、仲間が揃つて會葬りに参る。親父は出ないが、仙太郎は氣の毒だと云ふので同じく見送りに参つた其崩れが此の始末。何しろ十幾人といふ血氣の連中が爰を先途と呑み掛けて、突鼻々々といふ大騒動。其の中を一寸と抜け出した一人が、「おい、女將々々。」と手招き致します。信濃屋(茶屋)の女房は「はい。」と云つて廊下へ参ると。客時に女將。今日連れて來た若大將の、あの床柱に寄ッ掛つてゐる好い男ね……。女はんとに好男で有らッしやるねへ。俳優にも有りませんよ。」客おい〜其様惚氣をお前に聞うと云ふんじやア無へ、あの敵妓だかね。實は彼りやア己達の大事な家の若旦那

那だから、今夜は十分に愉快てへを願へて。だが、と云つて又た後來の事もあるから、不
 好い無暗な奴に遇せたくも無へ、何うか其處ン所をお前が巧く計らつてね、生な、質の好い
 引込とでも云ふのがあれば豪勢だが、何うだい其様な柄柄はあるめへかね。」女「え、其にや
 ア持て来い。お誂へと云ふのが有りますが、一つは内證へ聞て見ませう。」と云つたのは、お
 小夜の小夜衣が事であります。彼女は其後病氣といふので、未だ客をば取りません。主人
 の半左衛門、遣手のかやも情けある者と見えまして、先づ親の忌の果てる迄、當人の氣の進
 む迄と、申すので其儘に致して置きます。處ろへ今信濃屋の女房から右の話でいいます。半
 左衛門、小首を捻つて、牛かや、何うだらうなア。客衆としては滅法好い種の品物だが此方
 の心持と云ふふがなア。」か「旦那はんは太くあの妓を厭つて遣なはる。だが、此方は金を出し
 た者、先方は其金で買れて來てゐる體でムリやす。奉公人を大事になさるは好い事だけれど
 又た傍の示しと云ふもありませんから……。」と遣手は遣手だけの理窟を申します。牛「其りやア
 お前の言う通りだが。又たあの小夜は外のとも違う。不憚と云へばあの位へ不憚な女も無
 へのだから、其處の所も酌分けて遣らねへけりやア……。」と此人、箇様な商賣を致すにして
 は、天晴れ見上げた心懸。か「まア好うござりやす。私が一つあの妓の胸を聞いて見ませう。」

委せて下さい。」とかやは小夜衣が部屋へ参ります。享保の頃は、八代將軍吉宗公は殊の外
 騎奢がお嫌ひ、儉約を以獎勵になりました。一體世間奢侈の本は、歌舞伎と遊廓にあるから
 致して、此の兩所を好く取り締る様にといふは沙汰であつたので、町奉行は心得て、木挽町
 初めの三座、吉原の各店へも嚴重に其の旨を達しましたので、吉原の魁妓なるものも此の時
 分は極めて粗末な衣服を着たものさうにムります。況して勤めをも爲ませぬ小夜衣、袖か何
 かの、其れでも花やかな裕を着まして、寢床の上に俯伏して居ります。顔は見えぬが、其
 眼は定めて涙なのでムりませう。

第三十五席

遣手のおかやは其の部屋に参つて見ますと、小夜衣のお小夜は蒲團に顔を押し付けて泣て居
 ります。か「小夜衣さん、今日は氣分は何うなんだへ。」小「あい。」と小夜衣、顔を上げると、目
 は真赤だ。小「叔母さん、難有う。もう然のみの事は有りません。」か「お前さんの事に附ては
 ねへ、家の親方さんも大層心配して出のだが、お前さん何うだへ、座敷へ出てへわ？」
 座敷へ出ると云ふ事はお小夜には熟く解りませんが、大抵は其様事だらうと、小「あの客様

へ出ますんでり。」「か「爾うさ、お客を取る事さ。だが其のお客を取るツたつてね、お前さんの普通のちやア無つてね。今夜は其の……何れ憊う云ふ事が来やうとお小夜も覺悟は爲てゐたのでムります。だけれど其の質の考へを申しますると、客を取るの否だ。詰り商賣を爲るのが嫌だ。と憊う申すので、其んなら何故又た、斯んな吉原へ進んで来たかと訊ねますると、其れは言ふ迄も無い、親父が借金難義を救うと、丸焼の取り續きを爲せたい爲め。其外には何もムいませぬ。其の何も無いのが、眞に今は又た何も無くなつた。すなはち親の重兵衛は殺されて、自分の身代金も盗賊に奪られて仕舞た。然て見ると自分は、何の爲に憊んな耻かしい勤といふを爲るんだらう。女子の體として節操を賣るは尤も恥辱である。其の恥辱の節操を金銭の爲に賣る。此を我慢して爲なければならぬも親の爲なのに、其の親が死んで金も奪れて仕舞たと爲ると、自分は何も憊な勤をするには及ばない。金さへ返して仕舞たら其れで宜いだらう……と憊ういふ考へで居たのでムいしますから、今叔母様といふ遺手でも主人でも、何の怖くも恐しくも無いのでムいします。だから自分の思ふ處を決然と返答した小「私はお客に出るのは嫌や。何んなお客でも断り申します。驚いたのは遺手だ。」「コレ小夜衣さん！」と眼をびかッ！とさせたが、其のびかり！の内には、此の時分で云ふ小刀針

もあれば、焼火箸もあります。恐ろしい閃乎だ。か「私も此家で三十年近くも二階の取締を爲てゐるがね。未だお前の様に、何んなお客でも否や、お断り申しますときッぱり言つた妓共ツたら見た事が無い。お前さん、中々豪い事を云ふ。感心だがね。併し其の豪いを豪いで通さしては私の取締の役目が立ちませぬ。だから私の方は、然う云ふ強い事を云ふ人の方へは矢張り強く出るだがね。お前さんは私に強く出られても困らないかへ。」「お小夜の方では、其の困るとは何で困るのだから分らない。小「私や親方さんにあの六十兩のお金を返して上げて、其外にも今日で二月の餘の食物から何からの借金を進げたら、其れで好いかと……。」遺手は聞くとも眼の色まで變へました。か「お前は好い事を知ってお出だねへ。此處の樓を金貸か宿屋だと思つてお在のかへ。此樓はお前女郎屋だよ。女郎を飼つて、お客に宛行つて、其れで商賣して居るんだよ。小「え、飼つて？」とお小夜は此の「飼つて」に肝を潰した。小「ちや私も飼つて居ますのね？」か「知れた事さね。給金を出して食さして置く日には、犬や雞も同なじだらう。飼つとくのさね。小「ちやおかやさん、私、そんな犬や雞見た様に飼つとかれるのは嫌。此れでも人間の端ですものを。畜生の取扱ひされるのは嫌！」か「嫌なら嫌さ。廢すが好いけど。お前の身には六十兩ツて、大金が出てゐるよ。小「え、知つてます！」とお小夜も中々負けて居

ません。小伯父さんに返して貰ひます。か、あの長庵さんにかへは、は、は、は、お前も好い度胸だね。其な考へで居りや命も延るさ。百廿五までは受合だよ。小でもお前さん、私の六十兩だけ返したら可でせう。此の時分の身受(今でもだが)には、親元身受といふのがいます。謂ゆる色戀で無い落籍。其れには最初の前借金だけを拂へば先づ好いとしてあります。況んや當人の廢業をや。此れは品に依つては親方から其の證文を巻いて遣らねばなりません。かの承知の、白石齋の宮城野に對する惣六式が其れで。でも惣六のは自分の勝手だから其れで宜い。だが此式を強て遣られると、此の時分でも主人の方に非常の苦痛を感じます。詰り利の附ぬ、元金しか取れない。折角此方に見込のある玉を此でボカ／＼抜られては樓主の方で溜りませぬから、其で種々の名義を附けては故障を云ふ。其等を程よく操縦るのが又た遣手の役だから、かやも剛柔併せ用ひて只管右を揉消さうと致します。と表二階では、「わッ」といふ大騒動。間もなく此の部屋に駈けて來たのが茶屋の女將で。女「かやさん未だのかねへ。お表は大變のだよ。お客は惣立ちだよ。あの若旦那のお敵妓が極らなけりやア歸るッて！」

第三十六席

松葉屋の表二階の、引附といふ大座敷では「わッわ」といふ大騒動。何かと申すと、其れは彼の仙太郎の敵妓といふが未だ出來ぬと云ふからで、彼の信濃屋の女將を談じた四谷筆筒町の越中屋といふ男などは、向うから相談を外したと云ふのでぶッぶといふ大怒り。越「コレ女將は何處へ行つた。第一己達の談判を半分聞いて何處へ行つたア不都合だ。ヤイ何處へ失せやがッたか。」驚いたのは跡へ残された女中でふります。女「まア些と静かにして下さいませよ。お神さんは今其の掛合に……。」傍から出たのは半込改代町の鹿島屋の主人、鹿島だけに氣の短い、暴風のやうな人。鹿掛合つて何吐しやアがる。其様氣の長へ掛合待てりやア夜が明ツ仕舞はア。此等ア痴家のやうだが一番雞を迎へにして立になるんだぞ。大將の敵妓が決らなけりや己達の雜兵も一人で好いと遊ばれねへ、お神輿を直ぐ押立てるから然う思へ。越「然うだ、歸るとすべし。此處で吞でも詰らねへ。やい皆な起て！」合點だ！と一同は起ち上つた。歸られては大變でいますから、女「貴郎方、何うぞ後生でいます。よう、もう些しの間……。」皆え、邪魔爲やがるな！女「でも最う少し。今直に咄し合を

附けて参ります。彼方を止め様とすると此方が騒ぐ。此方を和め様としますと彼方が暴れる。可愛想に女中の苦みは大抵や大方の物ではありませぬ。何しろ十幾人といふ酔倒坊に取巻れて小突き廻されるのでありますから、愁訴も歎願も駄目。何うして宜いのか分らない。うろくして孫々して、面食つて、其策の出る所を知らずと云ふので、とうとう泣出して、逃げ出して、婢、お神さん大變ですよ！。此時女將は内證部屋に遣手の返詞を待て居りました。たが、すはこそ大事件！と見ましたので、同じく小夜衣の部屋に駈附けた。其れが前席の終りに申述ましたる所の體。女、おかやさん何うしてお呉れのだへ。あの連中なぞを怒らして仕舞ては私どもの商賣が出来ないのだから早く何うと加して……ねへ小夜衣さん、後生ですから貴方何とかねへ……。掌を合せて拜むばかりに爲れまして、今まで熟と考へて居りましたお小夜の小夜衣は、小ぢやお神さん。私其のお客に出るを承知さへすれば、宜いですがへ。女、宜いですがとも。ソレさへ承知なすつて下されば……。遣手も傍から、か、爾うして出てお呉なさればお茶屋さんも助かるし、旦那も好し、樓内も好し、お客の方も好し。四方八方圓く納まるのでございませうから何卒早く然うしてねへ。と言うのを聞くと。奮然と致した小夜衣。小ぢや、私、座敷へ出ませうよ！。これを六かしく申しますれば、身を殺して

仁を爲す。碎いて言へば、大勢の爲に人身供に上がる氣と云ふのでムいませう。さアめた難有い！。と樓中夜の明けた様な大悦び。めでたいく」と一同勇んで、再び盃を改めて真にめでたくお開きになりましたが。扱て仙太郎でムります。段々と小夜衣が話を聞き、又た其の様子を見ますると實に感心な孝女にして且つ美人、又た可哀想とも言ひ様のない不仕合な身の上と申すのであります。それは無論に色も戀も無い杯とは申しませぬが、もとく哀憐の心の深い仙太郎でありますから、ひどく其の孝行と不仕合といふ處に感動して、仙「あ、何うにかして、あ、云ふ哀れな孝女といふを救つて遣りたいな。」と、後朝の別れと云ふから、駕に乗られて大門を出て、神田三河町の伊勢屋の店に戻つて来る迄も、否やそつと臥床に入つて、明日の養父の叱言を心配する中も、朝飯を人並に列んで食ふ中も、帳場に坐つて算盤を取て居る中も、斷ず其事許りを考へて居ります。此が若い中には一遍は有る事だと云てありますが、其の「有る事」が實に危険い「有る事」で。馬嶺は此を昔の疱瘡と癩疹と合せて、一生の中の「三つの大難」。「下手を狼狽へると、命取りの大厄」と申したうムります。若旦那、一寸と、あの昨日市谷の田町から來ました下質の品について少しは相談したい事がムいます。一寸と奥藏へ……。と申しますのは一番番頭の久八。仙「あ、然うかへ。」と仙

太郎は帳場を立つて奥蔵の其の二階といふへ上ると。跡から参つた久八、鐵網の引戸をガラ／＼ビシヤリ！内から鍵を掛けて仕舞つて、其の二階へ附て上つて。久八若旦那。まア其處へお座んなさい。仙太郎も「扱は昨夜の事」と思つたから、仙久八や、勘辨してお呉れ。ツイ昨日、あの誓願寺の葬式の崩れから……。」久八吉原でせう。屹と又たあの越中屋や鹿島屋が鼻棒でんで……。」私も後であの葬禮に出して上げたは、あゝ悪い事……とは思つたけれど、もう爲方が無し。果して貴方は帰らなさらす。旦那は何うした／＼と貸金でも促るやうに私を責になる。久八、昨夜はマンヂリとも爲ないで漸々貴方が曉方帰宅になつたのを見て、とろ／＼と爲ましたせ。」と恨みを述べます。其眼を見ると、成る程眠ないのでムリませう、南風を吃つた鱈目刺のやうに赤く、潤んで居る。

第三十七席

仙「そして父様は今朝何う爲すつたへ。」久八旦那は今云ひます通り昨夜ツからの大怒りで兎にも角にも此の不始末を貴君の生家へ断るとして、先刻出て在らしつて……。」仙太郎は驚いて慄へ出しました。仙「断るッて何う爲さるんだらう。」久八「未だ一軒の店も持てない體で

夜泊をするなして、飛でも無へ。兎に角見据が有るか無いか分ら無いから、其事を貴君の生父様へ一應断つとくと仰しやつて……。」仙「然うすると私の體は何う爲るだらう。」と仙太郎はもうおろ／＼泣いて居ります。久八「何れ何とか、其は叱言も出るでせうが、併し心配は決して深く爲さらぬが宜うムいます。何が有つても此久八が引受けて、貴君の難義に爲らないうやうには爲て上げますから……。」仙「ぢや私が此家を逐出されるやうな事なにかは？」久八「そんな事など決して久八、執方の父様にも爲せば申しません。けれども若旦那、其れは今度限りですよ。此ッ限りで貴君が謹慎になつて下されば、昨夜の事は、私、受合つて帳消しにして上げますが、今度又た夜曉に帰りになる様な事があつては、私も何とも致し様がありません。だから、其處どころは何ぞ貴君も十分に心得なすつてねへ……。」と申しました。久八の心では、一も二もなく此の若旦那、昨日の是非を後悔して、今日といふ其の唯今から料見を切替るから、何卒お前、宜しく萬事を頼むとでも仰しやるだらう。又た然う言れなくては叶らぬ理合。と存じて居りますと、實に意外だ。仙「久八や、お前にはだが實は昨夜の、あの松葉屋の小夜衣といふ女はね、感心な孝行娘で、其上に自分の身代の爲に親父は殺されて、世の中に惘然と云つても彼れ程のは無かろうと思ふ。其れは實に涙も零れ

る程のだよ。だから私は、何うもあつて云ふ善い女をあつて遣つて置く……。「打棄らかして置いたら未だ何を饒舌り出すかも分りません。肝を潰した久八は、久若旦那、何んです！ 戯談じやありません。貴君、何う云ふ氣で入ッしやる。今の身分を！」と彼も餘程腹が立つたから怒鳴り出さうとしますと。仙「それは久八、お前は未だ見無いらから。久八え？」仙「私や惚氣を云ふでも何でも無いが、あの小夜衣といふ女……。」久「貴君は何うかしてお在なさる！」仙「お前こそ何うか爲て居る。凡そ人間と生れた者で物の哀れを不知んといふ法は無い。其れを不知んのは不思議だ。憫れな者だ。お前は諸事に人情を酌分ける頼母しい男だと思つて居たが……。」と逆捻でムります。逆捻も尙だ可いのであるが夫が、戯談でも洒落でも無い。無垢の素真面目といふのだから、久八も呆れるよりも悲しくなりました。久「貴君は未だ十九、幾ら發明でも世間の事には尙だお暗いから、人の言ふ事は皆な正直とも思し召さうが、中々其様な譯のものでは無い。人を見たら泥棒、火を見たら火事とは、不好い譬であります。全く今日の實際を申したものでムります。況て手練とやら手管とやら種々の作略と欺詐を設けて客を騙らす、遊廓などの娼妓のいふ事を一々眞に信じて此方が何う溜りませう。ソレも偶にの鬱散なら又た格別だが、貴君の様に然う初手から陥り込んで、其様なのが終局に心中

などして世間の笑はれ草に爲るのでムいます。又た其の女郎が、縦し眞に可哀想な女であつたとしても、貴君には其女を助けるは役目は、ムいませぬ。貴君の今日のは役目は、は養家先たる此の伊勢屋の店を繁昌させて、養實兩家の父ご様に安堵を爲せ申す、其れが肝腎の事務でムりませう。其の大切な體を、其な詰らぬ遊女風情に埒くちも無く爲て仕舞うと遊ばすのは、眞正に貴君こそ情けない料見にお爲りなされたもの！」と忠義の久八、染みくくの涙を流して異見をしましたので、仙太郎も、言はれて見ると、成る程其れも當然の道理である。併し如何な書物を讀んでも、自分の體を無い物にして人を助けるを、善い事として譽めてある。あの小夜衣を救うのは、確かに其の善事であると己は思ふが。……と仙太郎未だ不服ではありませんが、據ろなく其場は久八の異見に就いて、此から吉原の土地へは足を入れまい。小夜衣の事は再び思うまい！」との誓言を立てます時。かの土藏の網戸に案内があつて、小僧の聲で、小「番頭さん。若旦那も出てお出なさいッて。大旦那と皆川町の旦那が奥座敷に待てお在です。」

第三十八席

仙太郎が養父伊勢屋五兵衛と、其の實父の甲州屋吉兵衛の兩人が揃つて、奥の座敷で待ち構へて居る所へ、おづ／＼出て参つたは仙太郎。地獄の牛頭馬頭といふ鬼の前へ亡者の引出された様な物でいます。仙へえは父様、何れ用で……。斯ういふ時の實父の役も苦しいもので、實を申すと、何も此れが夜泊日泊、家を外に暴れ行くといふでも無し。今年十九の仙太郎、出入の者に昇がれて、昨夜初めてお神輿を吉原へ向けたと云ふので、ソレも夜明前には歸つて来て居る。今朝も大勢と一緒に飯を食ふ。本来ならば然うガミ／＼殿しく騒ぎ立てないでも好い。一寸と目を瞑つて置けば済む事なのを。と實父吉兵衛の方は可成り洒落た人間でありますから、然うは大層にも思つて居ませんが、養父の五兵衛と來たら、例の「乞食」なのだから溜らない。昨夜仙太郎の家を明けたのを。屋尻切に土藏の腰巻でも明られたかの様にも騒いで、今も怒り返つて物も申しません。斯う遣れて見ると吉兵衛も、五兵衛の前への義理があるから、據るなく手厳しい義をも言ひ出さねばならぬ様な譯にもなる。此邊は五兵衛たる人の胸の捌きが餘程六かしい所でもいませう。吉、コレ仙太郎、貴様昨夜は何處へ行た！」仙誠、心得違を致しまして申し譯がふいません。勘辨を願ひます。吉、勘辨は出來ん。先刻からも五兵衛殿から段々の掛合があつて、あゝ云ふ者を何うして寄越され

たと言れば時には、其方の生の父たる吉兵衛、何とも回答が出來なかつた。依て今日此の席から其方を連れ歸つて、仕置の爲め、手狹へ入れる。然様心得居れ！」驚いた譯のもの「手狹へ入れる」とは今で申すと密室監禁だ。一晚貸座敷へ泊つたと申して、密室監禁をされて溜るものではないませんが、吉兵衛も五兵衛への意地だから恚う云ふ家いのを言ひ出した。すると五兵衛は澄ました者で、五成る程手狹も宜うござせう。今の仙太郎が體は大事なもの。恚ういふ悪い病に罹つたら早く療治をな。ソレには吉兵衛さん、貴方の傍で然うして下されば根抵げ癒る。手狹が宜うござせう。仙「お父様、手狹と仰しやつたつて。手狹は牢屋でせう。私は未だ牢屋へ入れられる程の悪いことは致しません。牢屋は泥坊の入る所です。私は未だ人様の物に、塵葉一つでも手を附けたことはいません。仙太郎も最う一生懸命。其んな目に遇せられては堪らぬから、力限りに言譯を致さうと爲ますると、頭も割れる許りに五兵衛に怒鳴り附られた。五「盗兒でねへなんて！手前の昨夜使つた金銀は誰が金銀だ！皆な此の父の乃爺が物だぞ。親の金銀を無暗に使用で、ソレで人様の物に塵葉一本手を附けねへか。殺潰しめ！」吉「さア五兵衛さん。殺潰しは可いが。泥坊に落すのは些と酷いね。私の手狹と云ひますのも、今彼も云ふ心得違の遊蕩をしたのを其を懲しめの爲といふ。謂は親の

慈悲の折檻で、父の金銀を無断に使つた、ソレが盗賊の罪に當るから。其れで牢屋へ入れるといふ。ソんな私の家を傳馬町にする様な意味では無いのです。然う云ふ解らねへ事を仰しやッちやア當方でも……。」と、吉兵衛も忌々しいが込上げて来て居るからつい破裂し掛けると、五、何が解らねへ！」と、實に餘ッ程解らねへ因坊老夫。忽ち吉兵衛に喰て掛りさうに致しますから、差控へて居つた久八「まあ、飛だ事を爲さいます。皆川町様(吉兵衛)の仰しやる事は皆な道理で、失禮ながら旦那様の口が些と過ぎたのでムいます。併し此れも皆な若旦那を懲しめになる。詰りは行末善れと思し召すからの義で、此心の慈悲愛は憚りながら久八能く存じて居りますので。就ては何うか斯う遊ばして下さいませ。今若旦那を皆川町様へ上げになつては、其處に如何にも角が立ちまして面白くムいません。又た此の矢先、此宅に置き申すのも如何でムいます。で此れは私へ預け下さいませませいか。然すれば手前、太切に預り申し上げて、好く意見と申すをも致して、好い頭に店へさし上げます。そして病氣ゆえ手前方へ出養生に爲つたと申せば、其處に石も節も附きません。此れは如何でムいませう。吉む成る程此は妙案だ。然うなると事がうやなやで宜い。五兵衛さん貴方もそれには同意を願ひたい。其處で五兵衛も溢々ながら承知を致す。各人の

仙太郎は此際異議をいふべき権利が無いから、此で其場から久八に引取られて、彼が家の鎌倉河岸の宅に参ります。此宅には婆アが一人、久八は隔晩ぐらゐに店に泊つたり、此宅に寝たり致します。此れ下仙太郎も無事に三月と辛抱すれば又以前の伊勢屋の若旦那。めでたく市が榮えるのでありますが、因果は仙太郎の胸に断えずある女が小夜衣で、其の小夜衣の伯父が長庵、随つて其の長庵の悪黨が、入の癖、仙太郎に近づくと申す段取から、此に一つの大騒動が出来る。其れは追々に申上げると致します。

第三十九席

此折り長庵と三次の兩人は、お梅を連れて江戸に着いたのでムります。お梅は何しろ江戸に参れば直ぐ姉のお小夜に逢はれる事と考へて居る。梅、伯父さん、明日は姉様に逢はれるのだねへ。」長、然うだ、逢はして遣る。梅、屹とかへ。」長、お前が逢ひたく無へと云つても伯父さんが是非逢せ無くちや承知しねへから、安心して居な。梅、然うかへ。嬉しいねへ。子供は罪の無いものでムります。で其の着いた翌日、長庵は、梅の手を引、其頃の東海道土産には極り物のやうな箱根の湯本細工か何かを些ばかり持まして新吉原、江戸町二丁目の

松葉屋方の臺所口から、長へ、免下せへやし、長庵でムいます。「折ふし主人半左衛門は今朝飯を仕舞つて、此から昨夜の玉調へに掛らうと致した所、牛、お、長庵さんが、お久し振だまアお上んなせへ。コレ火と煮花を上げろよ。」長、誠に不沙汰致しやしたが、此方様いづも、繁昌でね、いや結構で。これはお出花、恐入りやす。コレ梅、お前も戴きな。此處が姉様のお世話になつてるお家だよ、見ろ！此の巨大な家、あのお薬罐の光つて、ること……。」牛「は、あ、其子はおの小夜の妹かね。此ごろ國へ行かしたと聞たツけが……。」長へえ、妹の奴がちと不快で、一寸と立歸りの積りで參つた處が、又た飛だ取込みが出来やしてな、漸やく昨日……。」牛「おう然うかへ。其れは嘘ぞお勞れだらう。」長「これはお珍らしくもねへ箱根細工で……。」と彼の手土産を出す所へ、女房も出て參る。女「こりやア長庵さん、お廢なさりやア宜にねへ。」と云ひながらお梅を見て居ます。色は黒いが磨けば善くなるう。目鼻立は姉にそっくり、殊に此兒は大柄の方に見えるから、仕立てたら確に仲の町張になれる代物。五十兩には蹈るが、年が少せへから三十五兩に切り出して、四十兩の手打かな。杯と先方から相談の無い中に女房はもう腹勘定を爲て居ります。長……時はまだ染みく、禮も申しやせんが、小夜が色々……無事で居りやすか？」女「ぶら／＼しては居ますがね、其れ

でも何うやら……。」長「其りやア難有へ。此の小せへのがカラもう姉に逢ひてへ／＼ツて無暗に強求るので、面倒とは存じて居りやすが、一遍何うかねえ。」女「え、もう其りやア……。」と亭主の面を見ますと、牛「かやに案内を。熟く然う云ふが好い。」と半左衛門も申します。一體吉原では、其の昔しは、女郎の所へ其の宿元から面會に參るを嫌がつたもの。此れは女郎の身についた金をせびり取る。其の爲に本人は自暴を起す。自爲よろしからの客の執持をする。随つて駈落の手傳を致す。など、云ふ種々の悪事が附纏ひますから、樓主の方でも大抵な用向は、遣手に聞かして取次がせたもの。併し此の松葉屋では、ソレは餘りに無慈悲だと云ふので、面會に來た者には大抵逢せませす。殊に長庵とは先づ惡意といふ方の交。惡黨ではあるが、彼の禮金の五兩も一文も取らぬ氣前もあるのだから、大丈夫だらう。と此で遣手のかやに言ひ附て小夜衣の部屋へ案内させますと、喜んだはお梅でムります。梅、姉様の居る所は、何處の？何處の？」と一々尋ねて路々の部屋を覗いて行きましたが、か、此處だよ。」とおかやが障子を明て呉れるのを待兼ねて、お梅は、梅、姉さん！と云ひながら奥の間へバタ／＼と入つて。其處の床の上に寝て居る小夜衣の顔を見るなり、物も言はずに抱き着いて泣出した。小夜衣も驚いた。誰かと見ると、抱き附たのは妹。其後ろに起て居るのは伯父

の長庵でムります。小「伯父様！梅さんか！」と姉も妹を抱締めてわつと泣く。如何にも此れは泣きませう。姉は妹を見て先づ胸に堰上げて参るのは、父親重兵衛の殺されたのと、其身の淺猿しい有様に爲つて居る其の悲哀のござりませう。又た妹のは懐かしい姉に久々で逢つた嬉しいのと、死んだ母親を思ひ出しての其の涙。長「まア好い、泣くならゆつくり泣くも好いが、小夜、今おかやさんに一寸と聞いたが、此間は味な狂言を書いたさうだの。感心だ。今ツから然う機轉や意氣地があつたら、もう二三年すると立派な二人禿の太夫になれらア。確りやれ！」此れは先夜の仙太郎に出た時の、小夜が意氣張を申したので、成る程此の娼賣の上から見たらば、面白い氣性とも伊達な俠な、好い氣前とも譽められるか知れませぬけれど、婦女としては有られも無い始末ので、未だ此の泥水には眞正に染み込めない、九分まで素人の娘で居まするお小夜の小夜衣は、其れを聞くと思はず顔を眞紅にした。遣手は傍から、か「いへ伯父さん、眞正に巧い仕打でねへ。お前さんの姪ご丈けのお技倆は確りありますよ。何うして隅にや置れませんか。だから内證でも直ぐ部屋持さ。姉女郎なごア要らねへツてね。お見なせへ、那處に飾つてあるあの煙草入は、其のお客の好男が、今度来るまで己と思つて預つといひ呉れツてね、置いて行かしたのだと言ひますわ。感心さ。そして其の

お客ツたら又た、無類飛切さ。ほんとに此のお妓ツたら運の好い。詰り孝行の報ひなんだね！長庵は急に耳を引立てた、長「ふう!?」

第四十席

おかやは、小猫に鼠でも捕した程の自慢でござります。か「何しろお前、先方は神田の三河町で、土藏が四十八戸前、いろは藏てへを持ってなされる兩替屋の伊勢五さんとかの若旦那の仙さんてへのだわね。素敵なもんだ。」長庵は鼻の穴を大きくして「はア！」と口を明きました。長「叔母さん、本統のか？え。眞正に言て呉れ。眞正の伊勢五の若大将か？」か「私だつても其の人別まで突留めて云ふちや無へがね。此連衆でもお茶屋でも皆んな爾う云ふさ。ねえ魁妓……。小夜衣は何とも言はず、未だ眞紅に俯向いて居ります。長「うむまア其の置つた煙草入といふを見せねへ。」と長庵、棚から取り卸しに掛ります。小「アレ伯父さん、其物は私の大事な物ですよ。」長「へ、此方もお目出度く来て居やがらア。案じるな毀しやア爲ねへ。」と捻くつて見て、長筒は象牙、袋は縫取、珠も可成りだ。むう小判十枚にや踏めるお品だ。有難へ。まア大事にして置きな。」といふ處へ小夜衣の眺へた酒肴が参ります。長庵此で



呑みながら、長時に話は前後するが……。」と興津での模様おとせが發狂。其れから投身といふ其の順序で如何にも正々しく話しますると。お梅も初めて口を添て、自分の見た事。困つた事、悲しかつた事の有りの儘を語ります。お小夜は只だ夢かと許り。半年と經つか經ぬに生の父母を非業に殺す。此は又と世に有るまじき事でムりますから、夢とも幻とも我身で我身の分らなく爲つたのも無理はムいませぬ。其れに付けても逢ひたいのは仙太郎だ」と小夜は思つた。何しろ那の方は、只の一度しか目目に掛らぬ、お馴染の薄い方ではあるが、今まで見た多勢の人の中で一番親切な、頼もしい方だと思はれる。其れに絆されて、つい身上話をしたら、あの方も泣て、親を失くした可哀想な女好し。此から、俺が力に爲つて遣るから心細く思ふな。案心して居ろ。今夜は遅くて何の話も出来ないが、二三日中に來て緩く逢う。待て居るとツてあの煙草入まで下すツたが、其後音も沙汰も無し。尋常なら此な悪所へお呼び申すも悪いのだが、お母様には死なれるし、あ、誰と眞身の話をして此の先途の身の振方の相談をもして貰はうか。其に附ても逢ひたいは仙さんだ」と、袖を顔にしてほろ／＼泣いて居る。長然うよなア、泣くのも道理だ。伯父さんが金持だと直ぐ給金を償いで、お前を引取つて、立派に親の後を繼せて遣るのだがなア、此れ計りやア腕にも子にも、

力盡くにも行かねへや。……時に其の相談を、右の三川町の若旦那に掛けて見ちやア何だのう。此りやア吃と此方の話に乗つて呉れやうと思ふがなア。」と長庵は言ひますと。遣手も同じく、か「其りやア伯父さんの言ッしやる様に爲て戴きなんすが一致好い。併し其れにも、何も初手から身受けの茶受けのと面倒な相談を持掛けるにも及ば無へ。只だ時偶ねへ、逢つて話を爲て下せへと云ふだけの事で澤山だ。」と、此奴は自分の情夫にでも注文する様な事を言てます。と云ふのも内實、今小夜衣を手離すのは惜いから。長「さうよなア。まア此處當分のところは情人で遇つて、其れから半年か一年して落籍されるのか。うう、然う云ふ都合に行きや店も好し、お前も好し、伯父さんも好し、お梅も好しか。時に叔母さん、その跡釜に此の小せへのは何うだらう。お前が納得むと、内證の掛合も踏張れるのだが……。」か「そりやア、話し合次第で何うでもだがね……。」長「ちや、頼んだせ。」か「引受けても悪か無へがね……。」其の相談には徹頭徹尾、姉が不賛成だと云ふ風で、小「不可ませんよ伯父さん、一軒の家から然う幾人此んな商賣を爲せるんです。私やアお父様のお金に困ると云ふで爲つたんだが、梅ちやんには何が然う云ふ入用が有んです？お女郎に爲るのは私那不承知で。」此で長庵、言へば言ふ筋もあるのだが、肝腎の姉の機嫌を損じては三河町の方の狂言といふのが書

ませぬから、長「ホイ、此は免なさい。ちや先づ其方を見合せとして。ねへ小夜、一寸と一筆書きなさい。伯父さんが状使へといふ役をして遣る。天下の名醫の長庵老が魁妓の飛脚屋になつて遣るのも姪のお前が可哀いからだよ。さア一筆……ようー」か「眞正に然う爲なんしよ。店屋の餅も強ひねば食へねへだ。先方でも來さしつたくても、機かけが無くちや出られねへ。一筆書きなんし。」逢ひたいはうすく、成るなら此方からも飛んでも行きたいやうな小夜衣。仙さんの身の上に善くない事とは知りながら、戀に暗んで、とうく一筆書きなした。

第四十一席

此話は轉つて、伊勢屋の番頭久八に預けられましたる仙太郎の身上に復ります。地體仙太郎は此の久八とは大の仲好。又た仲好にもなる譯で。久八、年は若い、萬事に綿密で、人と附合うに影日向といふが有りませぬ。正直で、實直で。心からの主思ひ！誠に申し分のない白鼠の伊勢屋が店の大黒柱と申すのでありますから、此の家の養子で、果には其の店の主人となるべき仙太郎には實に大切な人、番頭大明神でござります。だから久八の云ふ事には

仙太郎今迄背いた事はない。名こそは主従だが、其實は兄の様に崇めて居ります。斯う出られると久八も亦た彌々仙太郎を愛しく思つて、眞身の弟……其れは、有る様な話をば親父から聞いては居りますが、赤坊の時に別れた限りで、今は活てるか死でるか分りませんが、尙し活て居るならば、此んなにも思ふものか知らん、と云ふ様に可愛いものにして、總てのことに心附けます。然う云ふ仙太郎でありますから、今度の事杯は久八、一生懸命だ。朝に晩に身持の事に注意致して、久早く親旦那の機嫌を直して、三河町の宅に入つて下さら無くては不可ませんよ。」と始終申します。仙太郎も勿論其氣。それは小夜衣も可愛い可愛いで、愛いで、根が馬鹿で無い人間でありますから女は女、自分自分とちやんと戀と務の仕舞所を胸に分けまして、決して混多の、久八が異見の前へ惚氣を持出す様な不體裁はもう致しません。久八も「先づ今の様子では、今月の末か、來月の初めあたりには目出度く歸宅が叶うやうに爲るだらう。然うしたら早く嫁ごを一人見附けて、其うちお孫の一人でも出来れば、ナニあの殿しい大旦那だつても、餉棒の一本位は、身錢を切て買て遣はされる様にならうから……。」と、其様事を樂しみながら、久ちや若旦那、私は店に參つて參じます。此一人でお淋しからうが、今が肝腎な所ですから成る丈け戶外へも……。」と

先づは監視の執行だ。目の悪い留守居の婆アに諸事を言ひ附けて久八、鎌倉河岸の宅を出てまゐると。奥では帳面の店卸しが始まります。此れは久八が思ひ附で、謹慎中の退屈凌ぎに五年以來の帳面の整理を仙太郎に托したので。仙「え、三匁五分六厘と錢二百五十文、棧留綿拾一枚と男物小倉帯一本、次が金一分二朱と錢三百七十二文、石綿縮緬女小袖一枚。うん彼衣か、一兩二分に見越屋の買つたあの紫の染のだな。一分三朱が一兩二分とは篋棒に利益やがった。何うしても久八は耳ツちい。え、次が三分三朱と錢……。」婆「若旦那、村井と仰しやるお醫者様が……。」仙「……百廿四文……。」婆「もしお醫者様が……。」仙「醫者なにか此方ぢや無へよ。」婆「でも若旦那の仙太郎様へと仰しやつて……。」仙「俺が名を言つたつても醫者しや此方には記憶無しのだ。門違へだらう。」婆「ぢや何う致します！」仙「何うするつて、斷つて歸す許りさ。此方にや病人はムりませんで……。」心得て出て行つた婆ア、頓て又入つて參つて、婆「あの若旦那……。」仙「五月蠅なア勘定が出来やアしねへ。何だ？何う爲たんだ！」婆「病人じやムいませんあの松浦佐夜姫ですつて……。」仙「ナニ佐夜姫だ？佐夜姫は何だ、石になつた女だらう。石屋と醫者と間違へてるのか。」といふ中に其胸に、佐夜といふ字に風と思ひ當つたのでムいませぬ。仙「おや、小夜と佐夜。ソレに松浦に松葉屋か。此奴、

小夜からの使では無いか知らん？」と仙太郎、胸がドキリとした。仙「おい婆やア、待ちな。と背後から呼かけて、仙何しろ折角見へなすつた。只だお歸し申すも失禮だから、お目に掛りませう。此方へ。と申して吳んな。狭い家でムいますから、奥の話は皆な外へ好く聞えませう。耳を濟して居つた長庵は、ア其れでも謎が分つたな。とうとうと仰しやるかな。いや然う無くちや叶るまいが、此れだと脈は先づ十分だわへ。」と内所で鼻笑で居ります。かの婆アが出て参つて、此で長庵、奥へと通される。通つた座敷は六疊の落掛け附で前に一坪ほどの此の邊にしては大きな庭のある、小じんまりと致した住居。火鉢が出る、煙草盆が出る、茶が出る、菓子が出ます。と其次に出て来たのが當人の仙太郎。成る程昔の小本の口繪にでもありさうな、温乎と致した色男風の若旦那。此節は儉約のお言で絹帛の衣服が嚴しいから、紅入り唐棧の小荒い縞の、品の極好いのを着て居ります。長「え、これは初めまして。私は麴町平川町に居ります町醫師、村井長庵と申す不調寶者。と申した計りではは解りにも爲りますまいが、實は……。」と蟻の耳語といふ様な低小い聲で、急に膝を突き付けて、長「此文を姪から……。」と忙がはしく懐中から取出しましたのが、彼の小夜衣の文！

第四十二席

仙太郎は、其の上書を見ますと「小夜衣」としてある戀しい小夜衣からの文でございます。可哀想に表向きは眞面目な面をして帳面などを捻くつては居ますが、腕の中では何うかして最う一度逢ひたいで、がつくして居る仙太郎、飢たる犬が牛肉の片、官僚黨が用政黨の相談を持ち掛られたと同じ様に、前後の勘辨も最う無茶苦茶で飛び附いた。上封じを破く手も遅しと中を讀み下して見ます。其れは今年十六の田舎娘が魁妓になつた許りの小夜衣の事でございます。謂ゆる未だ里馴れぬ雛鷺のさゝ鳴と申すので、巧みな嘲りも殺し文句もございませぬが、其の無邪氣な、駈引のない、有りの儘を並べたところに、實に無量の、謂うに言へない可愛さといふが含まれてあります。見て仕舞ても見飽きないから、仙太郎は又た初めから見返しました。見返して了つても未だ何だか讀殘しがある様な氣がして溜らぬから、もう一遍「ひひらかせもゆめんどろとは存じ上げ候へども、あまりくさいしさの餘り一筆しめしり」から引くり返さうとします。長「若旦那、返詞は……。」此で初めて傍に人の居たかに氣の附いた様な仙太郎、ホッと溜息を致して、仙「長庵さん、此

の文の中にも委しく書て有りますが、貴方は小夜の伯父さんですってねへ。で小夜は今何うして居ますので……。もう此の若旦那有頂天ので、今讀んだ其の文の文句も熟く分らない、奇い逆上せ方。べたな。と見ましたから、長庵故と哀れッばい鼻聲で、長「お文にも書いていませうが、若旦那、そりや真正に可哀想ので。貴郎に目懸つた其れ以來、若旦那を々々ツて、三度の飯も戴かねへで、只もう逢てへ〜ツて、泣て、どツと伏つてね……。私も外ならねへ一人の姪の事ですから、助けてへ。こんな病氣で死らせたは無んですけれど、お医者さんでも草津の湯でもと云ふ戀の病だ。着婆扁鵲と云はれてる私の匙先でも此りやア仕方がねへ。内證でも心配しまして、何うか是非、一人を助けると思召して、若旦那に最一度入來を願へてへだが。樓から使を上げるのも失禮だし、これは伯父様、お前が出て、好く理を話してねへ。と言われましたで、へえ。實は今日出ました様な譯なんぞ……。と例の辯口で饒舌り立てます。如何にも誠しやか。それは長庵の口先では。此の仙太郎位のを誑騙るのは朝茶の子。茶釜から龍が天上したと云つても何うにか角うにか追附かせう。況て此は對手に十分記憶のある事を言うのでムいいますから、その先方の腹に入り易いこと、上戸に灘の一本素を吞ませるやうなものでムいいます。仙太郎は聞いてる中にもうすッ

かり酔はされて仕舞て、仙「あ、真正に私も然うだと悪い事を爲ましたねへ。其様な譯なら彼んな約束を爲なければ宜ツたツけが……。今更ら後悔と云ふ溜息の顔。長「へえ何んな約束を爲すツて下すツて？」仙「私も彼女の一生を見棄てまい、彼女も一生私に身を委せやうといふ様なねへ、ツイ約束を……。長「へえ。こりやアおい大將。一升や二升じや聞ねへせー」と長庵、言ひ掛けさうに爲ましたが、對手の若旦那が無地、眞面目なのに、場合は肝腎の愁歎場だ。噴出すほどに可笑いのを耐へて、長「でも好く爾う力を附けて下さいました。あ、難有い。此れも全く孝行の報ひ。……もしお聞き下さいまし、彼女は飛だ親孝行女でした……。仙「私も其の孝行話からつひ、一生の世話へも爲やうと云ふ氣に爲りましてね。で何うかねへ貴君から。仙太郎、決して先度の約束を反古には爲んから、安心して居て呉れろツてねへ、傳言を……。長「傳言も好うござるがね。」と頭を掻いて、長「何しろ今申し上げる病氣でねへ、貴君が来て下さらねへと其の一命に障るんで。だから一人一人といふ。私も今日出ました様な譯……。仙「だかね、其の實は、私も昨今はちと其の宅の方が不首尾の……。長「へえ、不首尾ツて？」仙「養父の手前が不都合の……。長「ちや何か外にお道樂？」仙「其んな譯も無いですが……。長「無いぢアげへすめへ。」と、長庵は妙に開き直つて

長「成る程貴君ア伊勢屋の若旦那、然も役者にも無へてへ色男だ。方々から引く手数多で親ごの手前も不首尾にお爲なすつた。こりやア無理も無へ、其う兎や角申しやせんが、何故其んなら又た彼女に、其様な氣休め以上な起請誓紙とやら云ふまでして、戀に焦れて病らう迄に爲せて下すつた。其の病らうのも其方の勝手と仰しやれば其れ迄だが、責て一度のお見舞をと云へば、行れねへてへな事仰しやつて、他人に爲さる。他人に爲れたが爲に口惜がッて彼女が死ねば、貴君は敵だ。私は一人の姪の爲に貴君を敵にして狙ひます。可哀想に貴君も此覺になる通り、小夜はあんな勤めの體てへでは居りますけど、生の素人だ。素人の小夜を騙くらかして命まで奪るとア、此人體に似合ねへ貴君も無慈悲だ。……貴君、真正に、小夜を殺し了つても、惜くも何とも無へですか!」

第四十三席

仙太郎も「自分の養父に勘當を受けて、這んな所に居る詫住居をして居るのも、實は其の小夜の樓へ行つたが根本。だから今のところ又吉原へ足を踏込むのは、始終の約束を全うする上に於いて、甚だ得策でないと思ふ。……」とでも立派に遣つたら宜つたらうと思ひます。

否へ、唯今の若旦那なら屹と遣られますが、舊幕時代の町家と申したらカラ意氣地の無いもので、何事も無理由尤も。撲られでも、此手は痛みは致しませぬかと云ふ風なのが通りが好い。兎に角、金持喧嘩せずといふ教訓の下に育つた仙太郎、小夜の爲に、此んな窮命に遇う杯と云つたら、又た彼女が心配するだらう。」と随分此念の入つた取越苦勞まで致して、おどつて居るのであるから、長庵に何を言れたとて、グウの音一つ出るのは有りません。仙「何も其の、不人情だの、構ひ附ぬの。ソんな。否へ其様な伯父さん飛でも無い無慈悲だなんて……。」長「無慈悲さ! 貴君。何うせ助からねへ病人てへでも薬を與れる。其の病苦を聊かでも救つて遣りてへと云ふが私共醫者の仁術ださ。其う貴君のは、來て下されば愈る。顔さへ見せて下されば助かると云ふのに異志節を附て……。」仙「否へ其んな異志節杯と云ふンでは。……だが伯父さん、實は私も小夜には逢ひたい……。」長「ソんなら早くお逢なせへ。」仙「處ろが、困る……。」長「何が困るンで?」此で仙太郎は本音の一部を吐き出した。仙「實はねへ伯父さん、私も今申した其の、半分勘當の身の上で……。」長「其んなに實はの安賣を爲さるなくツても、誰も嘘だとは言ひやせん。實はが何うしたです。」仙「衣服がね、何うも其の、此服ではねへ……。」長「見とも無へ? うん、其も尤も。女に逢うに筈を氣にする中は

人間も頼もしい。好うござす。私が何うか為やせう。」仙「ソレにねへ。手許もちと不都合で……。」長「金も無へ？厄介ですね。併し私の手にも無へですが、高利のを承知なら算段は爲て見やせうで……。」詰り長庵が此の詫住居へ懲う尋ねて参つたのも、外に何にも其の目的が有るでは無いと云ふ。唯だ神田切つての金持といふ伊勢五の若旦那の仙太郎へ此の高利を借りさせて、跡で店へ掛つて其の證文で捲らうと云ふ許りのございます。其れで其の捲騙つた金で、前にも申した、長庵、銀行を建てるでもなし、飲食に小博奕、女郎買ぐらゐに遣ひ棄て仕舞のでいます。一向降らない。とは申す條、何しろ取られる方では悪い奴に引掛たのだ。然うは知らないから如何にも親切な好い伯父様に出遇たやうに喜んだ仙太郎「ちや伯父様、何時行けませう。」長「そりやア成る丈け早い方が好い。」仙「私も、なる丈早い方が好い。」長「今夜にも行て戴きたいが……。」仙「此方も今夜にも行きたいですが。右の衣服と金子はねへ？」長「お待ちなさいよ。」と長庵、考へたが、長好うござす、今日算段しやせう。ちや貴君の方は、何時でもですな？」仙「待て下さい。私の方にも久八といふ番頭が此家に居る。其者に見附かると出られない。」長「ちや斯うなさい。貴方お晝飯でも食つたらお湯にでも行く積りで、此家を出て、廊中のお茶屋へお出なさい。然うすれば私が此足で直ぐ駆け廻つて

遅くとも八つ頃までには金と衣服を引擔いで参ります。其處で貴君が小夜に逢つて遣はさるわッさり遊興で、七つ半頃から歸りになる。ソレ家へ歸つても未だ日がある。番頭さんの歸宅前、留守中の仕事と行くと物が綺麗事に行きますが、今日はね、然う爲ささい。」天晴れの名案だ、然うなれば毎日でも行かれるから、仙有難い、伯父さん。諸事は伯父様委せに爲ますから、何うぞ宜しく……。」長「ちや其の手筈で、其の金の證文でへが要りますから貴方の印だけは忘れずにね……。」と悠う云つて長庵、こそくと歸つて行きました。さア急に勢ひ附いたのは仙太郎「何しろ好い伯父様が出たものだ。拾ひ物を爲たやうな物。ソレに親切ッたら久八だッじも敵はない。智慧たら孔明楠だ。あの伯父様の指金に就て萬事を遣れば間違ッ子なし。あ、眞正に夢の様だ。今日彼女に逢はれるとは何だか眞正とも思はれない。伯父さんは晝飯でも食つたら出掛けろと云つたが、何うして飯なンか食て居られるか。又た食たッても喉に通るもので無い。ソレに此頭ちや不可ねへから一寸と結つて、湯にも入つて何うして……、今怡屋の笛が来たから四つだ。此から仕事をして廊中の茶屋まで行きや晝過ぎの、八つ！いやぐづぐづしちや居られねへ。早く取掛る事！」とそは、致して、仙婆や一寸と湯に行て来るからね、垢摺と糠袋を包んでね……。」臺所から出て来た婆、何を爲て居



仙太郎

第四十四席

たのか濡手を拭き、婆「おや大層おめかしですな。」仙「めかすぢや無へが、垢だらけだから……。」婆「垢だらけと云や、今の坊さんの襟垢ッたら！ 眞正に汚ねへ。それにぎよろく其邊を見ましてね。那りや何者です？」仙「ナニ彼りや錢貫への不好ねへ坊主のよ。」

仙太郎は今大汗だくくといふので新吉原仲の町、引手茶屋信濃屋の店に飛込みました。何者が来たかと驚いて飛出して見た女將「おや、若旦那でございますかへ、まアお珍らしい。さア何卒此方へ。おいりかやお二階を早く片附て、お火鉢を……。」仙「火よりも水、水を一杯。あ、苦しい！」女「まア何う遊ばしたので。コレ早くお冷水を……。」下「はい。」と持て来た水をガツ／＼と呑干して、仙「あ、漸やく息が出た。餘まり急いで来たもんだから。時に女將、此方に村井といふ彼の小夜の伯父様は来て居ないかね。」女「え、長庵さん。今し方見えまして、一寸と魁妓所へ行くとツて……。」仙「然うか。難有い。伯父様大明神！ ソレで小夜の病氣は何うのだね。」女「其事ですよ。若旦那、貴君も罪造り。魁妓のご心配たら一通りぢやムいませんの。」仙「眞正かへ？ え、女將。小夜は眞正に私の事を心配して居て呉れるのか

ね。仙太郎も今迄は年に似合ぬ發明な方でムいしましたが、右の小夜衣に逢つてから、ガラリ人間が變つて了つた。併し此れは強ち仙太郎許りではムいませぬ。堂々たる大政治家を氣取つて居る老爺さん、一國の運命を肩に擔つてゐる某處其邊のお人、其ほか世間に持離される學者とか紳士とかいふ連中のを拜見しても、小指に掛ると人間がカラ別に爲つて、乃公の名前か。文庫か鏡臺か、針箱か煙草盆か。兜もお金も何ちも入らねへ、さッさ背負てけり。持てけり。と云ふ風にお爲りになるから實に不思議で、其點に到ると利口さ加減は仙太郎よりすツと上手でムいます。何故かと申せば、仙太郎の方は、兎に角先方で眞實泣てゐて呉れるのだから、物氣でも未だ憎く無い處もありますが、一方のは、舌を出して居るのも不知ずに涎を垂して、然も威張て居るのだから、鼻持も、手も附られませぬ。其れでも女將は仙太郎に斯う吹掛けられて、大蛇の毒氣ほどに中てられた。「此れは自分一人では受け切れさうも無いから早く長庵さん、歸つて来て呉れ、ば好い。」と思つて居ますと。坊主、此奴もせくく言つて歸つて來ました。トン／＼と二階を上るなり、長や、お出でなすツたか。私の方が一足お先きでね、で今小夜が所へ行つて、喜ばして來やしたよ。」女眞正に魁妓喜ばしつたで有りませうねへ。今も其の事を話して居た所ですよ。」長、話しよりか實地だ。い

や女將、一寸と下から視箱をね。……時にもい若旦那、此に入兩ござへます。天引二割だ。些と高利へが、急仕事だから仕方がありやせん。で先方じや三判(借人に證人二人の判)と云ふんです。成る程見識すの貴君に十兩てへ大金を貸すんですから、三判といふも無理は無へ。」と小判を八枚其處に並べて、又た片脇の風呂敷を開けると、黒紋附に黒縮緬の羽織といふ其ころ流行の隆とした衣服が一襲ね、脇差までも揃へて其處にありませぬ。長、何うせ貴君の物氣には入るめへが、此も殺急なだから不祥なせへやし。まア行文も合うか着ては覽なせへ。」仙太郎は着て見ると、そツくりです。長、こりやア豪勢。着人が好いから品物迄が引立つて、素敵な大盡だ。受けやすせ。さア行きやせう。仙太郎は只もう嬉しくて氣がそはそはして、尻から馬鹿囃子でいも叩き立てられる様な工合でムいます。だから此際、金利の判のと其様穿議は爲て居られませぬ。仙ちや伯父様、證文は何うぞ宜しい様にね、此の私の判が有ります。」長、おツと確り、では總ては宜しく遣らう。……熱く其金を改めさッし。改めるも何も無い。行成り其金を、それでも頂いて、一枚を長庵に與れて、残り七枚を服紗に包んで懷中して、女將と女中に送られて、江戸町二丁目の松葉屋へ長庵と一緒に参ります。入ッしやい。店の者の挨拶を背後に聞なして二階へ上る。直に酒と爲る。男女の藝者も來る。

第四十五席

仙太郎、嫖客としての今日の資格は、かの裏とか申すのでありますが、其處は長庵、萬事心得て居りますから、彼が前には紋の附いた黒塗の膳に、銀の袴を穿いた箸が附く。すなはち當時で申す馴染といふのださうで居ります。盃一通りが済ました頃、小夜の小夜衣は、濃艶牡丹の如き盛装を致して其處へ坐ります。座敷は忽ち五光が射すばかり。我姪ながら長庵もはつと驚いたが、仙太郎に至つては唯だもう魂鎔けて、自分の軀が伊勢五の養子である事も、唯今半勘當で居る事も、實父の事も、久八の事も何も角も忘れて了つて、只だ幻夢のやうに目に見えた一時の春に酔つて居りました。

仙太郎、此日は長庵の異見に随ひまして、賁て燈火の附く頃まで遊んで行きたいは山々だつたが、其れをぐつと我慢致して、再び茶屋の信濃屋へ戻つて、以前の唐棧の衣服に着替へ、龍閑橋まで三枚羽で飛ばして、鎌倉河岸の宅へ歸つて見ますと、未だ久八は歸つて居りません。仙「べた！斯う云ふ都合に諸事行て呉れ、ば妙なのだ、併し此れも伯父様の指金のお蔭だぞ。あゝ何うしても彼の伯父様は孔明楠、いや小夜と己とが結ぶの神。此から何でも

事を爲るなら伯父様の指圖を受ける事だ。」と仙太郎、飛だ好い指圖役を得たもので居ります。で又た例の机に掛つて算盤をバチ／＼遣て居りますと、婆アは突然其處へ出て来て、婆「貴君は何處へ入らしたの湯屋へ行て聞きやア先刻歸りに爲つたと云ひますし。髪結床でも爾う。萬一間違へでも有りやア仕ますめへかと、店へは通知せ申さうと考へてた所でしたよ。まア何處へ入らした？」仙「ナニね。髪を結つて湯へ入つたが、出て見ると天氣は好しさ。考へると今日はお母様の命日だから急にお目に掛りたくなつて、廣徳寺へ……。」婆「おや／＼然様ですか。ちやお寺詣りにでも？まア其れは好くお詣り爲すつた。お経でもお上げなすつてかへ。」仙「上げたよ。何でも色々なのが十四五人上つて来て己等を取り巻いてね。すつちやか／＼……。」婆「え？すつちやかですと？」仙「ナニ鑼を叩いたり、三味……。」ちやア無い木魚を彈いたり、飛だ賑やかな法事で、面白かつたのだよ。」婆「へ／＼え？ソレはまア其れでも好いお寺詣を爲さいましたねへ。些たア保養にも爲りましたらう。」と老婢も變な挨拶をして引込みます。其晩久八は歸つて来る。仙太郎、もう口を拭いて、何とも其件らしい事を申しませんから、久八も心付きませんで。其の翌日と翌々日は宅に引込んで、其次の日となると、長庵から沙汰があります。無論待ち構へて居つた仙太郎、今度は久八が店

へ行く、直ぐ其跡から出掛けて、先のは晝遊びだが、今日のは朝遊びと洒落かけます。夕方歸つて来る。婆「又今日もお寺詣りで？」仙「然うだ。今日は叔父様の命日だから……。」婆「だが叔父様も好うございますかね。お寺詣りも好い加減にしてお置きなさらねへと飛たお閻魔様に叱られますよ。今が肝腎なお身上でせう。些と辛抱してへなすつてねへ。」仙「好いやな。お前は黙つて居なよ。何を聞かれても知らねへと云つてりや其れで好いのだ。ソラ知らねへ貸に此金を遣る。」と額銀と一つ煩張らせます。仙太郎も最う一步悪事の境界へ足を踏入れまして、人に口留の賄賂を使う様になつて来た。惣うなると既う墮落でムいます。墮落をした伊勢屋の養子仙太郎が身の前途は實に心配なもので。此から考へると、其最初に、悪友に引張られて、會葬の歸りに明けた晩、放火盜賊の悪事でも爲たかの如くに騒ぎ立て、勘當と迄に決心を致した養父五兵衛の乞食眼が、矢張り遠視の利たものかも知れません。其は扱置き、仙太郎も近頃は追々横道の、すう／＼しく相成て、夜も遅くまで、時としては夜が明けてから歸るやうな事もムいます。さア驚たのは久八「此りやア大變だ。一體事の起因は何う爲たのだらう」と先づ内々で宅の老婢に聞いて見ますと、何だか曖昧な口振でムいます。「此奴、可怪いな。」と見ましたから、此で久八、殿重に札間に及ぶと、老婢も遂に隠し切れ

んで、先度の「寺詣り一條」から「口留金」の事迄も白状して、遂に其の手引は存じませんが、何でも村井とか云ふお醫者の様でムいます。」と云ふ迄をも饒舌つて仕舞た。彌々事件は大事に爲りました。何しろ自分の留守を附込んで其様者に入出をさせる。其れ一條でも大家の養子には不似合な、宜しくない事だと思ふに。其れに手引を爲せて、晝遊びを爲る。其れが劫じて夜泊もと爲る。老婢に迄も口留をして悪事の味方に引入る。此れ中々大逸れた巧計であるに、第一其の揚代花代諸雜費といふが何處から出るか。此れ指向きの穿鑿物。大問題だと申すので、久八、先づ仙太郎を取てべめやうと、其の居間に參つて見ますと、すッば抜け！久「若旦那々々々。」と呼んで見ましたが、返詞もありません。老婢に聞くと、婆「今其所に居らした様ですが？」と申します。久「何うも困つた。此れちやア一應、實父の吉兵衛様にまで申話し申さねば叶るまいか。」とは思ひましたが、其れも残念。と申すのは、確に自分が改心をお爲せ申すとあれ丈け言つたのを。今更ら！といふ或る負惜みもあるに、其れには仙太郎の身上をも考へて、其晩寢床へ入りましたが、無論ま／＼りとも出来ません。すると夜明頃、二番鶏の啼止んだ時分に、表の戸をトン／＼／＼。流石に小さく叩きます。久八出掛けて、ガラリと明けて、久「若旦那ですか？」仙「あゝ久八か。面目ない。」

第四十六席

仙太郎はとう／＼久八に捉まつたのでムります。仙「久八何うぞ堪忍してお呉れ、私が全く悪かつたのだから……」久「え、悪いも好いもありません。まア此方へお入んなさい。貴君はまア一體、自分の軀を何う云ふ物に考へて在ッしやる。然して何時ぞや私に仰しやッたお辭を何ういふ物に爲やうとの料見でムいます。貴君は未だ廿歳にもお爲なさらぬ。五十六十のよもや老碌も爲さるまい。えッ若旦那！」先度、伊勢屋の奥蔵の二階で、「もう二度と吉原へ足を踏入れまい。小夜衣の事は思ふまい。」との約束をしました其誓言を楯に取つて、久八攻附けるのでムいます。凡そ世の中に何が怖いつて、正直者に向ッ腹を立たれる程怖いものはムいません。舊幕時代の櫻田、阪下の浪士も其れです。萩の暴動、熊本、神風連、島田一郎でも、來島恒喜、西野文太郎でも皆な其れです。久八も平生は正直な、親切の、主人思ひでムいますが、其の親切な主人思ひの正直者だけに、怒るとくわッとなりますから、何事を致すか知れません。仙太郎、燈火の影に其の久八の面を見ますと、涙を翻してゐる眼は血走つて、握り詰めてゐる拳はぶ／＼と震へて居る。吐く息炎の如しといふので、取て食

れさうな氣色だから、自分もわ／＼と震へ出しまして。仙「久八や、私は真正に心得違の上の又た心得違をしたのだから、お前に何んと言れても一言の返答も無いのだよ。何うぞ後生だから今日迄の所は勘辨してねへ。以來は屹度慎むから……」。怒う誤られて見ますと、其處は對手は主人でムいます。撲るも蹴るも出来ませんのに、又た幾ら怒つても恨んでも、腰籠に腕押し、一向張合も、手答もして呉れませんか、久八も飽倦て、久「お慎みなさるなら此れ迄の事は此迄とも致しませうが。矢張り吉原は松葉屋ですか。仙「あ、其の松葉屋で……」。久「ちや、小夜衣ですね。仙太郎は俯向いて黙つて居ります。久「何うも悪縁と云ふですねへ。……悪縁も仕方が無いが、お拂方は何う爲さつたのでムいます。仙太郎は彌々もぢもぢして居りましたが、仙實は借りたので……」。久「何う云ふ金をお借りに爲つたので。小遣錢も碌々與へて無い若旦那。それが魁妓買の金の出やう途は無いから、久八も大方其んな事であらうとは察して居りましたが、拵て其の借方に依つては随分跡で手の掛らぬとも限りませぬ。何しろ此れは嚴重しい印形事だから。久「え、若旦那。何う云ふ筋の金なので。……お茶屋から借たのですか。問れても返辭をしない。久「ちや、高利ですか。盲目のですか。」「盲目金といふのは、官金と云ひまして、將者が官位を取る爲に高利を取つて貸す金でムいます。

其れでも大抵「廿五一」と云つた元金廿五兩に附て金一分の利。すなはち百兩で一兩、年一割二分のものでござります。仙「盲目だか何だか知らないが、長庵と云ふ小夜の伯父様は借りて来て呉れた金なので……」。此れで久八もかの老婢から聞いた長庵なる者の身分を知りましたけれど未だ無論、其の悪黨であるか否かは存じません。久で、お利分は何んな金？「仙滅法高い。天引二割といふ、三月の縛りだよ。」久「エッ！其りや大變だ。其りやア貴方、詐偽ですせー」と目を開くしました。久「で幾許お借なすつた？」仙「十兩宛、五六度借りたらう。」久「借たらうッてー貴君、氣樂なり……で判は何う爲つてます。」久「三判ッて。借主は私で、長庵伯父様と最う一人誰か受人で……」。長庵伯父さんと云ふのを聞いて、久八は苦い面を爲しましたが、其様事より差向き心配なは右の借金でムいます。茶屋の不拂なら一番世話は無い。盲目金でも返済してさへ遣れば紛紜は無いが、其の天引の二割と云ふが既に法外なのに、證人の内、一判が誰のに爲つて居るか分らぬ杯は殊は刃呑なのでムります。何しろ此の貸借には餘程危険の性質を帯びて居る。尋常りの事では済むまいか。といふ久八、何やら氣が致して、此から其の長庵の住居を仙太郎に聞きまして、夜が明けると直ぐ、彼は麴町平川町を指して參つたのでムります。さア此が一つの大騒動の基。其お話は次席に詳細く……。

第四十七席

久八は麴町平川町の長庵が家へ尋ね當つたのでムいます。其家たるや毎度申す天神様の境内を斜向に見ました裏長屋、いや汚ないとも夥多しい。久「此免下さい。」長庵は昨夜も遅くまで宅で四五人を集めて手慰みを致して居つたので、夜が明けて、先刻豆腐屋も煮豆屋も通つたが未だ起きません。其様事とは存じませぬから、久「ハイ免なさい。此方は村井長庵さんで……」。漸やく二階で目を醒ました一人、甲「おうい、誰だい。籠棒に戸を叩くじや無へか。世間は晝でも此方は夜半だい。」乙「そんな事を言つたッても不可ねへや。昨夜の蕎麥屋が荷を取りに来たんだらう。」丙「其ンなら早く出で遣れよ。先方も商賣だ。」甲「出ろつたッても誰も出られめへ。皆な裸だから……」。丙「違へねへ。ソンなら三次出ろ。お前は着物がある……」。此で三次は餘儀なく起きまして、入口の戸をギチガタ明けて、三「おい、誰だ。」久八は驚きました。醫者と云つても、自分の姪を女郎にして居る、其客の所へ誘引に来る、何うせ碌な醫者ではあるまい、按摩兼帯、悪い手筋の貸金の才鳥でも致して居る者か。とも存じて來たのでムいます。此體を見ると肝を潰した。謂ゆるグレ宿といふ無頼漢の集會所の

やうにも見られます。此りやア大變な奴に引掛つたものだと思つたが、今更ら何とも致し方はムりません。然ういふ奴なら猶早く談判の方をつけて跡々の腐れ込みを妨がなくては叶はぬと存じたから、久「此方はあの長庵さんで？」三「然うよ。貴様が長庵々々ツて叩くから起て来たのだ。其の長庵に何の用だ。」三「次、眠いのを起されたから、ぶん／＼怒つて居ります。久「私は鎌倉河岸の仙太郎が手代、久八と申すのでムいしますが、長庵さん宅ですなら一寸と此目に掛りたる存じます。三「待ちなせへ。」三「次は此方へ来て、三「おい和尚、鎌倉河岸の仙太郎が手代の久八だとよ。例のだらう何うするね？」先刻から目を醒して聞いて居た長庵坊主「うん、來たら逢うべい。併し貴様達能く心得て己が駈引に目を配るのだぞ。此方に強みは十分あるからぐ／＼云や撰つても構はねへのだ。ソレと云つたら出るのだぞ。」大變な手配りでムいます。慙ういふ火の坑の中へ入る様な久八は、幾らか用心も爲ては居りましたが、斯迄の義とは存じません。「此方へ上れ」と申しますか、其重うこぼし、能く候といふ奴が二つほどあつて、炭團の破片が灰の中から赤い面を言ひ語たけ止して居ります。一方を見ると、それでも百味筆筒に破る机。麴硯の脇には頭の無い筆と、緑青だらけの眞鍮の匙が、箱根細工の筆立の中に邪見に突立てられて居るのでムいます。其の此方に座つ

たるが長庵「あ、此はお出でなさい。お前さんが彼の仙太郎どの、手代で。いや好い所へ見えられた。實は今日明日にも宅へ出て仙どのにも談判申さねば相成らず、又た其の挨拶の次第に依ては貴公にも此目に掛らねば叶るまいと存じた所だが、あ、好う出下すつた。」と煙管をはたいて、長「コレ茶を上げろよ。いや此覽の通り宅は手狭だが、病人は始終詰めて居て二階はピツシリといふ次第でな。否へ何方にも不沙汰ばかり……。」何だか自分の言ひたい事のみを言つて居ります。久「實は今日出ましたのは、若主人の仙太郎が借用金の義に附きまして。」「といふ口を抑へて、長「あ、然様でムつたかい。私方から出様と存じたのも同じく其義でな……。」久「へ、え、如何様の義で？」と久八は覺えず膝を進めます。長「さればさ。恥を申さぬと理が聞えぬが、實は私の姪と云ふのが新吉原江戸町二丁目の松葉屋と申す娼家へ、小夜衣と申して勤めの奉公を致して居る……。」久「へえ。」長「其女へ仙太郎どの馴染れたちな。で小夜との間に何か深い約束も爲されたと見えて、姪が我等へ手を合して文を届けて呉れと申す。私も好う無い義とは存じたが姪の頼みの餘義なさで、ツイお宅へ出て、此目に掛つた。仙太郎どのとは實は其れ以來の出入魂でな……。」久「へえ、成程……。」長「所ろが、困つた事は、其後仙太郎どの宅へ出で、ちと手許が不都合だからと、融通の義

を申される。……俗に申す廓の金には塞るが習ひ、其の塞るのを無理算段して遊興れるのは善からぬ事と、此異見も申して見たが、中々聞れんない。で私も操るなく、某る地方に遊金のあるのを見込んで、ホンの一時の借用と申すので、金利はもう僅ばかり、只た印までの事といふので百兩借りて進せたが……。「久え、百兩と仰しやるのは、幾度で百兩で？」長「ソレは幾度も借りては進せたが、最初の一口が百兩さ。」久「え、え！」と久八の驚きは唯だ腰を抜かさぬ許りでムります。

第四十八席

久八は百兩と聞いて眼の色を變へました。今は中々黙つては居られませんが、久八が長庵さん、宅の若主人から聞きましたには、十兩宛五六度借用したと申して居られます……。「長庵の方でも驚いた面で、長「ナ何んだ、十兩宛だ。コレ貴公は其様な……。」とぐつと睨んで、長「仙太郎どのが確かに然う言はしつたのか！」久「其はもう確かに然様申しまして。然も其利子は天引二割、判は三判で……。」長「如何にも三判で、三月の約束だ。其の約束の三月が既に過ぎても借用本人の仙太殿から梨も石礫の挨拶も無いので、右の証人の一判を捺してゐる

私方へ、貸主からして矢の催促が来る。で私も今日明日にも其方へ參つて彌々の談判にも取り掛らうと思つて居た所。だが仙殿が、其、然ういふ言懸りを爲れ様とは實に意外だ。併し貴公、其れは聞誤りでは無いのかな。久「否へ……。」と云つたが、久八も此は迂回した事は言れない。先づ先方の陣立を熟く見てからで無くては、踏切た返答などは迎も出来ないと思つたから、久で長庵さん伺ひますが、其の今三判と仰しやつた、一判は無論に若主人の判、又た一判は貴君に迷惑を願つた証人の判で、最う一つの判は誰方の判です。」長「へ、え、お前は承知なしかへ。いや此りやア怪しいぞ！」と長庵は烟管を片手に身構をする様な體を致して、長「貴公は、伊勢屋の手代と言れたな。併し豫々聞てるところでは久八殿は伊勢五の番頭、支配人とも云はれる身分だと云ふ事だ。其の支配人の貴公が主人の判事を知らねへてへ。此りやア何か奇へ巧計の罫が有りさうだぞ。やい久八、其の今一判の請人の判てへ。お前の主人の五兵衛が印だ知らねへか！」久「ひゑッ！」と久八は唯だ魂消た切りで、二の句も返答も出は致しません。長「やい久八、不知はつくくれるなへ。未だ其外に百兩が三口、五百兩が二口、千兩が一口、今の百兩と都合せて七口の二千四百兩の貸金だぞ。汝、其うをも不知ねへと吐すのか。但し五兵衛の判が其で無へとも抜ける氣か。何うだ久八！」重ねく

と云はうか、追掛けくとも申さうか。最う何だか無茶苦茶に爲つた頭の久八は我にもあらず、久馬鹿吐くな！己が主人は神田切の金持でいろは藏の伊勢五だぞ。貴様が様なグレ醫者に……怒るかと思つたら長庵は笑ひ出しました。長はア、金は借りねへとか。うん其の口状忘れるなよ。あの判が養父の判で無へと云や、謀判だ。好し、其の謀判をして二千四百兩の大金を騙り取らうとした奴は誰奴だか。好いわ、貸主の方に入れてある証文が物を言ふから、出る所へ出て其の書附に白状さして貰はうよ。だが久八、斷つとくよ。謀判は引廻しの上、獄門だせ。承知だらうな！久うー獄門だッ？長は、獄門だ。貴様が知らねへと云や獄門だ。俺も然う聞いて黙つて居りや同罪だから直ぐ訴へる。可哀想だが人の屍なぞ拭つちや居られねへ。俺の頭の蠅を追はねへじやならねへから……と起ち掛けます。其様な事をされて何う溜りませう。有無を言はさず若旦那は召捕り。あの手弱い體でもッて聞い所へ入れられては二度と娑婆へ出られる見込は無いから。看すく此奴が姦巧は知りながら「うん」と言ねば爲りません。久八は啖ひ附ても遣りたい坊主の前へ是非なく手を突いて、血の出る様な聲をして、久一、一應、本人へ聞いて見ますので、何、何うか其れまでご勘辨……。「長うむ、ぢや今日の夕方まで訴へるだけ待て遣らう。だが久八、今言つたグレ醫者で……」

第四十九席

へは何うして呉れる？久はい。ぼろく涙を霑して居ます。長町醫者でこそあれ白素帳面の村井長庵を捉めへて、グレ醫者たア何だ。え、久八！久何うかご勘辨……。「長む、それも勘辨か、併し只ア爲らねへ。やい皆な下りて来い！」

「下りて来い。」と長庵が號令を掛けると「おふい。」と云つて二階からばら／＼と三四人の奴が下りて来ました。其奴等を見ますと、頭は半額、突込の、面と云つたら鬚ばうく。荒布のやうな布子を着てゐるのも有りますれば、丸裸に布纏一つといふもある。謂ゆる異類異形の曲者。昔、和尚、何んだ。「三次は傍からコレさ和尚なんぞと云ふぢやアねへ、先生と云ふんだ。今日は和尚が先生だ。」と目面で知らせます。せうん、先生か。先生何んだ。此れが今長庵の云つた病人といふ代物で△います。腕には俱利迦羅紋々の鬼とも取組まうといふ可恐しい患者。併し其の患者は好いが、此から自分の身を何う爲やうと云ふのだらう。兎に角此んな處に長居は無用。何を爲れても乞巧と棒打。君子は危きに近よらず。と久八「然様なら後程又た。」と早足に出やうと爲ますと。長「おい逃るなへ。未だ用がある。……あゝ病家の

衆。此の男が私を捉へてグレ醫者だと今言ひましたな。私も醫術は未熟だらうがグレ醫者杯と悪口される未だ行状も爲ませんちや。私は何う云はれても構はんが、其手で盛つた薬を服ツしやる各々方が、其のグレ醫者などと悪口されては詰り皆様のお面が立んと云ふものぢやで此れは皆様に其の始末を任せ申すから、總て然るべく……。煙草をぶかりく吹して長庵は笑つて居ります。手へえ這奴がねいや太へ畜生ですな。やい野郎！」と突如り久八が頭髻を取つて引倒した。久「此は！」と云ふ彼が横頬を、今一人がボツカリ！、久「あッ！」と押へやうと爲る拍子に、背後から腰をドンと蹴られたから、溜らす前へのめります。其處を頭髻を捉へた先の一人が、甲「遺ッ附けろ！」。此からの久八が體はもう申上る迄もムいません。又斯ういふ善人の此様奇い目に逢う事を申すのも否でムいませぬから、跡はお察しを願うとしますが。何しろ十四五分から廿分許り、蹴れる、踏れる、撲られる、捲られると云ふので、仕舞に戶外へ突き出された様子を見ますと、頭は亂髮、衣服は破られて、半分解かつた帯の間から寸断々々にされた胴着と褌袴が出て居ます。無論足袋蹴の、顔や手足からは諸所に鮮血も浸んで居る。路次の溝板へ久八、暫くは倒れて居ましたのを、其れでも世間に鬼計りは無い。近所の情けある人々が寄て多集て、何處やらからか駕屋を呼で来て、

其れに乗せて鎌倉河岸の家に送らせましたが、此體を見ると驚いて泣出したのは仙太郎、久八、お前何う爲たのだ。死でお呉れでない。後生だからお前、死んでは否だ！。死ぬかと思つたのも無理はムいませぬ。久八は其の疵だらけの軀を横に爲たなり、物も言はれず、唸つて居ります。此れも申すと天の配劑、斯ふ言う事を致した爲に悪人の滅びる端緒が自然と開けて参ります。不思議と云へば不思議な様だが、扱て長庵も悪黨に似合す餘り目先の利かぬ、詰らぬ亂暴をしたものでムいます。彼の目的は畢竟が其金を奪るにある。其ンなら何も撲つても殴るも要ぬ譯のでありませうのに、飽まで敵手を見くびつた長庵、斯う強面を見せ附けて置いたら、其の二千四百兩といふ大金も出すであらう。左無くては先方も容易に談判に應じて呉れまいから、此は何でも最初に毒氣を抜くに限る。示威運動が必要である。と云ふので可哀や久八にのツけに目録を食せたのでありますが、餘り吃せ方が激しかつたので、其の當人打倒れて、此方の考へた本店、すなはち三河町三丁目の伊勢五の店の方には未だ通じません。忽の跡から附て参つた子分の一人が此の様子を見て歸つて来て、手和尚、あの久八の番頭め、鎌倉河岸へ送られたなり喰り込んで、今醫者が来て手當中だよ。此じやア親父の五兵衛が耳へは急にやア入るめへ。長む、然うか好し入つても入らなくつて構はねへ。其な

ら其で又た趣向がある。三次、貴様はあの黒羽織を引張つて貸主になれ。甲七、手前は供に爲るんだ。そして五兵衛へ直談判と出掛るだ。彼等は五兵衛が店へ進撃しやうと云ふのでムります。

第五十席

長「ちと免下さいまし。手代へえ入ッしやいまし。さア此方へお上りを。……子供や茶を……。手代は長庵に三次を上へ上げて、茶煙草盆を出しました。長庵は伊勢五の店へ参つたのでござります。手え、何か用様で……。長左様。些と折入つた内事の義で主人に面談を願ひに出ました。私は麴町平川町の町醫師村井長庵、同道を申しましたは某宮家の邸家來で岩春三次郎殿、何うか取次を願ひたい。手代には何だか分りませぬが、辭附も至極懇懇で、長庵も可成りな町醫師といふ様子にも見えましたが、手暫らくお待ちを……。と奥へ引込んで、今土藏の腰巻の塗替で、汗水くになつて左官に指圖をして居りする五兵衛が傍へ来て、手え、旦那……。五「おい、く、其んな所へ來ちやア不可ねへソレ今其處を塗つた計りだ。え、氣の利かねへ足元に手桶があらア。其水をぶ、く、返され

でも爲て見るよ、此方の漆灰が滅茶々だ。ちよッ氣の利かねへ。手え、ですがね旦那、今宮様師見たやうな岩春てへ人と、町醫師の村井と云ひますのが……。五「ナニ宮様師に町醫師だ。何うせ碌な話じや有るめへ、斷つて……。手併しね旦那、見體は可成りなんですね。中間を一人連れまして、折入つた内談だと云ひまして……。五「金談か？ 手「だらうと思ひます、格高な融通か何かでせう。五「ン、然うかな。此の時分で宮様師と云へば、金貸。其の金貸が又た金貸の家へ融通を頼みに來るのは、割の好い貸口などが有りまして、一寸手元か出拂つて居る杯といふ時に好く有る事、然う云ふ時には謂ゆる格高な金利を拂ひますから、頼まれた金貸の方では大分好い汁が吸はれます。五「然うだなア。ちや逢て見やうか。金と聞いては鐵久でも釘の折でも見通シッこの無い五兵衛でありますから、此で兩人を奥の間へ通して、自分も出掛けて、初對面の口證に及んで、其れから兩人が來意を聞きますと、岩春三次郎と名告る人形三次、外の義でもムらんがな、子息仙太郎どのへ用立金の義に付いて罷り出ました。拙者方から融通申した七口めて二千四百兩と申す金子のことは貴方も定めて承知のものでムらうな。と云はれたが、此れは五兵衛の耳には眞正の藪から棒でムります。何んのことだか一向理が解らぬから。五「何んと仰しやるので。……私には

其の物語の趣意が分り兼ねますから、最そつとお委細う……。「長いや私も然様な譯だらうと存じて、實は出ましたので……」親父、實は斯うなので。手前の姪が仔細あつて、新吉原江戸町二丁目松葉屋方へ小夜衣と申して、遊女奉公を致して居る。其れへ仙太郎のお通ひになつて、彼女が座敷で思老も兩三度目目に懸つた。致すと其後、仙太郎殿、拙宅へ見えられてな。我等親父五兵衛事、昨今一寸と手支へて、店へも話されぬ金子五百兩だけに當惑いたされる。何うあらう。百日程の融通で内分で借用の口は有るまいか。實は我等は養子の身養父の手元必迫を見て居るのも心苦しいからとの、それはく涙を流されての孝心のお頼みでゐるから……。「五何を言はれる五百兩の金に私が手支へたと……。」と五兵衛が鐵面はもう三角になつて来た。長さア我等も、其様義はあるまい。當府切での金持。お蔵の數も四十八あるいろは藏の五兵衛殿が、半箱(五百兩)許りの金にも困りになるなんて、其な譯の有り様筈はないと申して、好い程に致し置いたが、ゆ子息は眞實に困るくと云れてな、其翌日、仙太郎殿の借主、五兵衛殿の受人の證文を持ってござつて……。「五やア!」長……我等も其の證人の所へ判いたして、今日中に五百枚の才登をとされるので、餘義なく此の三次郎殿に泣付いて……。「五貸されたか。」三貸して進めた……。「進せたのも外ぢやアねへ貴君の

判があるからで。申すも如何だが此の長庵老やゆ子息の仙太郎殿では未だ五百兩の目は届かねへ。で宅を見込んで用立てたが、其れ切りで、三月の日は疾うに切れたも今以て何の挨拶もムらんの……。「其時五兵衛は前齒の抜齒を現はして、否なく笑をしました。五其れは貴方が一ばいお強飯を上つたのだ。私は其んな印形など、夢にも知りません。」

第五十一席

「そりや貴君方がお強飯を一杯吃れたのだ。」と空ッ嘯さうにする五兵衛が面前に三次は懐中の紗服包から一通の證文を出して突附けて、三「ぢやゆ主人、此の證文の判は腰判かな。」五兵衛はぢやりと見ましたが、五「勿論でござす。此様な判など覺えもござへません。」三「では此の腰判を用ひて、私方から大枚の金子を騙り取たのは何者かな?」と三次、傍なる刀を引附けて詰り掛けましたが、此方は其様事に恐れるのぢやムいません、五兵衛「私は不知んさ。其りやア此方からお尋ね申してへ程の義だ。何者か私の判を謀判したと……。」三「ムン聞た」とか。其の借主の名前を見ろ!」五「左様、此は仙太郎とありますが……。」三「其の仙太郎てへ、何者だ?」五「然ればさ。以前私が養子に其んな名の奴もありましたが、今は義絶い

たしてね……。長庵はもう好い頃と口を出しまして、主人、こりや迷惑は同様ばかりちや無へ、岩春公も又た此の大金をフイにされちやア此館の申前へ申し譯も無へと云ふで、詰りは三人が不時の難義さね。併し義絶を爲れたと云つても火事は火元さ。貴老の息子爲た借金のだから、此りやア何うでも貴老が大きくお被りなさらんちや傍へ分配りが附きやせん。ねえ、總べて七口で、二千四百兩、其うち二千兩をお持なせへ、四百兩は難義だが手前が何うにか持ちやせう。五何う、馬鹿！と五兵衛は烟管で唾壺を破れよと叩いて、五義絶です。仙太郎めは義絶したんだ。義絶の養子の悪事まで引受るッて、其んな馬鹿……。金「もしもし、義絶ど仰しやるけれども、公儀帳は矢張り當家の養子でせう。其れちや納まらねへ。言譯にや爲りやせん。引廻しの上獄門の各人は宅から出て、其の紙帳は店の看板になるに極つて居やす。縁喜でもねへ、ソレも無へ身上から出せでは無へ。何萬とお有んなさる。其中から息子息の首代の二千兩、ねへ、安い物だ。功徳だ。」五飛だ事を！と五兵衛は言ひましたが、今長庵の言ふ通り仙太郎の別は確に此の伊勢屋にある。だから謀判の罪人は一も二もなく此店から出まして、金で濟むのを濟まさず凡一人を殺したと云ふ公儀のお憎悪みから、引廻しの前に立つ罪状の紙帳は、此の伊勢屋の有らん限りお預にな

つて一年に兩度、檢めの役人が来る。此が此店の不縁喜、町内の不外聞のみならず、其の送迎の入費も夥多しいので、此事を言はれると強情の五兵衛も青葉にしほく、二千兩といふところへ二百兩ぐらゐも出して、何うにか話を附けて貰はうかと云ふ氣にも爲ります。其れには最一つ、例の人氣役者の仙太郎のこと。其れが謀判の獄門と云ふのを聞いて、さア店も奥も大騒ぎ、手代も丁稚も權助もお三も物泣といふので、彌々事を内濟に納めませねば如何なる珍事が出来も計られぬと云ふ有様、茲で五兵衛も遂に我を折つて、手代の歎願に従つて。兎にも角にも番頭久八なる者に相談して返詞は此の方より致さうから、其れ迄の間、出訴等は見合せ下さる様との詫を入れまして、漸やく長庵等を追歸して、早速鎌倉河岸の宅へ久八を迎へに遣りますと。其處も前申した亂竹騒動。醫者よ外科よ、按摩よ、膏藥よと申す其の寢床の中では、久八、うん／＼唸つて居る始末。使ひに參つた小僧肝を潰して飛んで歸つて、于旦那様、大變で、番頭さんも今し方來たあの長庵に撲られて。大騒動です。五「いや其りやア事件だぞ。」と五兵衛も最う自分も半分氣狂ひの體。久八の容體を見舞に參つて、其の足で皆川町の甲州屋（仙太郎が實家）へ廻つて、扱て慇慇の次第」と申すと主人吉兵衛も仰天いたして、其れで見ると其の證文も何う云ふ機關があるのだから分らない。

幸ひ私が此懇意に願ふ八丁堀の與力衆に大河内様と云ふがある。此れへ上つて行立を以話し申したら、併は併屋で、又た好い申考へがあるかも知れぬ。」と、此で吉兵衛、五兵衛を同道して八丁堀の町與力、大河内銀太夫殿方へ出掛けて行きました。

第五十二席

甲州屋吉兵衛に伊勢屋五兵衛を同道いたして八丁堀の町與力大河内銀太夫が方へ參つて、吉免を被ります。」女、何方から。」吉、私は神田皆川町の吉兵衛にムります。旦那様も在宅なら目通りを……。下女は引込んだが、又た出て參つて、女、此方へお上りを。」座敷へ通されて茶煙草盆が出ますと、續いて出て来たのが主人の銀太夫、五十幾つかの年配、黄八丈の平生着に黒袖か何かの羽織を着て、手提煙草盆を提げて居ります。此人は前席に申した藤掛道十郎を調べた仁、吟味の方では中々の利者でござります。銀、お、吉兵衛どの、好く見えられた。はい、はい。あの其方のがあの仙次郎（仙太郎）の養父の五兵衛どのかへ。はい、はい。以後は心易う……。此で小間使は新たに養花を持って来る。銀太夫は其の湯呑の茶を豊かに啜つて、銀、ああ、今日は何か用かい。此方の兩人は先刻から氣が急いでうすくし

